

目次

巻頭言			
地域の知を見つめなおす	北海学園大学教授	手塚 薫	1
「記憶地図」による祭礼の可視化と活用	文学研究科日本文化専攻修士課程1年	蟬塚 咲衣	3
課程科目学生レポート			
ミニミュージアムのねらいと講評	北海学園大学教授	手塚 薫	9
博物館経営論 ミニミュージアム制作を終えて	人文学部日本文化学科3年	酒井 葵	11
博物館経営論 「ミニミュージアム制作」で得た展示目的の重要性	人文学部日本文化学科3年	本間 藍花	21
2020年度 博物館資料論 講評	北海学園大学講師	水崎 禎	28
博物館資料ドキュメント 『起き上がり小法師』	人文学部日本文化学科2年	西須 汐音	30
博物館資料ドキュメント 『十字形板状土偶を模したキーホルダー』	経営学部経営情報学科1年	渡辺 一史	36
博物館資料ドキュメント 『筆入れ (マグネット筆入れ)』	経営学部経営情報学科1年	松山陽奈子	41
博物館資料ドキュメント 『腕時計』	人文学部日本文化学科1年	飯塚 美月	48
博物館資料ドキュメント 『ハンカチ (がまくんとかえるくん)』	人文学部日本文化学科1年	一色紗矢香	53
博物館資料ドキュメント 『ぬいぐるみ (Lively Islandのピグミー)』	人文学部日本文化学科1年	栗原 一華	61
博物館資料ドキュメント 『Wii ゴールデンハンドル』	人文学部日本文化学科1年	佐々木円香	67
博物館資料ドキュメント 『ぬいぐるみキーホルダー ちびぬい Sindy』	人文学部日本文化学科1年	四戸 里美	73
博物館資料ドキュメント 『ブーツ (coche et coche)』	工学部社会環境工学科1年	阿部 千更	81
博物館資料ドキュメント 『ブルゾン (STUSSY)』	工学部生命工学科1年	片岡 小雪	88
編集後記			94

*学生レポートの掲載にあたり、体裁を整える必要から表記の統一などの手直しを行っています。

巻頭言

地域の知を見つめなおす

北海学園大学教授 手塚 薫

700 万年間におよぶ人類史のなかで、人類は生産と消費のサイクルを延々と繰り返してきた。産業革命以降、その総量は激増し、それに起因する環境問題は今や地球規模に広がってしまった。人と地球と経済活動の調和が一刻も早く保たれることが求められている。環境保護の分野では「エコロジカル（生態学的）・フットプリント（足跡）」というおなじみの用語が使われ、現代人の生活様式がいかに持続可能な開発レベルを逸脱しているのかを白日の下にさらし、警鐘をならす指標となっている。これは社会を維持するための資源をそれに必要な陸地／海洋の面積に換算したもので、たとえば、日本人と同じ生活を世界中の人がしたとすると、地球は 2.9 個分必要になるといった具合である（WWF 日本のエコロジカル・フットプリントより）。イスラエルの研究チームが、地球上で人間がつくりだしたもの（人工物）の総重量が、動物や植物などの総重量を上回ったことを、2020 年 12 月 9 日付英科学誌ネイチャーに発表した。都市開発などによって人間が建造したビルや港湾・道路と日常生活に必要な容器、衣服、家電、衣類など製造した人工物が指数関数的に急増しているのに比べ、生物量は森林伐採や土地利用形態の変化によって減少している。

こうした現代の地球上に山積する諸問題を解決するためには、理化学的な最新テクノロジーばかり注目を集める印象が強いが、国内外の日常生活地域に生きる人々が育んできた情報、知識、知恵を含む「地域の知」を有効に活用することも重要である（日本学術会議が提言した、2008 年『『地域の知』の蓄積と活用に向けて』より）。「地域の知」とは、地域に関わる情報、知識、そして知恵であるが、単に構造化された文字ないし数字などの記号以外にも、体験や伝承に基づいて身に付いた生活の知恵も想定されている。それらが収集・蓄積されるだけではなく、地域に生きる人々によっても活用され、地域社会の福祉が増進することが何よりも大切であり、地域社会が抱える様々な問題を解明し、解決していく方途を見出し、それを未来への「正の遺産」として受け渡さなければならないと、この「提言」では指摘している。地域の知には、三陸など津波常襲地で伝えられている、津波が来たら各自がばらばらに逃げよという「つなみてんでんこ」という、その地域に長年暮らしてきた人々ならではのサバイバル術などがすぐに想起されよう。文化人類学や民俗学の分野で参照されることの多い「民族知」・「民俗知」・「在来知」といった術語に相当しよう。構造化されていない「地域の知」は膨大な量にのぼり、断片的で、明示的になっていないことが多く、共有化されないまま、時の経過とともに失われてしまうものも少なくない。「地域の知」を共有するための制度的、技術的な基盤の整備が遅れていることがその一因にある。それらを解決する手立てとして、「提言」のなかでは、「地域の知」の一元的検索・処理が可能となる「地域の知」の共有プラットフォームを構築し、取得・視覚化・操

作・空間解析を可能にすることが重要であるとしている。

本学の学芸員課程においては、奥尻島で学生が主体となる研修を毎年実施し、島内の歴史・文化、環境、年中行事、祭祀等の聞き取りを行ってきた。地域住民の記憶と伝聞、つまり、オーラルヒストリー（口承記録）を地理情報システム（GIS）を用いながら位置情報と結びつけて地図に表示し可視化する「記憶地図」の作成を続けている。GISにより、分析・作成・表示が容易になり、成果をデジタルアーカイブ化することで ICT での公開も可能になるという特性がある。これなども、上述した取得・視覚化・操作・空間解析を可能にする優れたプラットフォームの1つと言えるだろう。ビジュアルを介することで事実が雄弁に伝わり、記憶地図を見る者の想像力を喚起しやすいという特性がある。一方で GIS を駆使した可視化には、疑念が表明されることもある。学生と一緒にとりまとめた記憶地図を、学会で発表したり、学術誌に投稿したりするときに向けられる類のものである。それには主に「GIS ミラクル論」と「主客分離」の2つがある。

前者は GIS によって、これまでは全く不明だった新事実が明らかになるだろうという誤解に基づいているのだが、従来の手法でも同じ結果を導くことができたのではないかという批判である。ワープロと手書きの相違と言えればいいのだろうか。旧来の技術との間に連続性があり、必ずしも越えられない溝が横たわっているわけではない。後者については、対象との間に距離がおかれ、五感のなかの視覚が優位に立ってしまうために、地域住民を自己から切り離して客体として観察し、対象化してしまっているのではという懸念である。たしかに、被災地の地域景観を、GIS を用いて表示しようとする記憶地図の手法では、復興の行程を鳥の目で、現代ならさしずめドローン的に冷徹に俯瞰することはできても、その土地の上で繰り広げられていた一人ひとりの住民の生活の営みからは遠ざかってしまうように見える。しかし、再建された街の上での住民のつながりや絆を築き直す過程までは表現することができないのだろうか。実はそんなことはないのである。そのために、記憶地図では、われわれが自分たちで直接聞き取った住民の様々な想いや経験、記憶が証言という形で地形図上に重ね合わされ、合成されているのである。

「記憶地図」による祭礼の可視化と活用

文学研究科日本文化専攻修士課程 1 年 蟬塚 咲衣

1. はじめに

筆者は、大学 1 年次に初めて奥尻島を訪れ、3 年次からは奥尻島における祭礼と災害の結びつきに着目し、研究を行ってきた。奥尻島には、12 カ所ある神社で行われる例祭や、観光資源にも活用されている「奥尻三大祭」など、数多くの祭礼が存在している（図 1）。様々な祭礼を調査するなかで、それぞれの特色や祭礼継続のための工夫が明らかになったり、既に神輿や山車が失われてしまった地域のかつての例祭の様子をうかがえたりと、先行研究には詳述されていない新たな事実を知ることができ、非常に興味深く感じている。

本報告書 31 号と 32 号では、島内の神社例祭で唯一、北海道南西沖地震（1993）の直接的な影響によって休止に追い込まれた、青苗地区の青苗言代主神社例祭について述べた。

2019 年発行の 31 号では、震災による例祭の変化に着目し、地元住民が感じている例祭の意義や、神輿に施された龍が鯨を抑えつける彫刻による災害伝承の様子を明らかにした

（蟬塚 2019）。2020 年発行の 32 号では、2019 年に巡行が突如中止になった理由と例祭の今後に関して考察を行った（蟬塚 2020）。

本稿では、前号までのように地元住民の証言を中心に取り上げるのではなく、それらの記憶をどのように可視化し、活用するかということに焦点をあてたい。したがって、これまで様々な祭礼を対象に作成を行ってきた「記憶地図」のうち、賽の河原まつりと青苗言代主神社例祭の 2 テーマについて取り上げ、今後の活用と展望について述べる。なお、今回取り上げられなかった、谷地地区の「記憶地図」に関しては佐々木ら（2019）文献、澳津神社例祭の「記憶地図」に関しては蟬塚ら（2021）文献をご参照いただきたい。

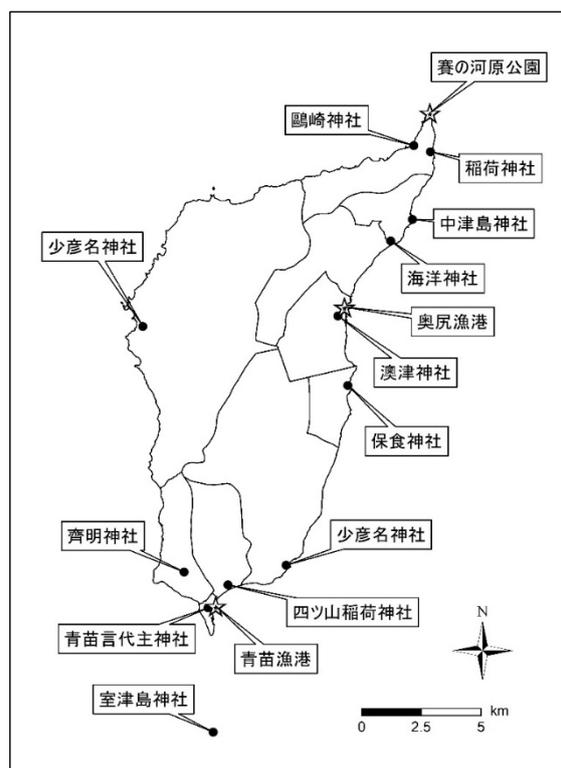


図 1 奥尻島における主な祭礼会場
(丸印：神社例祭、星印：奥尻三大祭)

2. 「記憶地図」と GIS

「記憶地図」とは、個人が有する記憶や経験を地図上に共有・描出することを通じ、物的記録媒体に統合する過程およびその結果を指す（蟬塚ら 2021）。近年、「記憶地図」の先行研究において、GIS(地理情報システム)を用いたアーカイブが行われている（蟬塚 2021）。

GISとは、地球上に存在する地物や事象をコンピューターの地図上に可視化し、情報の関係性、パターン、傾向をわかりやすいかたちで導き出すツールである¹⁾。GISを使用し地図上に可視化することによって、これまで量的な情報として扱うことが難しかった祭礼や民俗芸能の巡行ルートや、祭礼において重要な意味を持つ特定の地点、人々が個々に有する記憶などの情報を共有することが可能になった。特に「記憶地図」は、文化遺産の復興や継承に有用であるとされているほか、地域の人々と景観・まちなみとの関係といった空間的側面について考察する際にも活用されている（蟬塚 2021）。

上記のような先行研究で明らかになった利点を活かし、筆者もGISを用いたデジタルでの「記憶地図」作成を行っている。しかし、それに対して従来のアナログの手法との違いを問う声があることも事実である。GISを使ったのだから、従来の手法では成し得なかった新たな知見が得られるだろうという「GISミラクル論」の存在も知ることとなった。

ここで一度、GISが人文学の分野にどのような利点もたらしたのかについて触れたい。矢野（2009）は、情報技術を用いた人文学を指す「デジタル・ヒューマニティーズ」について論じるなかで、人文地理学は1980年代後半に欧米で始まったとされる「GIS革命（技術革新によるデジタル地図の高度な空間解析の実現）」によって、これまでは書くことも見ることができなかった位置情報を持った膨大なデータを管理・加工し、高度な分析や判断が可能になったと述べている。さらに、GISは人文地理学以外にも、歴史学や考古学といった様々な学問や産業に影響を与えた。また、1980年代以降のパーソナル・コンピュータの普及に伴い、人文学に関する資料がデジタル化され、膨大なデータベースの構築や、インターネットの普及によるWebを用いたデータベースの配信・活用が行われるようになったことから、文化財のデジタル化およびインターネット配信が、デジタル・ミュージアムの1方法として期待されている（矢野 2009）。

GISの機能についてまとめると、「作成（アーカイブやデータベースの構築）」・「表示（情報の可視化やWeb上での展開）」・「分析（空間解析）」という3点の要素を持ち合わせていることが特徴である（蟬塚ら 2021）。これらの機能を基に、これまでに筆者が行ってきたGISの活用方法を振り返ると、「作成」のうちのアーカイブ、「表示」のうちの可視化、「分析」に相当することは概ね達成できたが、データベースの構築やWeb上での展開といった点に関しては未だ不十分である。先述したような「アナログの手法においても可能ではないのか」という問いに対して、その違いを活動のなかでより明確に示すためには、可視化した情報をデジタルであることの強みを活かしながらどのように蓄積し、ArcGIS Onlineなどのインターネット上で公開できるかを考えていくことが今後の課題となるだろう。

3. 調査対象地と各祭礼の概要

奥尻島は北海道の南西沖に位置し、檜山管内に属している。2021年2月末の時点で人口が2,481人、世帯数1,509世帯である²⁾。人口は最も多い時で8,000人を上回っていたが、近年は減少傾向にある。島内は10の字と16の地区に分かれており、島の南端に位置し奥尻空港に隣接する青苗地区と、東側中央に位置しフェリーターミナルを有する奥尻地区に

人口が集中しており、駐在所や郵便局といった主要施設の立地状況から、島内では2地区の様相を成している（蟬塚 2021）。震災直前である1989（平成元）年には小学校5校、中学校2校、高校1校が存在していたが（奥尻町役場 2003）、現在は小学校2校、中学校1校、高校1校となっている。

本稿で取り上げる1つ目の祭礼は、賽の河原まつりである。毎年6月22～23日に島の北端にある賽の河原公園で行われており、「奥尻三大祭」の1つである（図1）。なぜ22日に法要を行うのかについては、奥尻町学芸員の稲垣氏によると、地元住民の間で「稲穂は対岸が近いため、郵便物の郵送など独自に舟の往来があったが、舟が奥尻島に戻る際に濃霧で迷ったとき、地蔵が現われて帰るべき方向を指し示したのが22日だった」という言い伝えがあるという。賽の河原は、明治期以前から水難者の慰霊地とされており、明治20年8月に堂宇が建立された（奥尻町役場 2003）。また、道南五大霊場の1つであり、北海道南西沖地震の慰霊地にもなっている。まつりでは、奉讃会組織が説教和讃や施食会、精霊送りなど供養や慰霊を行っている一方で、協賛会組織はビンゴ大会やブラスバンド演奏といったイベント的な行事を行っている（手塚 2020）。

2つ目の祭礼は、青苗言代主神社例祭である。毎年8月12～14日に島の南端にある青苗言代主神社で行われている。神社は1831年に恵比須社として創立され、1993年の震災で焼失し、再建された1995年に現在の社名となった（蟬塚ら 2019）。かつては青苗地区の主要産業が水産業だったこともあり、漁師が主体となって行われる活気溢れる例祭だったが、近年は公務員や会社員が増加している（蟬塚ら 2020）。13～14日には、猿田彦・神輿・山車が青苗地区の住民の家々を訪れる巡行が行われる。過去には島内の12地区で、例祭時に神輿や山車が連なる形の巡行が行われていたが、そのような伝統的な巡行形態を現在も留めているのは、青苗地区のみである（蟬塚 2021）。

4. 作成した「記憶地図」について

ここで、実際に作成した2つの祭礼に関する「記憶地図」計4種類を紹介したい。

まずは、2018年と2019年の調査の内容を基に作成した、賽の河原まつりの「記憶地図」である（図2、図3）。この2枚は改訂版（2021年1月20日）であり、凡例の追加や証言の修正を行った。このように2年間の調査成果をアナログの地図にまとめるにあたり、調査者の視点で各年に得られた情報と写真を整理して掲載した。2枚を比較することで、灯籠や涅槃丸を流している方向の違いや、2019年は悪天候でイベントが中止になった一方で法要は予定通り行ったことなどを視覚的に理解することができる。今後、この地図をデジタル化する際の表現方法としては、様々な年代の証言が混在している状態を改善し時系列で別のマップにまとめたり、ベースにしている航空写真を古い時代の地図に変更することで過去からの連続性を意識してもらえるようにするなどの工夫ができるだろう。具体的な活用方法としては、現在住職2名が島内の小学校2校で賽の河原における法要の意義の説明を行っているため、その際に使用していただくことで祭礼の継承にも有用であると考

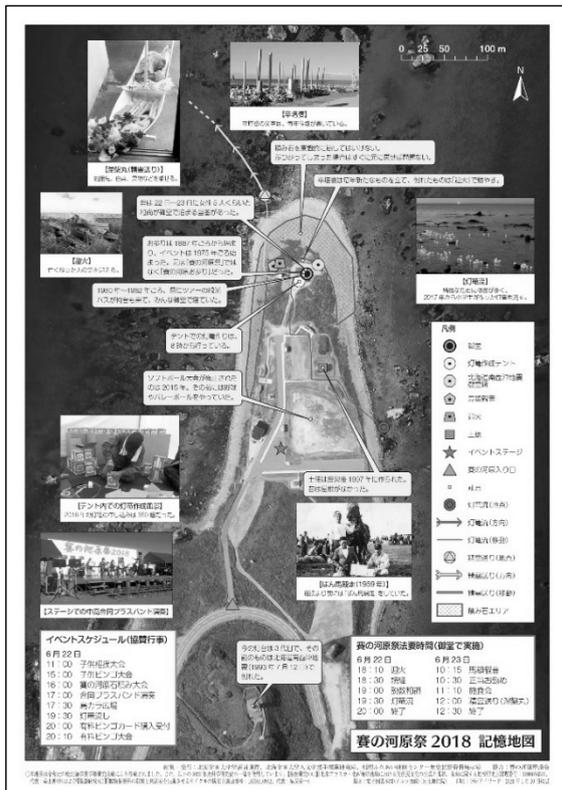


図2 賽の河原祭 2018 記憶地図

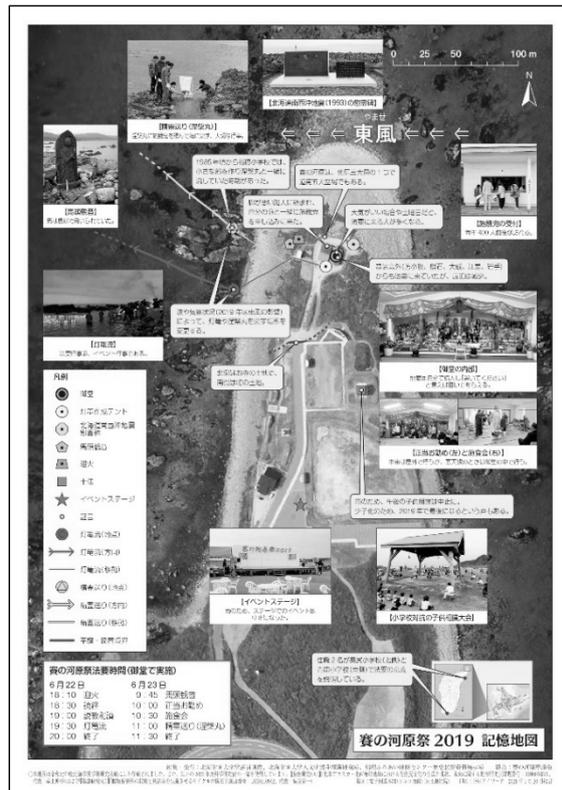


図3 賽の河原祭 2019 記憶地図

えられる。その際には漢字にルビを振り、文字の大きさを変更するなど、多くの方に伝わりやすい地図になるように意見をいただきながら、改良を加えたい。また、法要とイベントが別々に行われているのが現状のため、双方の理解にも繋がるのではないだろうか。

賽の河原まつりの「記憶地図」に関する証言の具体的な内容や、風ベクトルを用いた分析については、手塚（2020、2021）文献を参照いただきたい。

次に、青苗言代主神社例祭の「記憶地図」である（図4、図5）。青苗言代主神社は震災による甚大な被害を受け、それによって祭礼やまちなみにも大きな変化が生じているため、震災前と震災後という大きな区分で作成した。震災から27年が経過しており、過去の特定の時期の証言を得ることが難しいことも理由の1つである。この2枚を比較することで、まちなみの変化による臨場感の低下、参道の縮小、七五三（祭礼のなかで重要な神輿の所作）の変化が明確になり、震災が祭礼に与える影響力と復興計画の重要性を認識することができる（蟬塚 2021、蟬塚ら 2021）。この地図のデジタル化にあたっては、奥尻町教育委員会から提供いただいた古写真が撮影された地点を特定して挿入したり、青苗の特徴的な祭り囃子（ハオイ・楽器演奏）の音声データや七五三の映像を用いることで、祭礼の情報を総合的に記録するデータベースを構築することができるだろう。しかし、個人が所有する記憶やデータを筆者らの現地調査だけで把握することは困難であるため、現地の方々の間で随時情報の提供や意見交換を行い、地図を更新できる体制を整える必要がある。また、巡行ルートの変化（蟬塚ら 2019）など他の調査成果との統合を図っていきたい。具体的な活用方法としては、地域における震災継承の手段の1つとなるほか、今後の祭礼の方向性や災害への対応を検討する材料となることが考えられる（蟬塚 2021）。

状態ではなく、その活動が徐々に地域のなかに根付き、内部で脈々と続けられていくことが望ましいのではないだろうか。パンデミックの収束を待ちつつ、今後も現地でのアーカイブ活動を継続し、GISで可視化した情報を公開・発信できるデータベースの構築を模索しながら、奥尻高校や「チーム島おこし」などといった地域コミュニティの各主体との連携を進めることで、「記憶地図」が継続可能な取り組みになるように努めていきたい。

最後に、本研究を行うにあたり、ご協力いただいた島民の皆様、多くのご指導とご助言をいただいた皆様に深く感謝申し上げます。

注

- 1) esri ジャパンホームページ「GISとは」<https://www.esri.com/getting-started/what-is-gis/>（2021年3月23日閲覧）
- 2) 奥尻町ホームページ「奥尻町の人口と世帯数（2021年2月28日現在）」<https://www.town.okushiri.lg.jp/>（2021年3月22日閲覧）。

参考文献

- ・奥尻町役場（2003）『新 奥尻町史（下巻）』奥尻町役場、奥尻。
- ・矢野桂司（2009）「地理情報システムとデジタル・ヒューマニティーズ—革命か発展か—」川嶋将生、赤間亮、矢野桂司、八村広三郎、稲葉光行（著）『日本文化デジタル・ヒューマニティーズの現在』ナカニシヤ出版、京都、51-64。
- ・佐々木理子、蟬塚咲衣、稲垣森太、手塚薫（2019）「記憶地図作成による地域情報の可視化—奥尻島谷地地区における事例—」『北海道民族学』15:45-54。
- ・蟬塚咲衣（2019）「震災前後の青苗言代主神社例祭について」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』31:45-51。
- ・蟬塚咲衣、佐々木理子、稲垣森太、手塚薫（2019）「北海道南西沖地震における奥尻島青苗言代主神社例祭の復興過程をめぐる考察—GISによる祭礼ルートと時間の変化が意味するもの—」『歴史都市防災論文集』13:163-170。
- ・蟬塚咲衣（2020）「2019年の青苗言代主神社例祭の現状とこれから」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』32:34-45。
- ・蟬塚咲衣、稲垣森太、手塚薫（2020）「地域課題に直面する奥尻島青苗言代主神社例祭とその対応」『歴史都市防災論文集』14:123-130。
- ・手塚薫（2020）「祭礼の可視化と記憶地図」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』32:46-54。
- ・蟬塚咲衣（2021）「「記憶地図」を用いた奥尻島青苗言代主神社例祭における災害伝承のあり方」『地域生活学研究』12:1-15。
- ・蟬塚咲衣、浅妻佑軌、高橋佑惟、佐々木理子、稲垣森太、手塚薫（2021）「「記憶地図」を通じた奥尻島の2つの例祭巡行の比較」『北海道民族学』17:33-49。
- ・手塚薫（2021）「「記憶地図」を用いた奥尻島「賽の河原祭」の可視化と知識変換」『北海学園大学人文論集』70:25-46。

ミニミュージアムのねらいと講評

北海学園大学教授 手塚 薫

上級年次に開講されている「博物館経営論」で学んだ知識を活用し、ミニミュージアムの展示計画を練り、ミニチュア模型、図録、ポスターを実際に作成してもらう試みを毎年実施している。仕上げた作品を、経営論の履修学生たちの前で見せながらプレゼンテーションを行い、さらには学生たちが個々の作品の評価を担当する。さながら学芸員課程教育の総決算という性格を有している。制作は、レポート作成や試験前の多忙なスケジュールをマネジメントしながら自宅や教室、学芸員課程実習室で継続される。現実と遊離したテーマパークや既存の展示空間を再現してよいというような簡単な課題ではない。現実のミュージアムは公益性を有し、活動の成果を入場者数や収益のみで判断してはならない一方、その経営を担うには経営資源を最大限に活かし、透明性を保ち法令を遵守することも求められる。制作にあたり、実際のミュージアムでも現実存在するような葛藤をも十分考慮してもらっている。

博物館に携わる者は、資料の多面的な価値を尊重し、敬意をもって扱い、資料にかかわる人々の多様な価値観と権利に配慮して活動する。

これは平成 22 年度に文部科学省の委託を受けて、財団法人日本博物館協会がまとめた『博物館倫理規定に関する調査研究報告書』の行動規範 2.「尊重」にある一項である。敬意と愛情をもって資料に相對するのは、別に貴重な資料の梱包時に限定されない。敬意や愛情は、倫理的な価値観をむりやり学芸員に押し付けることで生まれるわけではない。資料が有する価値を適切に理解し、価値があると思えるからこそ資料を大切に扱う機運が生まれるのである。一見しただけではそれとはわからない資料の価値を広く世のなかに周知する責務もある。

「資料にかかわる人々」とは、ミュージアムの関係者だけではなく、元の所有者、寄贈者、骨董店、資料製作者、資料閲覧者、その資料を活用しようとする人等、多様なステークホルダーが関与している。

「多様な価値観」については、個々の資料に対する見方はそれぞれの立場によって異なる場合がある。ミュージアム関係者は、そうした見解の相違にも配慮しながら資料を取り扱うことが求められる。資料の真贋問題や来歴問題などが表面化することもある。戦争時の混乱に乗じ不当に取得した作品の所有権の推移や賠償責任などもそうした問題に含まれる。そのためにも資料の来歴などのコレクション・ドキュメンテーションの整備が欠かせない。

さて、経営資源の 5 大要素は、ヒト、モノ、カネ、情報、時間とされる。優れた企業ではさらに、数値化できない価値観のような要素をも重視する。マッキンゼー&カンパニー社が提唱するソフトの 4 S（経営スタイル、スキル、スタッフ、シェア・共有された価値観）とハードの 3 S（戦略、組織、システム）は相互に補い合って組織の価値を高める。ソフト要素は人の価値観や感情がかかわり、変更が容易ではなく、

一方のハード要素は経営者の意思や企業努力で再構築がしやすい。マ社では「共有された価値観」を、最重要な「S」に据えている。「共有された価値観」は、組織に所属する全メンバーの行動の規範になる考えかたであり、「ビジョン」と「基本理念」から構成される。

ミニミュージアムでは、現代社会が直面している諸課題の解決に資するため、なによりも新たな価値の創造を重視している。「ビジョン」はゴール達成のために目指すべき短期目標とし、「基本理念」はそれよりやや抽象的で長期的な展望とした。この2つが複合・融合して「展示趣旨」（共有された価値観）になるというフローを認識してもらうように心がけた。さらに「現状分析」することで、出発点の明確化を促し、現時点での課題とその解決を意識させた。国内外のSDGs（持続可能な開発目標）の17目標と169ターゲットにかかわるような喫緊の社会問題（例えば環境問題）にとらわれ過ぎることを覚悟したが、自由に夢を膨らませ、楽しみながら展示制作物（ミニチュア模型、図録、ポスター）の完成に到達した学生が少なくなかった。

本誌では、紙数の関係から、作品のプレゼンテーション後に実施した学生たちによる投票の結果、ポスター・図録・展示部門をあわせた総合点で最高評価を獲得した学生2名の作品を紹介する。

ミュージアムの起源は、15～17世紀にかけてのヨーロッパ各都市で王侯貴族がつくった「ヴンダーカンマー」にある。ドイツ語で「驚異の部屋」を示す語からも想像できるように、世界中からかき集めた標本・珍品の類を室内に圧縮陳列し、見る者を圧倒するという効果を狙っていた。ハンティングトロフィーなど自然品や人工品を問わず、実際には存在しない創作されたいかものまでそろっており、あやしげな見世物興行的な雰囲気満ちている。酒井葵さんの「見世物」をテーマにしたミニミュージアムは、黒を背景にした展示室内の暗い空間とマッチし、友人たちの「おどろおどろしい」という評価にも集約されているように、人間の根源的な欲求を刺激し、展示品にストレスなく誘っている点にある。何をテーマにするかは、やはり自分の最も関心のあるトピックに的を絞ることが早道であることの典型的な見本であろう。

「レースの世界」を制作した本間藍花さんは、企画から完成まで自分一人でやり遂げることの困難さを感じたという。ブルーを基調にしたポスター、図録はシンプルですっきり見やすく情報に過不足がない。ハンドメイドという世界の奥深さから、定義づけが難しいが、手芸を通じてハンドメイドに親しみ興味を持ってもらい、歴史の深さや魅力を体験しつつ、知識を体得する機会を提供するというコンセプトを掲げた。目標設定と計画性の重要性を認識することになったようだ。どちらがかけても自分の意図を人に伝えることは難しくなる。この経験は卒業後社会に出てからも有益なものになるだろう。また、制作前にサイズをしっかりと確認しなければ仕上がりが大きすぎたり小さすぎたりするという。図録と展示（模型）の2つがあってはじめて企画展は成立するという感想は、現実のミュージアムの世界にも当てはまる。

次ページから2名の作者に、制作時に注意したこと、成長できた点について記述してもらった。これからミニミュージアムを制作する学生は、折に触れ熟読し、ぜひ制作時の指針にしてもらいたい。

博物館経営論 ミニミュージアム制作を終えて

人文学部日本文化学科3年 酒井 葵

はじめに

博物館経営論の一番大きな課題は、なんといってもミニミュージアム制作である。ミニミュージアム制作とは、簡単に言うと自身で一から企画展を構想し、その企画展の展示室の模型、図録、ポスターを期間内に一人で制作するという課題であり、それらの完成度によって成績が決まる。このことを私が初めて知ったのは、博物館経営論1回目の講義のときであった。コロナの影響によって対面授業が開始されておらず、オンラインでの講義であったと記憶している。その際に、オンライン上でミニミュージアムについての解説の資料と、実際にミニミュージアムを過去に制作した先輩のレポートが公開された。これら2つの資料に目を通し、自分は過去の先輩たちのような完成度の高いミニミュージアムを制作することができるのか、また、期限までに納得のいく作品を完成させることができるのか、とても不安になり、1回目の講義ですでに焦っていたことを覚えている。結果、その焦りは制作が終わるまで続いた。

本稿では、このミニミュージアム制作について改めて振り返り、この講義で得た経験や知識を再確認していきたい。

1. ミニミュージアムの構想

実際にミニミュージアム制作に取りかかる前に、その準備段階としてまず行ったのは、どのようなミニミュージアムを作るのかを決める作業であった。つまり、テーマ決めである。この段階で、企画展の名前と展示室図面の提出が求められた。

テーマ決めは、ミニミュージアムを作るにあたって、大きな意味を持つと考えられる。テーマによって、ミニミュージアムの作りやすさは変わるからだ。ここで勧めたいのが、テーマを自分の好きなもの、興味のあるものから選ぶということだ。また、人文学部の学生ならば、今後書くことになる卒業研究のテーマに関連するものをテーマにすることもお勧めである。これによって、展示資料を決めるときや図録を作成するときなどのモチベーション低下を多少は防げるのではないかと思う。また、そのテーマについてすでに持っている知識があれば、調べる時間の短縮にもなるし、逆に調べて新しく知識を得ることも、興味のあることであるからそれほど苦痛にはならないだろうともいえる。

ここで、実際に私の例をあげさせてもらいたい。私の企画展のテーマは「見世物および見世物小屋」であった。見世物や見世物小屋がどんなものであるのかということは後の現状分析の項目で述べるが、このテーマは私の興味のある分野であり、いずれ卒業研究でも取り上げたいと考えていた題材であった。このテーマにしたおかげで、知識の必要な図録作成や、模型に利用した解説パネルの製作の際など、比較的楽しんで作業を進めることができた。

2. 現状分析・ビジョン・コンセプト

企画展のテーマを設定し、企画展の名称と展示室の図面をおおまかに決め、提出した後、私は企画展の現状分析・ビジョン・コンセプトを考える作業に取りかかった。結果的にこれは大成功で、なぜなら先にこれらを考え文章化しておくことで、模型や図録を作る前にあらかじめ企画展の方向性を固めることができたからである。私の例で言えば、まずは現状分析をし、そこから見世物小屋の数が現在では極端に減っており、見世物が自然消滅すると言われているという課題を見つけたことで、その課題の解決につながる展示を作ることを決めることができた。結果、企画展の内容を章分けした際に、「見世物の現状」という章を作り、その章の展示を最後に持っていくというかなり細かい模型の構想をこの段階ですではっきりさせることができたのである。実際に模型作りに進んだ際も、この章が今回の企画展の目玉であるということを常に意識して作業することができた。同じように、ビジョンは見世物がどういったものであるのかを知ってもらうことを目標に設定したため、展示室の入り口付近でまず見世物や見世物小屋の説明をする解説パネルを置くことを決めた。また、コンセプトで定めた見世物の歴史や内容を知り、見世物がどういった風にわたしたちの生活と関わっていたのかについて考えてもらうという項目から、展示資料は時代で区別して展示することにしたりなど、後の展示資料の配置や企画展の章分けに大きく役立つ構想をこの段階ですでは頭に入れておくことができた。そのため、模型や図録作りを先に始めるよりも、あらかじめこれらを設定し企画展の方向性を定めておくことで、より制作がスムーズになるのではないかと感じた。

以下、私が実際に図録に掲載した現状分析・ビジョン・コンセプトをそれぞれ掲載する。

現状分析

江戸時代、庶民が最も楽しんだ娯楽といえば、それは間違いなく見世物であった。見世物とは、入場料を取って、珍奇なものや曲芸、奇術などを観客に見せる興行物のことをいい、それを行っていた場所は見世物小屋と呼ばれた。ちなみに、大道芸も一種の見世物だと考えられており、現在の私たちにとってはこちらの方が馴染み深いかもしれない。しかし1970年代には50軒近くあった見世物小屋の数は現在極端に減り、見世物は自然消滅するとまで言われている。その原因として、見世物を行う場所が減ったことや後継者がいないということ、また、見世物においてしばしば見られた差別的または非人道的な要素が、社会に好ましくない影響を与えるとされ排除されていたことが考えられる。見世物小屋および見世物の数が激減した今日、そもそも見世物とはどのようなものであるのか、それすら知らない人の方が多いときえいえる。しかし、2000年代前半に見世物に関する文献が多数出版されたり、2016年に国立民族学博物館、2017年に国立歴史民族博物館で特別展として見世物をテーマとした「見世物大博覧会」が行われるなど、見世物に焦点を当てた流れも現れつつある。

現状分析では、テーマである見世物について、まず見世物そのものの説明から入り、その後見世物が置かれている状況と課題について述べた。現状分析は、取り上げたテーマが直面している課題を明らかにするためのものであるといえる。選ぶテーマによってその課題は様々であると思われるが、その課題を見つけやすくするためにも、繰り返しにはなるが、普段から興味を持っている分野を企画展のテーマにすることを勧めたい。また、私のように企画展のテーマが一般的に知名度が低い題材の場合は、この現状分析でまずその題材の説明をしておくとうわかりやすいと思われる。図録の一番初めに、この現状分析が据えられているからである。

ビジョン

- ・見世物および見世物小屋とはどんなものであるかを知ってもらう
- ・実際に見世物とされていたモノを見ってもらう

ビジョンは短期的な目標であり、企画展の来館者にどのような行動をおこしてもらいたいかを自分なりに考え、この二点をビジョンとした。テーマの知名度も考慮し、まずは見世物や見世物小屋という存在を知ってもらうことを第一の目標とした。そして、実際にどのようなものが見世物と呼ばれていたのかを展示資料を通して知ってもらうことを第二の目標とした。

コンセプト

- ・見世物の歴史や内容を知り、見世物がどういった風にわたしたちの生活と関わっていたのかについて考えてもらう
- ・見世物はなぜ現代で廃れてしまったのか、その理由を自分なりに考えてもらう
- ・見世物は、今現在どういった形でわたしたちの生活に影響を与えているのかについて考える
- ・見世物に関する文献の文庫化
- ・見世物研究の活性化
- ・衰退しつつある文化の扱い方を学ぶ

コンセプトは長期目標ということで、先のビジョンに比べてやや具体的であり、より専門的なことを意識して、現状分析における課題の具体的解決策になり得るものをあげた。今考えてみると、見世物に関する文献の文庫化に関しては、この文面だけでは何を意味しているのかが分かりにくかったような気がする。補足しておくとう、見世物に関する文献は非常に少なくかなり専門的で、また古い時代に書かれたものが多く読みにくいという

課題があると感じていたため、現在の私たちでも読みやすく、専門的な知識がなくても気軽に読めるような見世物に関する文献が今後もっと増えてくれることを願って設定したコンセプトであったが、あくまで文献に関するわたしの個人的な要望となり、企画展のコンセプトとしては不適切であったような気がするため、見世物に関心を持ってもらい、見世物に関する文献に触れてもらうという来館者を主体に考えたコンセプトにするべきであったと感じた。また、見世物研究の活性化というコンセプトに関しても、現在見世物それ自体が衰退しているため、その研究を行っている人も多くは見られないと感じ、この企画展を通して見世物に詳しい人や興味を持ってくれた人たちと協力し、見世物に関する研究をさらに活発にしていくということを目的にして考えたものであったが、研究とまでいくとあまりにも専門的すぎると感じたため、これもコンセプトとしてはふさわしくなかったと思う。このコンセプトはふさわしい形に訂正するのが難しいため、そもそもコンセプトとしては外すべきであったと感じる。

3. 模型の制作

ミニミュージアム制作の中で、私が最も苦勞し、時間がかかったのがこの模型制作であった。



【画像①】 完成した模型

現状分析・ビジョン・コンセプトを固めたすぐ後に、あらかじめ提出していた展示図面をもとに入口と出口にあたる部分に穴をあける作業、それから床と壁に紙を貼る作業を始めた。入口と出口の穴開けは、カッターを用いて行ったのだが、切り込みを入れていくたびに発砲スチロールの層が出てきて掃除が大変だった。作業の時は、下に新聞紙などを敷いてやるべきだったと後悔した。展示室の床と壁は、見世物小屋の非日常感や恐ろしいイメージを出したかったため、黒で統一した。私は黒の画用紙を用いたが、過去の先輩方のレポートを見てみると、実際の壁紙を用いたという例もあり、その方がよりリアルな展示室になるのではと感じた。また、床や壁は範囲が広く、画用紙を思っていたよりも多く使ってしまった、途中で足りなくなると記憶している。壁紙や床用に画用紙を使用する場合は、気持ち多めに用意しておくといいかもしれない。また、壁紙はしっかり貼らないと、上の方がはがれてきて見栄えが悪くなり、実際それで後悔したため、上の方がはがれてこないよう頑丈にのり付けしておくことを勧める。

床と壁紙をのりで貼り終えたら、次は通路用の仕切りの作成に取りかかった。私の場合はシアタールーム用の壁の仕切りを作ったぐらいで、仕切りの数自体はそれほど多くはなかったが、床に切り込みを入れ、そこに薄い段ボールで作った仕切りをはめ込む作業はそれだけでも大変だった(【画像①】参照)。

それらの作業が終わったら、図録の制作にも取りかかり始め(4. 図録とポスターの制作を参照)、並行して実際に展示する展示資料の制作や、椅子や展示ケースの制作に取り組んだ。展示資料は写真を展示室の大きさを考慮して印刷した。なお、それらの写真はほとんど国立民族学博物館『見世物大博覧会』から拝借した。これは、見世物をテーマとした企画展の図録であり、同じテーマでミニミュージアム制作に取り組んでいた私にとって非常に役に立ち、参考になるものであった。資料を入れる展示ケースはプラ板と紙で制作



【画像②】チェーンと接触禁止の看板

した。細かい作業であるため、何個も制作するのは不可能だと途中で気づき、実際に考えていたよりも展示ケースが少なくなり、それに伴って展示資料自体も少なくなってしまったのが心残りである。

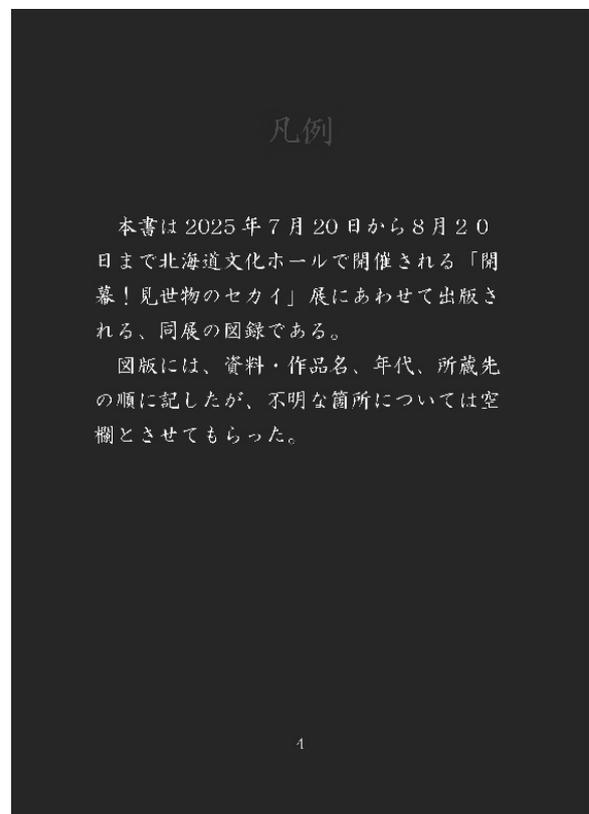
個人的に気に入っている点は、展示ケースには入りきらないような大きな展示資料の前には、チェーンをかけて入れないようにしたり、近くに触らないでくださいと書いた看板を設置したことである(【画像②】参照)。少し雑さも見られるが、実際の展示室らしさが出たのではないかと思う。また、自分の模型では達成できなかったが、絵画資料などを展示資料として陳列する場合は、折り紙などで額縁を作ると、よりリアリティが出るのではないかと感じた。

全体的に通路を広く設定し、ゆったりと観賞できるように設計したが、入口から入ってすぐの箇所だけ通路が極端に狭くなってしまったので、その仕切りはなくてもよかったと感じている。また、この企画展は章ごとに展示資料が分けられており、「第一章 見世物とは」「第二章 江戸～明治にかけての見世物」「第三章 昭和～平成にかけての見世物」「第四章 見世物の現状」と全部で四章に分けたのだが、それぞれの区別が解説パネルの設置だけでなされているので少しわかりにくかったような気がする。床の色を章ごとに変更したり、章ごとに仕切りを作ったりなどの工夫を凝らすとさらにわかりやすくなったかもしれない。

4. 図録とポスターの制作

図録作成は、ミニミュージアム制作のなかで私が最も楽しいと感じた作業であった。図録は、先にも述べたように模型の制作と並行して行っており、模型作りの細かい作業に疲れたときなどに息抜きとして進めていた。また、講義の空き時間や通学中などに、展示趣旨やご挨拶、模型にも用いた章ごとの解説を記したパネルの文章をスマホに下書きするという作業も行った。このように、スキマ時間をうまく活用したため、図録はかなり余裕を持って完成させることができ、納得のいく仕上がりになった。

図録のデザインは模型と同様に、見世物小屋のダークで不気味な印象を際立たせるため、基本的に背景は黒色に設定し、文字は赤または白色を用いた。また、字体にも気を使い、おどろおどろしい雰囲気が出るフォントを選択した。図録のデザイ



【画像③】 凡例

ンからも、見世物小屋の不気味さが表現できたのではないかと思う。

図録の構成については、実際に企画展の図録を参考にすることを強く推奨したい。とくに、もし自身が選んだテーマと似たような企画展を過去に行っていた事例があり、その企画展の図録が発行されている場合は、絶対に役に立つため、図書館などで借りておくべきである。その図録の構成を、そのまま参考にできるからである。実際、私は『見世物大博覧会』という過去に国立民族学博物館で行われていた見世物に関する企画展の図録を図書館で借り、どのような構成で図録ができているのかを参考にさせてもらった。特に、凡例の書き方が参考になった(【画像③】参照)。また、どのような資料を展示するか悩んだときに、同じようなテーマの企画展の図録があれば、そこから資料を拝借し、自分の企画展にも取り入れることができる。私も先に述べた図録から、自分の企画展にふさわしい何点もの資料を拝借させてもらった。資料目録の書き方なども、実際の図録を参考にして書いた方がクオリティアップにつながるであろう。資料目録とは、自身が構想した企画展で展示した資料を全て記すもので、図録においては図版とともに必須項目であると考え、私は先にあげた『見世物大博覧会』の形式に基づいて資料目録を作成した(【画像④】参照)。

資料目録			
1. 見世物とは			
資料名	時代	寸法(縦×横×高さ)	所蔵先
クグリ(入口幕)			個人蔵
人魚のミイラ	現代		国立歴史民俗博物館
2. 江戸から明治の見世物			
資料名	時代	寸法(縦×横×高さ) 単位:cm	所蔵先
絵看板 軽業・足芸一座	明治 22・1889年	136.0×60.0(×15)	国立民族学博物館【以下①】
信西入道舞楽之図	江戸時代	28.2×1427.4	国立歴史民俗博物館【以下②】
大阪下り早竹虎吉 此所 所作事早替り(石橋)	安政 4・1857年	34.3×25.0	①
大阪下り早竹虎吉 大阪下り早竹徳藏・福松 西両国広小路に於興行仕 り候(石橋)	安政 4・1857年	74.0×25.5	川添コレクション【以下③】
大阪下り早竹虎吉 西両 国広小路に於興行仕候(富 士の巻狩)	安政 4・1857年	67.3×24.6	③
大阪下り早竹虎吉 西両 国広小路に於興行仕候(筑 紫の飛梅)	安政 4・1857年	73.2×25.8	③
大阪下り早竹虎吉 かざ ぐるま(風車)	安政 4・1857年	51.3×18.4	③
足芸手踊り 鉄割音吉	江戸時代末期～明 治	32.0×48.0	①
足芸曲持	明治半ば 1980年代頃	27.5×21.0	③
大阪下り女力持 柳川と もよ	安永 5・1776年	38.3×25.5	②

【画像④】実際に制作した資料目録

左から、資料名、(制作された)時代、寸法、所蔵先の項目を設け、章ごとに分けて表形式で情報を記載した。

図録の制作において、私が最も力を入れたのは、図版の作成であった。図版とは、資料の名前、制作された時代とともにその資料の写真を掲載するものである。この図版が図録内の多くのページ数を占めることから、図録において図版は欠かせないものだと考えた。そのため、自身の図録でも図版の欄を設け、図録を見れば企画展にある全ての資料がどんなものであるかを見ることができるようにした。また、全ての資料にそれぞれ解説をつけ、資料への理解が深まるようにした(【画像⑤】参照)。

ポスターの制作は、模型と図録がほぼ完成してから一気に取りかかった。数時間の作業で終わったと記憶している。ポスターも模型や図録と同様に、見世物小屋独特の怪しい雰囲気を出したかったため、暗めの色を基調としてデザインしたことで、自分的には満足のいくデザインとなった(【画像⑥】参照)。

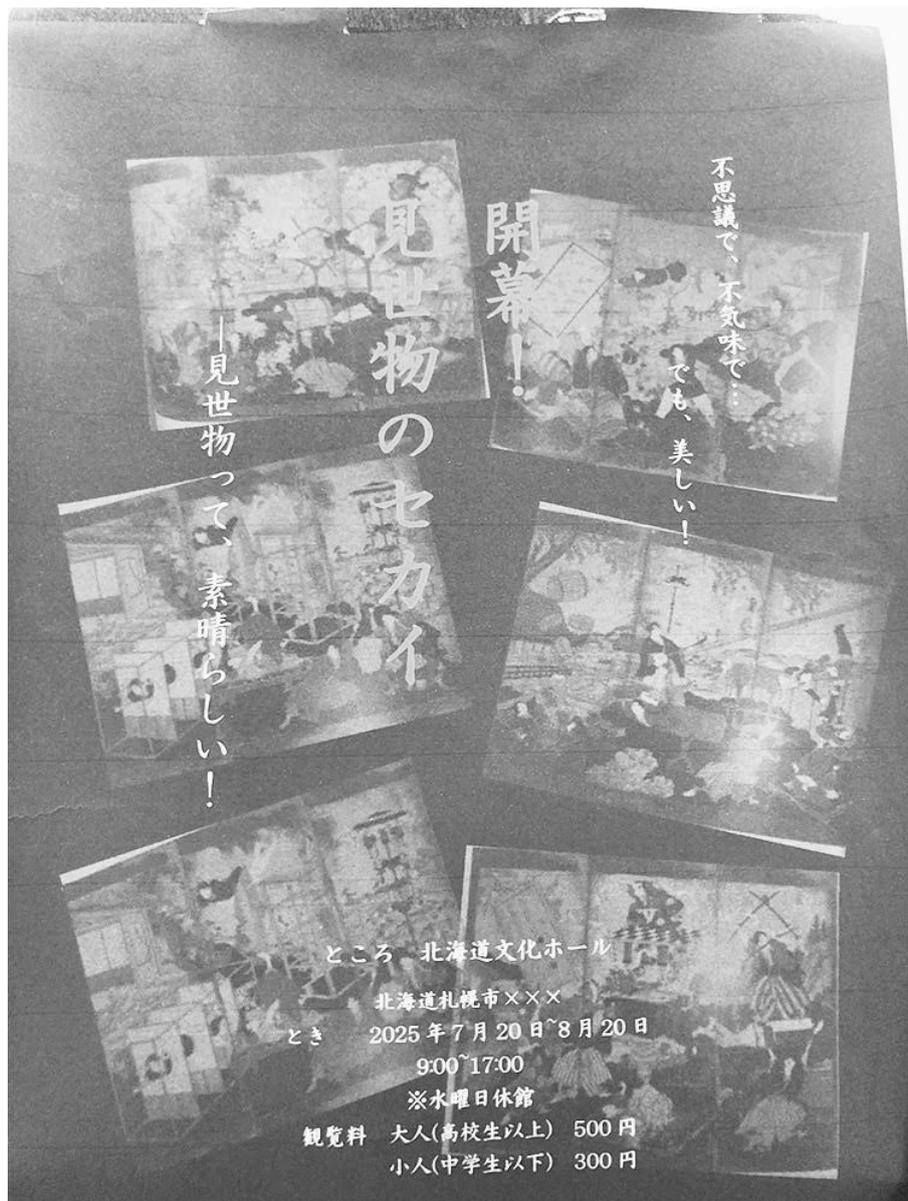
ポスターには、企画展の名称、キャッチフレーズ、ところ(開催場所)、とき(開催期間)、観覧料を記した。特に観覧料は、大人(高校生以上)500円、小人(中学生以下)300円というかつて実際に存在した見世物小屋の値段設定をそのまま参考にさせてもらった。

キャッチコピーを考えるのが大変であったが、キャッチコピーがある方が興味を持ってくれる人が増えるのではないかと思い、頑張って「不思議で、不気味で…でも、美しい!—見世物って、素晴らしい!」というフレーズを絞り出した。見世物の不気味だがどこか美しいというイメージをうまく表現できたのではないかと思う。

背景に使用した絵画は実際に企画展で展示することになっていた資料である。この絵画を見て、なんとなく見世物がどんなものであるのかを予想してもらえればと思ったが、この絵画資料をただ見ただけでは、見世物小屋を知らない人にとっては何のことかわからないだろうから、もう少し一目で見世物とわかるような一例えば口から火を噴いたり、重たいものを軽々と持ち上げているようなインパクトの強い、いかにも見世物らしい実物の写真など—を使用するのもありではなかったかとも思うが、そうするとインパクトは強くなるが、私の重要視している見世物小屋の不気味で怪しい雰囲気から遠ざかってしまうため、結果的にこのデザインで満足している。



【画像⑤】実際に制作した図版



【画像⑥】実際に制作したポスター

おわりに

ミニミュージアム制作を終え、そして本稿を通してその過程を改めて振り返ってみて、さまざまなことに気が付くことができた。

まず、現状分析で課題を発見し、その課題を乗り越えるためのビジョンとコンセプトを考え文章化していくという行為は、自分の頭の中を整理し第三者にわかりやすく論理的に伝える力を養成するのに非常に役立つ手順であるということがわかった。頭の中のイメージだけを頼りに、何となく作り上げた作品は完成度が高いものとはいえない。そのため、ミニミュージアム制作で学んだこの過程を活かし、これから先の卒業研究制作時や就職した際などに生じる困難な課題にぶつかった時などに対処していきたい。特に卒業研究では、今回のテーマと直結または関連するようなものを研究対象とした場合、このミニミ

ミュージアム制作での経験が役に立つことは間違いない。私のゼミは三年次の時点ですでに卒業研究のテーマを決めることになっており、前期ですでに研究テーマのレジメを作成する必要があった。そのため、ミニミュージアム制作であらかじめある程度研究テーマに関する情報を得ていたおかげで、レジメを難なく作り終えることができた。また、図録作成用に借りていた『見世物大博覧会』という図録も、卒業研究に取り組む際に重要な文献であり、図録を卒業研究の参考文献に取り入れることなど全く考えてもいなかった私にとって、そのことに気が付けたのは大きな収穫であった。ミニミュージアム制作は、一日ですべての工程を終わらせて完成させるといった短期決戦型の課題ではなく、コツコツと長期間丁寧に完成に近づけていく長期晩成型の課題であるといえる。これは卒業研究にもあてはまり、今回ミニミュージアム制作という課題を通して得られた、長い時間をかけて(もちろん締め切りとの兼ね合いはあるが)、思考錯誤を繰り返し洗練されたものを完成させるという過程を体験することが、卒業研究制作への大きな備えになったと感じた。

他にも、この課題を通して、計画的に物事をすすめること、そして時には妥協をする必要もあるということがわかった。ミニミュージアムの制作は時間が限られている以上、やらねばいけないこととやらなくてもいいこととの取捨選択が必須であった。もちろん自分のやりたいことはやるに越したことはないが、知っての通りどれだけ完成度が高くても期日に間に合わなければ意味がない。ここで、期日の中でいかにベターなものを作れるのか、いかにベストに近づけられるのかが大事であると感じた。

今回のミニミュージアム制作は、今までの学芸員課程の講義とは違い、最初から最後まで一人での作業であった。課題の難易度も、最高レベルのものであったといえる。しかし、それは言い換えれば、その課題を達成したときの成長もまた、最高レベルであるということである。そのことを胸に、今後の学生生活や就活に取り組んでいきたい。

博物館経営論 「ミニミュージアム制作」で得た展示目的の重要性

人文学部日本文化学科 3年 本間 藍花

はじめに

博物館経営論の講義での「ミニミュージアム制作」は自分が構想した博物館の企画展の展示を、発泡スチロール容器の中に具現化させるというもので、企画から展示品・図録・ポスターをすべて自分一人で作成するというものであった。これまでの博物館課程の講義はグループワークが主であったため、今回のように構想から制作を一人で行うことはあまりない機会となった。そして今回はコロナ渦の影響もあり、尚のこと一人での作成という点が際立ったように思う。対面授業も6月からとなっており例年とは環境が違う中での作業となっただろうが、諸先輩方や先生のアドバイスを基盤として、作業に取り掛かることが出来た。不安も多くあったが、制作を終えて振り返るとこれまでの博物館課程の講義で得た知識を根底に置きながらの作業になったと感じられる。

本レポートではミニミュージアム制作の過程を工夫点、反省点と共に振り返りながら当該課題で得た学びについてを述べていく。

1. ミニミュージアムの構想

今年の博物館経営論の講義は最初オンライン上での講義となっており、対面授業に入ったのは6月に入ってからである。そこからミニミュージアム制作に関する詳しい話を聞き、企画書としてテーマ設定と館内スケッチを提出し、実際に制作に入っていくという形だった。ミニミュージアムの提出は7月末となっており、例年よりは急ピッチでの作業になったように思う。

テーマ設定に関しては、著作権的に問題のないものであることという提示と、自身の好きなもの、興味のあるものをテーマとすると良いとのアドバイスがあった。それを踏まえ、テーマを考えた時、自身の好きな作家や映画など様々な候補があったが、企画展として満足できる量の展示品を作ることが出来るか、現状分析、長期的展望に具体性をどれだけ持たせることが出来るか、ということ想像した結果、レースの世界というテーマ設定となった。私自身がレース作品を作成することを趣味としていることに加え歴史も深く、変遷もあるため正しい知識を自分も他者も身につけるという点でも作成に取り掛かりやすいテーマ設定になったと感じる。自身の興味に加え、企画展の趣旨を熟考した上でのテーマ設定だったため、ある程度展示の趣旨、展示品の案など要項はテーマ設定の時点で定まっていたと記憶している。そのため、展示に関する根底の趣旨が定まった状態で制作終了までブレがなく取り掛かることが出来たのではないかと思う。

2. 現状分析・ビジョン・コンセプトの設定

以下に図録に掲載した現状分析・ビジョン・コンセプトを引用し、その設定過程について述べていく。

【現状分析】

昨今の世の中、ハンドメイドという分野が興隆してきている。ハンドメイド作品は幅広く、ハンドメイド作家と言われる人々によってつくられたものは作家個人のサイトやハンドメイド専門アプリ、店舗に委託、ハンドメイド作家によるものだけを集めたイベントなどで販売されている。作品の幅も、販売の幅も広く、かつその作品は既製品と遜色がないほどクオリティが高いものもある。手軽に始められ、少しの道具と自分のセンスや技術があればよいハンドメイドは、趣味の領域を超えて職業にもなる。だがしかし、ハンドメイドの幅は広く、定義づけが難しいものとされている。一般的な定義づけの基準として自身のオリジナル性が求められるのであるとされているが、理解されていない部分も多い。ハンドメイド作品は唯一無二のオリジナリティを出せるものとして注目を浴びている反面、色々と不明確な部分も多いと言ってもよいであろう。

現状分析では、「レース」というものが現在どのような用途として主に使用されているかを示すためにハンドメイドという分野に視点を置いて、その定義について述べた。レースの歴史を展示で取り扱おうという考えでいたため、レースに関する現在の状況をここで述べるのではなく、現在レースに関わる分野の現状を述べ、その歴史の深さと複雑さを伝えることを意識した分析を心掛けた。近年身近になっているハンドメイド、という語を使用して、来館者にも入りやすく思ってもらえるようにと言い回しにも工夫をしたものとなっている。

【ビジョン（短期目標）】

今回の企画展を通して

- ・レースの歴史の深さと変遷を学ぶ。
- ・レースへの興味を持ってもらい、知識をつける機会にしよう。

という以上2点を目標とする。

ビジョンでは、上記2点を目標として設定をした。1点目は現状分析をふまえたうえで欠かせないレースの歴史について身につけてもらえるようにと考え設定した。レースの分野は文化史に当てはまるため、複雑で未知の部分が多い。複雑な歴史を深く理解してもらうのではなく、その複雑さを知ってもらうことを目的として、1点目の目標とした。2点目の目標は、歴史という人によっては堅苦しく歩み寄りにくいものとして感じてしまう1

点目の目標と比べ、気軽な気持ちで触れてもらいたいという気持ちでこの目標設定を行った。興味を持ち、来館者の方々の中に一つでも何かが残ることを意識して制作に取り掛かろうと考えていたため、この目標設定となった。企画展として簡素になりすぎず、意味を持たせながらも入りにくさを感じさせないことを目的として、2つの目標を設定した。

【コンセプト（長期目標）】

本展を通して

- ・手芸を含めハンドメイドに親しみ、興味を持ってもらう。
- ・手芸・服飾の歴史の深さや魅力を体験し身近に感じてもらう。
- ・手芸に興味を持ってもらい、知識を身に着ける機会にしてもらう。

以上3点を長期展望とする。

コンセプトでは、現状分析とビジョンを踏まえ、企画展の最終目標としてこの3つを設定した。レースという歴史の深い分野に触れ、現在の手芸と結びつけ、興味を持ってもらうという流れを意識し、目標設定に至った。複雑で曖昧な部分を伴う内容設定であったため、わかりやすさ、親しみやすさを意識し、堅苦しく感じることがないように心がけ、この目標設定を行った。また、長期目標としてあまり深く濃くなりすぎず、企画展のみで知識が固まらない、あくまでも企画展が興味をもつ足掛かりや、知識を深める一端を担える、きっかけのようなものになることを願いながら、このような目標を設定した。

3. 模型制作

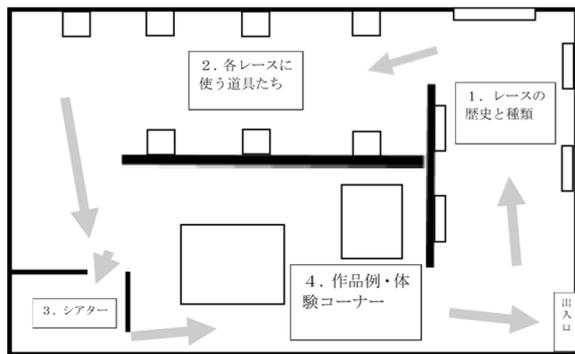
制作は、現状分析から長期目標を考えていた時点である程度の計画は固まっていたため、取り掛かりはスムーズであったと思う。図録とほぼ同時並行での作業となり、制作にあたって図書館でレースの歴史についての文献を集めるという作業が嚆矢となった。そして次に展示品としても、図版として図録の中にも使用する歴史についての文書を作成し、模型を作り、図録に書き落とす、という順で作業をした。そのような順で制作にあたったことで、図録と模型それぞれに不足している部分などに気づくことが出来、効率よく作業することが出来たと感じる。

模型を製作する際、私はハンドメイド作品を作ることを趣味としてたため、ものづくりに関してはスムーズに制作に取り掛かることが出来たと思う。必要な材料もある程度は家にあり、買い揃えるにも知識があったおかげで自分の想像していたものを揃えることが出来たと思う。実際の博物館の企画展で、どのような色合いであったら入りやすく、展示品を見やすいだろうということを考えながら、壁紙や、展示品を置く台の色などを考えた。

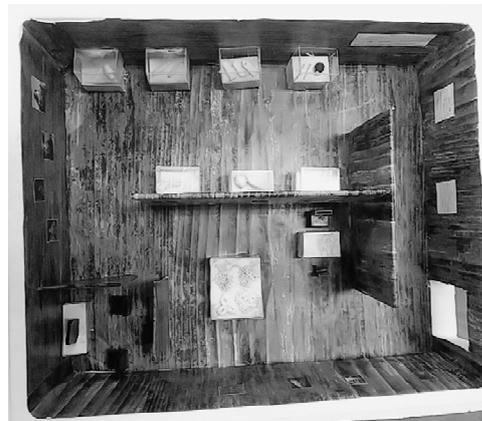
テーマごとに区画を作り、【画像1】サイズ感を考えながらケースや展示品を作成したが容器の深さと広さの関係で、思っていたより物を置くと小さく感じてしまったため、バランスが取れないことに気が付いた。そこで諸先輩方の作品と先生との話の中でヒントを

頂き、底をあげる方式【画像 2】をとり、バランスの調整を行った。通路の幅を取することを意識して制作にあたったため思っていたより物を置くことが出来ない印象を覚えたが、展示品の数を詰め込むのではなく、現実味とわかりやすさを意識して制作に取り組んだ。

企画展は右下に出入り口があり、反時計回りになるように順路を設定した。レースの歴史を知ってもらい、様々な種類があることを学んだうえで、知ってもらったそれぞれの編み方により異なる道具の紹介をし、実際にモノを見てもらうことで興味を持ってもらう。そして映像で作成風景などを流すことで説明や道具だけではわからない作品が出来るまでの流れを知ってもらい、更に興味を持ってもらうことを目的としてシアターを設置し、その後実際の作品を見てもらうことで、より身近に感じてもらうことを目的として、このような回路【画像 1】を設定した。そして実際に作る事にも興味を持った人は体験が出来るように、という意味を込めて順路の最後に体験コーナーを設置した。比較的単純な構造だが、順番には意味を持たせ、徐々に興味が高まり印象に残りやすいことを意識しながら設定を心掛けた。反省点として、容器のサイズと展示品のサイズに関する計算を緻密にすることを怠った点がある。実物をこのくらいに縮小して、という計算をしっかりと行わずに感覚的に制作したため少し不自然な印象を覚えてしまった。計算をしっかりと行っていると見栄えとしてももっと良いものとなったのではないかと、という後悔が残る結果となった。



【画像 1】



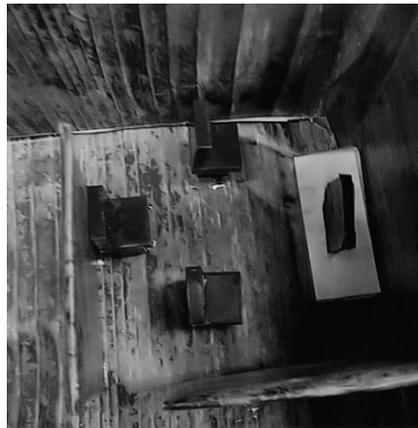
【画像 2】

作成において、展示パネルは紙、展示品を飾るケースはプラ板と厚紙、レース編みに使う道具たちは紙粘土、シアターや体験コーナーに置いた椅子やテレビはレジンで作成し、作品例には実際に私が作った作品を置いた。紙粘土での道具【画像 3】作りは細かい作業となり中々苦戦したが、時間をかけ作ることが出来たので、結果的には満足いくものになったと感じる。椅子やテレビ【画像 4】は紙で作ろうかと考えていたが、立体感をより与えたいとの思いでレジンを使い作成した。作品例【画像 5】は、サイズを考えて写真等での

展示も考えたが、実際に作品の繊細さに触れてもらいたい、との思いから、サイズ感が合わないことを承知で実際に作ったものを使用した。雰囲気として溶け込まないかと不安もあったが、作り終えてから全体を見ると、目立ちつつも浮きすぎてはいない、理想通りの出来になったように思う。



【画像 3】



【画像 4】



【画像 5】

作成時の反省点としては、展示パネルが簡素になってしまったのでもう少しデザインを凝ったものにする余裕があると良かったなど感じる。当初の予定より展示品の数は減ったが、全体的にこだわり、時間をかけながら制作をすることが出来た。配色にもこだわり、落ち着きつつ、レースの鮮やかさも感じられることを意識して制作を行い、ほぼ計画通りの再現が出来たように思う。

4. 図録・ポスター

先程も述べたが、図録の作成と模型の作成はほぼ同時並行であった。だが、模型が完成してからではないと書けない部分などもあり、図録に割く時間の方が結果的には多くなった。現状分析や展示趣旨などは計画を立てた時点でほとんど固まっていたので、時間はかからなかったが、それぞれの文の書き分けのための言葉選びを慎重に行ったため、そこには時間がかかった。図版に関する部分だが、テーマ1【画像1】のレースの歴史と種類の部分に時間をかけた。調べたことをまとめ、簡潔化して展示用のパネル文の作成をし、図録の中に詳しく補足分を作る、という手順を取ったため、文章完成と同時に展示用のパネルも完成した形となった。そしてテーマ2から4【画像1】までの図版は展示用の作品を作ってから写真を載せることも考えたのだが、細かすぎてわかりにくいかもしれないと感じたので、実際に所持している物の写真等を使用したため、模型作成前に完成する形となった。その後模型を作り、その展示品と順路に則り資料目録を作る、という流れになっ

た。資料目録はある程度最初に作ることも考えたが、展示品の配置など当初の予定とは変わったため、結果的に効率の良いやり方だったと感じる。また、歴史をまとめていて思いのほか曖昧で複雑な点が多く、理解が難しいかもしれないと感じたので、歴史に関わることを述べている図版の前に文化史の起源についてのコラム【画像 6】を書いた。このコラムを入れることで、レースの歴史が曖昧であることを理解してもらうことを望むと同時に、歴史がそれほど深いものだということを感じてもらえることを願った。

ポスター【画像 7】は、あまり派手過ぎずに落ち着いた印象を意識して作成した。企画展のタイトルが「レースの世界」と簡素で、競争の意味のレース等の誤認識の可能性を考慮し、背景にレースの画像を差し込んだ。必要最低事項はしっかりと記述し、レースの優雅さを表せるように落ち着いた色合いと簡潔さを意識しての作成となった。自分の中では満足していたが、集客等を考えると、もう少し親しみやすさを感じさせるものにした方が良かったかもしれないという反省点もある。

～文化史の起源～

タイラーの定義によると「文化、あるいは文明の定義とは、知識、信仰、芸術、道徳、法律、習慣など、人間が社会の成員として獲得したあらゆる能力や習慣の複合的総体」とされている。すなわち文化とはそもそも生活の中の習慣などから生まれていくもので、始まりがいつである、と定義づけるのは困難とされている。そのように、言ってしまえば日常という素材を題材とした文化史も、古くなるほど起源の断定は困難に、不確定になっていくので

【画像 6】



【画像 7】

おわりに

以上、ミニミュージアムの制作過程について工夫点、反省点と共に振り返りを述べさせていただいたが、当課題を通して感じたのは目標設定と計画性の重要性である。展示の根底として、何を伝えたいかがなければ展示品を効果的に見せることも出来ないのだということを、制作を通して感じた。根底が定まっていたからこそ今回のミニミュージアム

制作はある程度スムーズに出来たように思う。そして図録、模型等作成の順序や配分は人それぞれで、個人にあった作業の仕方を見つけることが重要であると感じた。模型を作ったことで図録に不足が見えることも、図録作成の作業を通して模型の不足を感じることもあり、模型と図録の2つがあってはじめて企画展は成立するのだということを改めて認識する機会となった。

今回のミニミュージアム制作と振り返りの作業を通して、自分一人で企画から実行することの大変さ、そして作業を振り返り自身の考えをまとめることの難しさと重要性を感じた。目標を設定し伝えるために自分の考えをまとめ、意図が伝わるように計画をたて、準備する。文字に起こすと単純に見えるが、今回の制作を通してじっくりとやろうと思えば思うほどに難しくまとまりにくくなっていく作業だと感じた。自分はどうしたいか、どのように、どんな思いを人に伝えたいか、という自身の考えがまとまっていなければ、作業は難しいものだと思う。そしてどれだけ強い思いがあっても、伝わらなければ意味がなくなってしまう。自分の思いを的確に伝えるためにも目標設定や計画性は重要なのだと感じる。自身の考えも、目標設定や計画性も、どれか一つでも欠けてしまうとうまくいかないのではないだろうか、と作業を通して感じた。そしてそれらは普段の生活では忘れがちだが社会に出た時、欠かせないものであるとも思う。自分の思いをいかにして形にし、伝えていくかということの難しさと重要性を感じるとともに、それらはきっと今後生きていく上でどのような場面でも必要になるだろうと感じた。このような機会を頂けたことに感謝すると共に、自分の意思をしっかり持ちつつ、目標設定に合わせて計画をしっかり立てれる人になれるように今回のミニミュージアム制作を今後の生活の糧としていきたい。

「博物館資料」としてのインタープリテーション

2020年度はCOVID-19への対応として、年度初め、及び学期開始当初に予定していた授業内容に、随時状況を見極めながらの修正、変更を余儀なくされたため、受講する学生も大変な年であったと察する。

受講者同士で話し合っただけの意見交換は取りやめ、実物を直接見て触れる授業もスクリーン上での画像提示に切り替えるなどの対応をしつつ各回の授業を進めていった。

博物館資料について、言語としての理論の暗記を超えた、実感として身につけた理解を助長する目的で構成した授業形態に修正を施さざるを得なかったことは、講義する側としては非常にもどかしい思いであった。

さて、今年度はコロナ禍の諸事情により、博物館資料論からは例年よりも多い10名のレポートを掲載するに至った。

「古いモノ」や「文化財」ではない、「日常の身边にあるモノ」を如何に博物館資料として捉えてインタープリテーションするかに注目して採点している。各学生がレポートの題材として取り上げた「モノ」から「博物館資料」となるべき情報を読み取るにあたり、大きく分けて、2つの側面から観察することを求めている。1つは「モノ」の本来の目的と機能、2つ目は、「モノ」の所有者（＝レポートを作成した各学生）の歴史の一部を構成する資料としてである。

掲載人数が多いため、各レポートについては資料を捉える観点についての簡潔な説明を以降に記す。

◆『起き上がり小法師』

伝統工芸品としての解説とともに、所有者の家庭でのエピソードが添えられており、購入者側の観点を垣間見ることができる。

◆『十字形板状土偶を模したキーホルダー』

モチーフとなった重要文化財の土偶についての考古学資料としての解説と、キーホルダーという製品としての特長と所有者の扱い方が述べられている。

◆『筆入れ』

筆入れという文房具としての特徴、製造会社についての情報に加え、購入時から現在（レポート作成時）までの扱い状況が述べられている。筆入れの商品説明のみに陥ることなく、所有者と共にどのように時を経てきたのかについて記録されている。

★余談ではあるが「ペンケース」という名称に取って代わった「筆入れ」という名称が、いまだに理解されていることは資料として非常に意味あることである。現代

において実際に筆を収納して持ち歩いている人はごく限られた人々であると思われるが、筆以外の筆記用具等を収納していても「筆入れ」である。「筆入れ」、「筆箱」の他、下駄を収納することは稀でも「下駄箱」など、これらの昔の使用法の名残りの名称について私は「言葉の遺産」、あるいは「名称の遺産」と呼んでいる。「筆記用具」という言葉についても筆以外を含むし、筆以外で書いても「筆記」である。

◆『腕時計』

腕時計という道具、あるいは装置としての物理的データと、商品としての情報が説明されている。また、現所有者の下での扱われ方の中では、ベルトの交換が2度行われたという事実も言及されている。展示に添える説明文も製造したメーカーについて説明したものと、腕時計という製品として説明したものの2パターンが用意されている。

◆『ハンカチ』

主に洗った手を拭いたり、汗を拭いたりといった目的を持った布（洋装の服飾を目的とする場合もあるが）について、本来の目的を超えたキャラクターグッズとしても観察している。絵本に登場する有名なキャラクターであるため、このキャラクターが登場する他のシリーズや、作家と翻訳者についての説明がなされている。もちろんハンカチという四角い布として物理的に観察したサイズや素材等についても言及している。

◆『ぬいぐるみ』

ぬいぐるみといっても多種多様であり、やはり物的データに加え、モチーフとなったキャラクターについても説明がなされている。

◆『Wii ゴールデンハンドル』

ゲーム機器を資料として取り上げているが、取扱説明書のような機能説明と使用方法に偏ることなく、物理的データ、製造するメーカーの情報に加え、所有者がメーカーの会員であることが入手のきっかけとなったという経緯や会員情報についても言及している。

◆『ぬいぐるみキーホルダー ーちびぬい Sindyー』

この資料については、「ぬいぐるみ」、「キーホルダー」、「アイドルのグッズ」という性質を備えている。ぬいぐるみキーホルダーとしての物理的データに加え、モチーフとなったアイドルについての情報も必須となる。また、この資料に対する所有者の思いは、ぬいぐるみキーホルダーというモノとしての思いというよりは、モチーフとなったアイドルへの思いという要素が強いことも読み取れる。

◆『ブーツ』

ブーツという履物として観察したデータはもちろんのこと、このブーツと所有者とのかかわりについて細かく記録されている。レポートの作成者（資料の所有者）の意図も、ブーツの所有者の生活・活動の一端にかかわった資料として扱っているため、その意図がレポートに反映されている。

◆『ブルゾン』

資料は一般的に「ブルゾン」と呼ばれる衣服（上着）である。衣服の呼び名の分類基準の説明とともに、この資料を扱っているブランドによる製品の特長が説明されている。また、商品としての販売場所や時期などに加え、所有者による感想も述べられている。

博物館資料ドキュメント 『起き上がり小法師』

人文学部日本文化学科 2年 西須 汐音

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

材質：和紙、白い胡粉、膠、粘土、糊、日本画の顔料

この資料は「起き上がり小法師（おきあがりこぼうし）」と呼ばれており、主に福島県会津若松市で手作りされている伝統工芸品の張り子である。福島県へ赴くとどこのお土産屋でも購入することができ、他には毎年 1 月 10 日に開催される十日市という初市で縁起物として販売されている。

伝統工芸品ということで一つ一つ手作りされていることが特徴であるが、そのために制作された工房によって使用された糊や顔料など多少異なることもある。今回の資料はつくられた工房は分からないが、伝統的なデザインであることを考慮し、伝統的なつくり方で使用される材質と想定し報告書を制作する。

全体の大きさは縦：約 3.2 cm、横幅の最も太い部分は約 2.0 cm、真ん中部分の横の太さは約 1.7 cm、頭頂部の一文短い横の長さは約 0.7 cm。底から頭頂部につれて段々細くなっていることから緩やかな円錐になっている。胴体部分は、和紙である型の中に直径が縦：約 2.0cm、横：約 2.0cm の球体の粘土が入れられており、底辺：約 1.8cm、高さ：約 1.5cm の丸みを帯びた三角形の顔の部分に乗っている。重さは 6g。体の部分は重りになっており、指で転がしても起き上がる仕様になっている。体の中央には縦：約 0.8 cm で、胴体を一周するように赤色が塗られているが、かなり色ムラが見られる。上部と下部で約 0.4 cm ずつ 2 回に分けて赤色を塗った跡が確認できる。また、色のはみだしも多く、本来白くあるべき場所にも赤色が飛んでいる。

正面から見るとかなり丸みを帯びた円錐である。ただし底の部分のみ、直径：約 1.2cm 円形に平らになっているため安定して置くことができる。下から見ると底が円形に平らになっている部分は、他の部分の白い胡粉の塗り方よりも厚く胡粉が塗られ、色ムラも見られる。これは重りである粘土を入れた際に封をするため厚めに胡粉を塗ったことが見て取れる。厚く塗られている部分は直径：約 1.4 cm の円形。和紙を張り重ねた際にできたであろう細かな凹凸も表面に見られる。

横から見ると、体部分となる球体は直径：約 1.8 cm。その上に、横：約 1.1cm、縦：約 1.4cm の扇型のような形で顔の部分に乗っている。顔の前方は約 0.7 cm の空間があり、お腹が出るような形である。この起き上がり小法師は木か粘土の型に和紙を張り重ねて形づくり、乾燥させた後に型を抜き白い胡粉で全体を塗っている。さらに絵の具で、頭に烏帽子となる縦：約 1.1 cm、横：約 0.9 cm の円錐型の黒色部分と、顔の眉（約 0.4 cm）、微笑んでいる糸目（約 0.5 cm）、口（約 0.1 cm）も黒く細い線で繊細に描かれている。

【起き上がり小法師について】

起き上がり小法師は伝統的な人型を模したデザインから、動物、和柄のみのものなど、近代のお土産のために考案されたハイカラなデザインも増え、最近の種類は多様化している。主に福島県会津若松市で一つ一つ作られている伝統工芸品で、江戸時代初期から存在する品である。無病息災を願う以外にも、指で転がしてもすぐに起き上がることから「七転八起」といわれ、縁起物として扱われている。今回の起き上がり小法師は様々なデザインの中でも最も王道で長くつくられ続けている人型のデザインである。所有者の父が購入したものは3つとも胴体に塗られた衣装の色が赤いが、青色も同じく王道で多く売られているデザインようだ。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

この資料は所有者の西須汐音の父親が2019年11月8日に仕事の用事で福島県会津若松市を訪れ、市中観光の際にお土産として購入したものである。福島県会津若松市日新町12-38にある「末廣酒造 嘉永蔵」という1850(嘉永3)年に創業した酒蔵の建物は現在ではカフェが併設されお土産ショップもあり、そこで購入した。あまり見ることのない伝統工芸品であったことと、お店に置いてあった起き上がり小法師についてのポップに「家族の数だけ購入すると無病息災の効力があります。」と書いていたため、お土産に丁度良いと考え購入を決めたとのことである。家族の人数である3つ分を購入したが、所有者の家は愛犬が一匹いるため、家族数は4人であり「購入する数を間違えた」と帰宅後に話していた。だが後に起き上がり小法師について調べると、起き上がり小法師は家族の人数分より1つ多めに買うものだということが分かったため、本来は5つ購入することが正しかったようだ。また、福島の人には1月10日に行われる十日市にて購入し、その後は神棚にお供えすることで無病息災を願うらしいが、所有者の家では窓辺に3つ並べて飾る形をとっているため、無病息災を願うための本来のやり方とはかなり異なっている。

コンディション・レポート (Condition Report)

よく見ると黒い汚れがいくつも見える。ほこりかと思って指で優しく払ってみても取れなかった。気付かないうちにこすってしまったたり、どこかに軽くぶつけたときに白い胡粉が少し削れてしまったのだろうと推測する。全体的に起き上がり小法師の表面に小さい凹凸が数えきれないほど細かく見られた。もし、再び移動の際に強く持ちすぎてしまったり、落としたりすると摩擦や衝撃で凹凸になっている部分の胡粉が取れてしまう可能性がある。胴体の衣装の部分である赤色は既に退色が進んでいるようで、色ムラも年々増している。胴体の赤い色の部分には縦：約0.1cm、横：約0.1cmの赤色が薄く欠けて桃色に見える箇所がある。その欠けの0.1cm右横を見ると、約0.1cmの引っかけたような傷がある。その傷は横に伸びていて、先端が0.1cmほどの細いもので引っかけたために赤色の胡粉が剥が

れてしまったと推測される。

大部分を占める白地の部分だが、薄い赤色や黄土色が細かく散っており、製造の際に絵の具が散ってしまったと思われる。正面から見て右下の胴体には黒色の点が7か所ほど密集してついており、これも着色の際の絵の具だと推測する。適した場所で保管しなければ劣化の進みは早くなり、胡粉の剥がれやひび割れを引き起こす可能性がある。赤い色の部分に比べて、黒い部分に色ムラは無い。また、頭部に約0.5cmのひび割れがあり、気を付けて扱わなければ胡粉が剥がれ落ちそうな状態である。裏側の重しに封をしてある縦：約1.5cm、横：約1.2cmの円形で平らな部分には縦：約0.2cm、横：約0.3cmの焦げたような色合いの汚れが付着している。中心が黒色で、その黒色を囲むように黄土色がついている汚れである。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

まず収蔵庫へ入れる前に、ホコリなど目に見える汚れは丁寧に清掃し、文化財害虫が潜んでいないことも確認し（潜んでいた場合は対処後に収蔵庫の所定の場所へ保存）他の資料に影響を及ぼさないようにすることが必要。

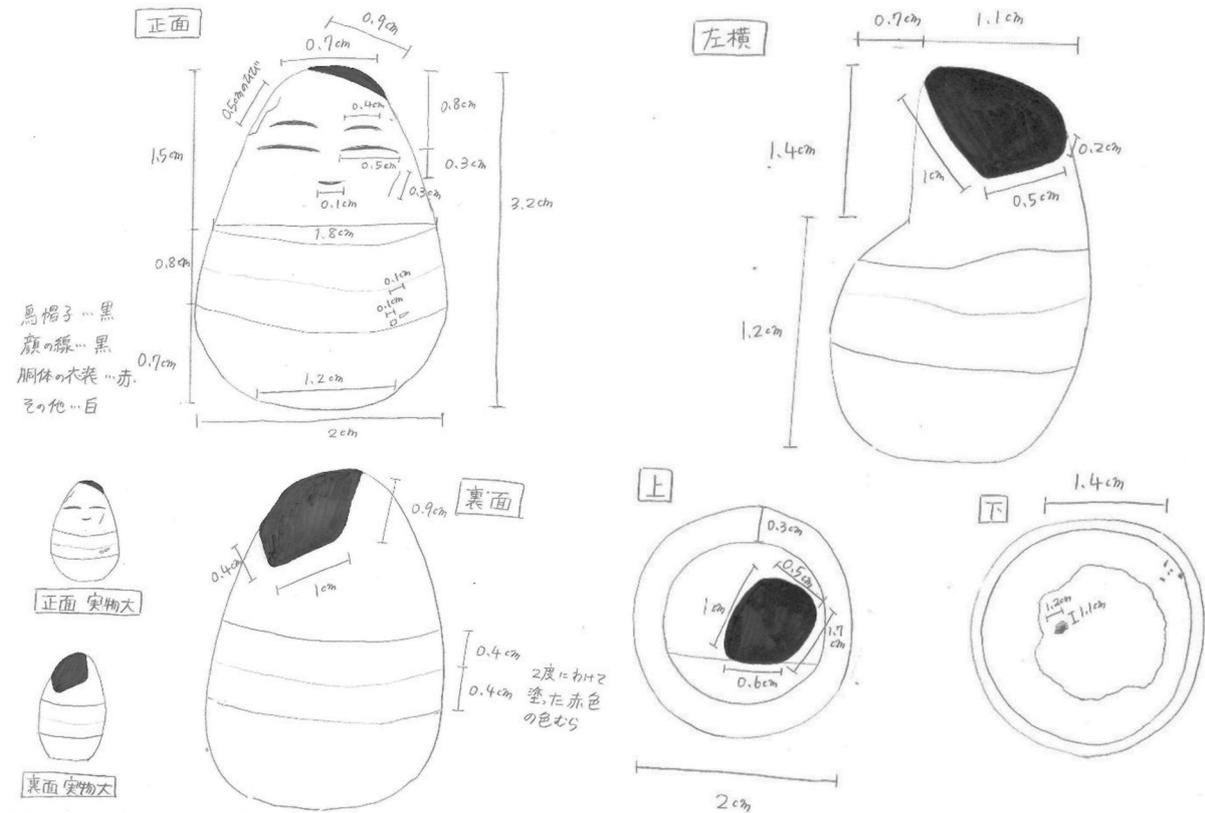
起き上がり小法師は和紙を何枚も重ねて、その上に液体の糊を塗り重ねることで強度を増し、劣化を遅らせることを可能にしている。現在の保管方法が窓辺の日光によく当たる場所に置いていたため、胴体の赤色の退色が著しい。保管の際には直接日光が当たらない場所に置くべきである。

温度は20度、湿度は中湿度である55～65%に設定する。和紙は紙に比べて丈夫で劣化遅い。また、古来からの手法でつくられた和紙は、ほとんどが中性か微アルカリ性のため酸化もしない。長期間、湿度の高いところで保管をするとカビが発生する原因になるため、空調を効かせた場所に保管することが必要だ。収蔵庫にも温湿度計を設置し、年間の温湿度を把握した上で展示環境の改善をしていく。

文化財害虫による生物被害には注意が必要である。未然に生物被害を防ぐためにも近年の予防対策であるIPM（総合的有害生物管理）を徹底すべきだ。具体的には予防システムの確立、発見時の対処法、定期的な予防システムの見直しを行なう。資料の中に文化財害虫が生息している疑いが出た場合は、顕微鏡で確認するか目視で確認を行う。ひび割れの中に文化財害虫が潜んでいるかを見つけるためにも、資料の近くに虫の死骸やフンが落ちていないかを確認する。もし文化財害虫の存在が確認された場合は、専門業者と相談しながら適切な対処を行なうことが望ましい。

肉眼観察の他に材質調査法や非破壊調査法、構造調査等を用いて材質を調べることが必要である。特に、この資料は工房によって多少使用されている絵の具の顔料や糊が異なるため、調べてみなければ正確な材質は分からない。胡粉と膠を混ぜたものを表面に塗っている場合もあり、そうになると膠が経年劣化してくるため、ひび割れや胡粉が剥がれてくる恐れがある。

イラストレーション (Illustration)



ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

持ち運びの際は資料をぶつけてしまうと、ひび割れや胡粉の剥がれに繋がるため、まず薄葉紙で包んで凹凸の保護を行なう。起き上がり小法師は1つだけの展示というより複数で並べるものであるため、1つの箱に複数まとめて収納することが適切である。また、箱に入れた際は内部でぐらつきが出ない様に資料と箱の間にさらに薄葉紙を詰めることで資料の損傷を防ぐ。車で資料を運ぶ際には、資料を納めた箱が転がってしまわない様に固定する。資料自体が軽いものであるため、梱包した箱自体が車の揺れで転がることもあり得る。薄葉紙で包んでいるとはいえ破損の原因となる可能性もあるため細心の注意を払う。トラックなどで業者に運搬してもらう際には、資料はひび割れやすいものであるということを伝え、転がらない様に注意してもらう。

手のひらサイズの小さい資料のため、慎重に扱わなければうっかり落としてしまう可能性がある。陶器のように割れて資料が大きく損なわれることはないが、細かな損傷の原因となるため、ゴム製など滑りにくい素材の手袋を使うことが望ましい。資料を扱う際には時計やアクセサリーはつけず、資料と接触の恐れがあるものは身につけてはいけない。

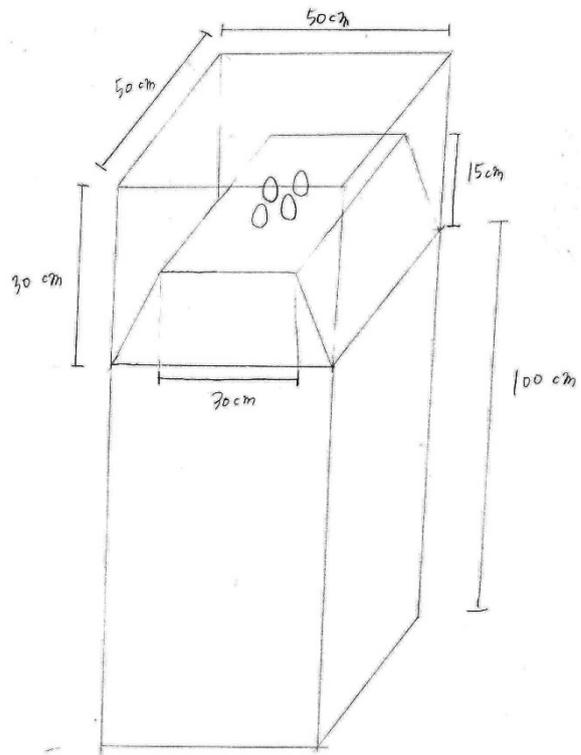
運んできた資料は適した湿度・温度の環境に置き、慣らしてから梱包を解かなければ特に紙や接着剤を使用している起き上がり小法師は高湿度で膨張し、低湿度で収縮してしまい、劣化の促進とひび割れに繋がるため注意が必要である。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

この資料は、昔から作られ続けてきた伝統工芸品である。小さい資料であるため、数については複数収集・収蔵することが可能である。起き上がり小法師は複数並べて飾ることが本来の形であるため、展示の際も複数個をセットとして並べる。

資料が小さいため、しゃがまずに見ることが出来るよう、高さが 1 メートルの展示台を使用し、展示ケースの中にも高さ 15 センチの台を設置し、その上に資料を置く。

既にこの資料は長時間の日光照射によって色の退色が進んでいるため、展示の際の照度は 150lx にし演色評価数を Ra100 に近い数字とする。その上、温かみのある光色を選ぶことで、暗めの照度でも胴体に塗られている赤色が本来の色に近い色で見える。



レーベル (Label)

見やすさを優先させるレーベルにするためにフォントはメイリオを使用している。小樽市総合博物館で流される映像展示も、映像の中の説明文が一番見やすいとされるメイリオを使用していることを参考としている。

カラーユニバーサルデザインを考慮した色合いにするため、シンプルなレーベルの印象になるように作成した。色弱者の方は赤・緑・オレンジを見ても、濃淡の違いはあってもどれも茶色に見えてしまい、レーベルに使用すると見えづらい仕様になってしまう。この資料の色合いは白・黒・赤で構成されているが、衣装の色が青の起き上がり小法師も代表的なデザインであるため、文章の色は青を選択した。伝統工芸品である資料のため落ち着いた色のあるレーベルにしたいと考え、青の中でも濃い青を選んだ。

起き上がり小法師の「小法師」という字は一見、「こほうし」とも読めてしまうためルビを振った。

あまり小さい字にしすぎると読みづらくなってしまうたり、字数が多すぎると目が滑ってしまってあまり読みたくなくなってしまうのではないかと考え、字の大きさは 12 ポイントを選択した。

文章の内容としては、「起き上がり小法師」とは何か？飾ることでどういった効果が得られると考えられているのかという資料自体の謂れについてメインに作成した。

おきあがりこぼうし 起き上がり小法師

福島県会津若松市で江戸時代初期から作られている伝統工芸品の張り子である。指で転がしてもすぐに起き上がる様子から「七転び八起き」とされ、縁起物といわれている。また、家族の人数より1つ多く買うことで無病息災や一族の繁栄を願うものでもある。

福島県の地元の人々は1月10日に開催される十日市で起き上がり小法師を購入し、神棚に飾ることが習わしとされている。

参考文献

- ・『博物館資料保存論』（石崎武志、株式会社講談社、2012）
- ・レファレンス協同データベース レファレンス事例紹介（最終閲覧日：2021.1.24）
https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000079158

博物館資料ドキュメント 『十字形板状土偶を模したキーホルダー』

経営学部経営情報学科 1年 渡辺 一史

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

これは、十字形板状土偶を模したキーホルダーである。十字形板状土偶の土製のレプリカの頭頂部にU字型の金属が差し込まれ、それにより形成された環に紐が通されている。

土偶自体の縦は 59mm、横が 40mm、奥行きが 12mm である。金属部分の露出部が 9mm、紐の部分は 95mm である。金属部分を含めた全体の長さは 158mm である。

名の通り、青森県にある特別史跡三内丸山遺跡において発掘された重要文化財・十字形板状土偶を模したものであり、模様や特徴は実際のモノと非常に似ている。性別は女である。顕著なものとして顔や胸、へそがついており、胸とへそは直径 3mm ほどの円柱状の突起が見られる。また、顔は半径 17mm のおおよそ扇形の台盤を基にしており、両目と口が直径 3mm ほど、深さ 3mm ほどの円形に掘られ、それらが正三角形の頂点のような位置関係にある。なお、観察者からみて左側の目は、その入口が右側の目に向かって長さ 5mm ほどの楕円形に広がっている。鼻は、盤の上に上底より下底が長い左右対称の台形のような形が置かれたものがそれであり、鼻の顔の凹凸を表すため左右の目との間の台盤に窪みがある。加えて、両目の間には、眼鏡の柄のような厚みがあり、眼鏡をしているかのように見えるかもしれない。全体的には茶色を帯びており、ところどころに装飾が見て取れる。頭頂部には顔の扇形よりも大きなアーチ状にモコモコとした模様が施されており、その膨らみの内部一つ一つに、直径 1mm ほどの小さな玉がある。顔の両端には、耳をかたどったのであろう多少の膨らみと、そのなかに深めな二重の穴が掘られている。胴体部は、名の通り十字形をしており、表面に沢山の線が掘られた模様がある。その線も針のようなものでそのまま引いた線とつづいて形成された線がある。胴体中央を上下に通る線にはないが、左右の腕部、脚部には頭頂部にもあった小さな玉が掘られた線に多く点在している。左右で対称性はないが、頭頂部のよりも小さい印象を受ける。脚部には逆三角形の形に掘られた線に直径 0.07mm ほどの小さな玉の敷き詰められた模様があり、他部とは意匠が異なる。また、左右の斜め下方向に向かって斜線のくぼみがある。裏側には装飾はなく全体が平らである。経年劣化もあり、表面の色が剥げてきているところ、薄くなっているところがあり、やむを得ないところもある。質感としては、土製品ゆえカサカサとした肌触りがある。所有者の中学生時代の経験から、土粘土を焼いて作った物と推測される。

続いて、頭頂部に差し込まれているU字型の金属は、金属本来の銀色から、キーホルダー本体の茶色の影響を受け、ところどころ茶色が滲んでいる。本体に差し込まれているため、全体の長さがどの程度なのかは不明である。また、紐も本来の白から、金属同様茶色が滲んでいる。経年劣化のあり、紐は全体的に少しずつ黄ばんできている。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

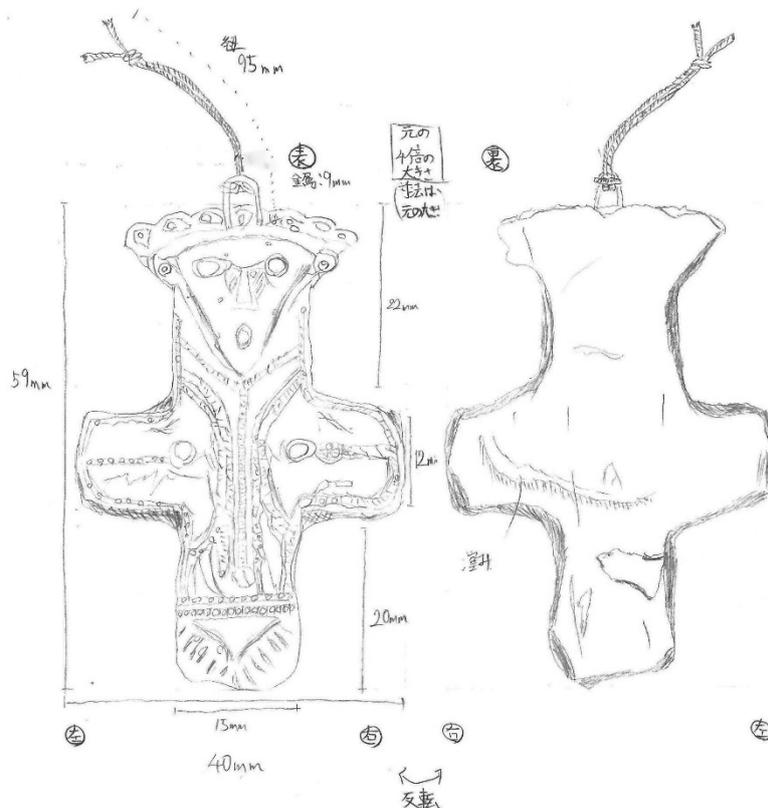
この資料の所有者は現在も変わっておらず、一代でこの資料を管理している。

所有者は、この資料を2019年3月12日に青森県青森市にある特別史跡三内丸山遺跡、その売店において所有者の父親に買って頂いた。考古学者である所有者の大叔父に連れられ、父親とともに3人で遺跡を見て回ったあと記念として購入したものである。売店の名前は、ミュージアムショップだったか、あおもり北彩館三内丸山点だったかは記憶していないが、そのどちらかであった。売価は税込で約600円だったと記憶している。所有者は当時高校3年生で、受験旅行の帰りに当地に寄った。購入後は自宅の自室の机にて保管し、何らかのものにくくりつけるキーホルダーとしてではなく、記念品として観賞用のように扱っていた。所有者はキーホルダーが十字形板状土偶を模したモノだとは解ったが、売店でしか見ておらず、そのキーホルダーの製法については解っていない。

なお、キーホルダーの要素の元となる十字形板状土偶に触れておくと、青森県青森市三内丸山遺跡において、縄文時代中期の盛土より発掘されたもので、国内で出土した同様の土偶の中でも最大級のものであり、高さは約32cmあるという。この土偶は頭部と胴体部が別々の場所から見つかっており、その意図は不明とされている(※1)。

※1 巨石巡礼『三内丸山遺跡 青森市/縄文時代の大集落遺跡』より

イラストレーション (Illustration)



コンディション・レポート (Condition Report)

所有者はこの資料をキーホルダーとして何らかのものにつなげていたわけではなく、観賞用としての扱い方が主であったため、大きな傷はない。だが、書類が多いところで管理していたこともあり、紙で擦れたのが原因だと思われるが各所色が剥げてきている。売店での購入時は全体が茶色だったはずで、少し白い部分があるのは、その要因があると思われる。具体的には、観察者から見て左側の腕の下側、胴体脚部の右側、裏面は、右側の腕の先端である。また、薄茶色になっているのは、裏側の左半身に多く見られる。購入間もない頃には土の粉が出ていることもあったが、ここ数ヶ月はそのようなことはなく、安定した状態になっていると思われる。外見以外は、購入時と変わらず、状態は良い。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

まず、第一に気を付ける点は、直射日光である。土製品、または、土粘土ものと推測されるので、急激に表面温度を上昇させる直射日光のあたる環境は好ましくない。表面温度が上がると乾燥の原因にもなってしまう。次に、湿度管理が必要である。土粘土で作られた物は自然乾燥で固くなる性質を持つ。あまりにも湿度が低い環境で保管すると資料にひびが入る恐れがある。つまり、直射日光、低湿度環境は、資料に危害を与える要因となるため、入念な環境設定が必要である。

最後に、水分にも気を付けておきたい。土粘土の性質上、水分が混ざると非常に柔らかくなる。資料に水分が付着してしまった場合、その一部だけが様態の変化を起こす可能性に加え、資料全体に影響が波及し意匠・装飾・模様などが崩れてしまい、資料自体の価値が下がってしまう危険性がある。それゆえ、資料を保管する場所周辺に飲料を置かないことが前提として大切である。

以上より、湿度を一定に保つことのできる環境が好ましいと考えられる。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

この資料は硬質であるが、些細なことで資料を傷つけることはありうる。例えば、極めて初歩的なことだが濡れた手で資料に触れるのは厳禁である。前述の通り、水分に対して弱く、資料の価値を下げてしまうほか、資料保管の環境に影響を与えてしまうことが挙げられる。そのため、手袋などの手と資料を遮断するものを着用することを薦める。人間の手は乾燥しているように見えても、幾ばくかの水分を含んでいることがある。特殊例かもしれないが、所有者のような緊張体質の人は資料を持つ際に緊張等で手汗をかいてしまうこともあるため、十分な準備が必要である。

続いて、持ち方において、紐を持たず、資料をそのまま持つことを薦める。仮に万が一、紐を持っていて紐が千切れてしまった場合、資料を床に落として壊してしまうことも十分にある。決して粗雑な取り扱い方法でなくとも紐の部分を持つてはいけない。資料をその

まま持つ際も、つまむように持つのではなく、手のひらに乗せるように持ち、丁寧に扱う。

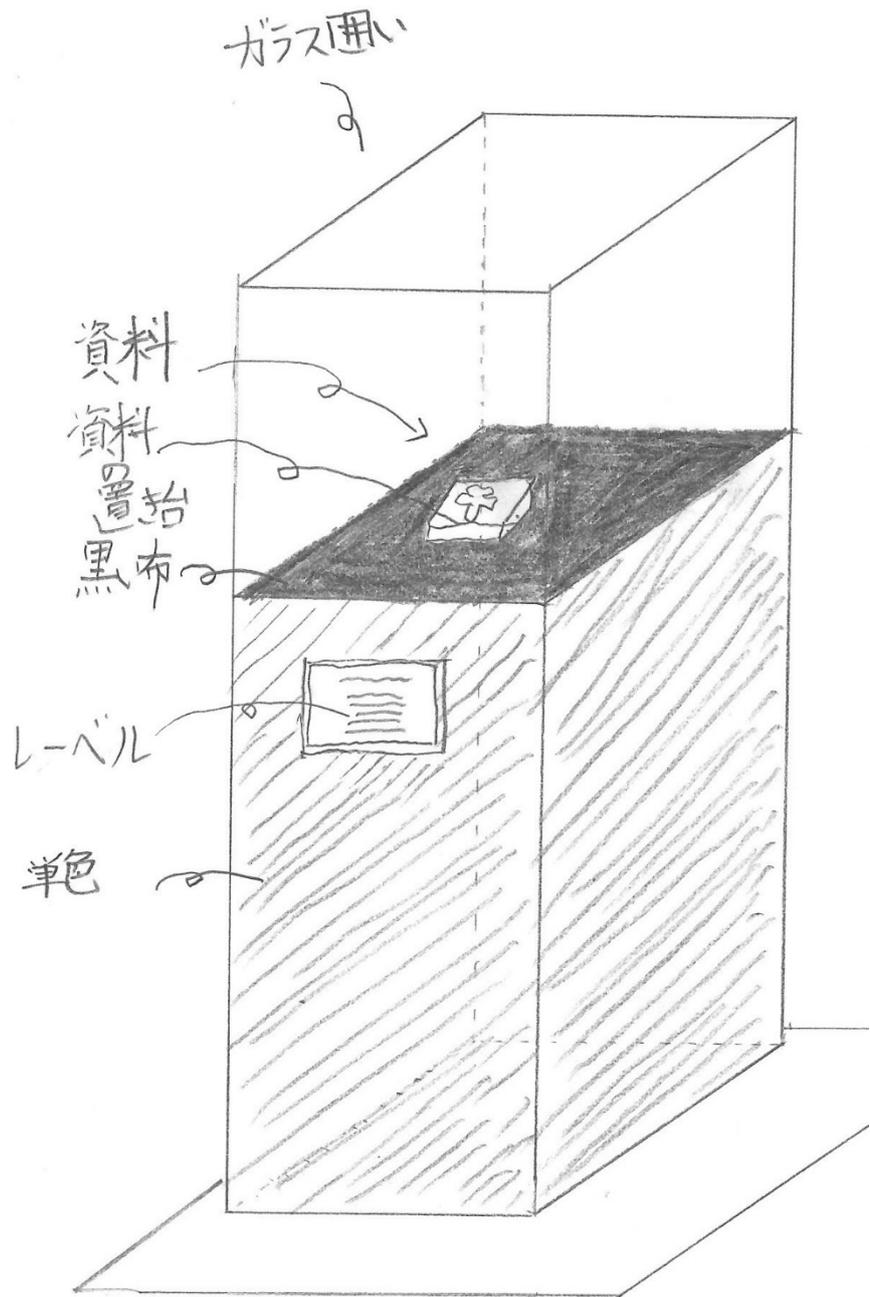
最後に、どんな資料を扱うときも、腕時計をしない、爪を短くする、十分に広さがないところでは資料を扱わないことは鉄則である。この資料もそれに漏れず、細心の注意を払い取り扱うべきである。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

展示は、右図のようなケースを考えた。四角柱の台座に、ガラス張りの立方体の囲みをのせたものである。台座は主に小物を所蔵し展示する博物館ではよく見られるものである。広島原爆資料館や小樽市金融資料館のケースを参考としている。ガラスのケースは下以外の5方向からのぞけるようになったものを使う。資料を置くにあたり、黒い布を下に敷き安全性を確保するとともに、照明の明かりを吸収する働きを狙う。部屋の照明の明るさは、やや暗くすることで、展示にも保存にも適するような環境を形成する。また部屋は、窓がないところを優先的に配置する。

ここからは対処法を述べる。まず、照明に関してもし明るすぎた場

合は、ガラスの上部の面に黒い板を載せることにする。これにより資料を見づらくなる場合が発生すると思われるが、台座を高くして調節したい。



レーベル (Label)

派手さがない地味なレーベルを目指した。題名は目立つよう太字 18 フォント、下線、赤字としたが、本文は太字 10.5 フォントとオーソドックスなデザインを用いた。落ち着いた雰囲気を出すために、言葉選びには注意した。レーベル自体の大きさは資料自体の大きさがそこまで大きいわけではないので、それに見合うよう配慮した。

十字形板状土偶を模したキーホルダー

青森県三内丸山遺跡において縄文時代中期の盛り土から出土した
十字形板状土偶をモチーフとしたキーホルダー。

縄文時代の土偶特有の意匠や模様が見られ、
高い芸術性が鑑みられます。

当時、土偶は人々に畏敬の念を抱かせる対象でありました。
災いが起こる度、壊される信仰の対象ゆえ、
当時の文化の中心的存在でした。

博物館資料ドキュメント 『筆入れ（マグネット筆入れ）』

経営学部経営情報学科 1年 松山 陽奈子

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

このオブジェクトは、鉛筆やペンなどの筆記用具を入れるケース、即ち「筆入れ」である。片面のみ開閉可能な1ドア構造の箱型であり、日本製、クツワ株式会社が販売する。この資料の正式名は、「マグネット筆入 赤」という。購入価格は1200円。使用された年月は6年間である。

縦は237mm、横は81.5mm、高さは30mm、重さは160gの立体長方形である。内側(中身)のケースは赤色のプラスチック、外側は厚さ3mm、茜色ほど濃い赤の合皮で作られている。最も特徴的なことは、この筆入れに使用されている合皮は、軽くて丈夫なランドセルと同素材のクラリーノ生地ということである。水や汚れにも耐久性のある生地なので、ある程度の汚れは、水拭きでの除去が可能である。フタには、長さ5mm、幅11mmの銀色の金具が実装。1ドアタイプのマグネット式であるので、開け閉めを容易にし、文具の出し入れをスムーズにする。閉める際はマグネットが合わさって、パツという音を出す。また、この金具の表には、二つの丸い凹みがあり、加えて文字が全て消えており、端が欠けている名前シールが貼付されている。裏には、表の凹みと同位置に同じ大きさの丸い穴があり、中央には、社名である「KUTSUWA」の飾り文字が彫り込まれている。両側の丸い凹凸は、元々のデザインである。フタの裏側は、小さな点が多数、規則正しく散る模様黄土色になっており、開封時の境目から、段ボールシートが見えている。フタの裏側の下(フタが右に位置するように、筆入れを開いたとき)には、縦80mm、横53mmの二重構造のポケットがあり、表のポケットは、窓のように大きく中が切り取られている。この筆入れの中には、最大5本を収納する鉛筆ホルダーが付いており、90度の角度まで上げることができる。先(芯部分のところ)には楕円形の窓が開いているため、鉛筆の芯先を固定保護、且つ削り具合も一目で確認することができ、キャップを必要とせず整理ができる仕組みになっている。また、鉛筆ホルダーの下には、鉛筆が更に5本収納できるスペースがある。鉛筆ホルダーと逆の端は、消しゴムの収納用に幅30mmで仕切られており、その下には長さ20mm、幅10mm、高さ1mm以下の、三本の滑り止め目的の凹凸がある。合皮(クラリーノ生地)部分、即ち表面は、端が赤い糸で丁寧に縫われている。また、合皮部分は、軽いクッション性があり、押すと柔らかい。指で曲げられてしまいそうな柔軟性がある。筆入れの全体、全ての角は、丸く手に優しい巻き込み仕上げとなっている。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

所有者は、松山陽奈子(2001年～)である。2008年3月、所有者の母(1971年～)が、所有者の小学校への入学を祝して、札幌市中央区に位置する大丸藤井セントラルにて購入した。価格は、税込み1200円であった。この筆入れは、2021年時点も販売されている。販売会社は、大阪府に本社を置く総合文具メーカー、1910年創業のクツワ株式会社である。

所有者の母が、この筆入れを選択した決め手には、授業に集中できるように、キャラクターものでないシンプルなものを求めていたこと、長く使用できる丈夫なものを探していたことが、挙げられる。

母から笑顔でこの筆入れをプレゼントされたとき、所有者は、人生初の憧れだった自分の筆箱に喜んだ。しかし入学後、同級生たちの筆箱を見ると、カラフルな色や模様、飾りやキャラクターがついていた。それは、所有者の赤一色のシンプルな筆箱よりも、魅力的に思えた。2009年を過ぎると、同級生の筆入れは、箱型のものから、缶タイプやポーチ型、ロール型に変化していった。所有者も2009年夏、周りの人たちに倣い、知人から貰った音符柄のポーチ型筆入れに切り替えた。だが、それは三日もなく使用を中断し、このレポートのオブジェクトである元々の筆入れに戻った。キャップが必要のない鉛筆ホルダーのあるこの筆入れになれていた所有者は、鉛筆を使用する都度キャップを取り外す行為を、面倒に感じたからである。また、キャップによって芯の削り具合が見えなかったことも、非常に不便であったという。特に一番の理由は、何よりこの筆入れに愛着がわいていたからだ、所有者は思っている。

筆入れの中が広すぎず、消しゴムや鉛筆の位置が定められていたことで、所有者は、筆箱の中を散らかさずして綺麗に保つことができ、整理整頓のいろはを学んだ。

所有者は、この筆入れを小学校6年間(2008年～2014年)、愛用した。2012年、小学校生活後半になると、所有者の周りの同級生で、箱型タイプの筆入れを所持する人はいなかった。2021年時点、この筆入れは、所有者の部屋にある引き出しに、保管されている。

コンディション・レポート (Condition Report)

フタの端が、上にやや反っている。おそらく、マグネット部分の金具を掴まずに、フタの端を掴み、持ち上げて開いていたからだと推測される。表面部分を構成している合皮の端には、小さな皺が寄っている。購入当初からあったのかどうかは、不明である。フタの表面は比較的綺麗だが、小さなキズや凹みがある。小さなキズは、コンパスの針や定規の角、爪で付いた跡であると思われる。フタの丸みを帯びていない、直角の角は、灰色になっている。長期間の使用で、赤色の皮が剥がれたからだと考えられる。筆入れの下面は、油性ペンや墨汁による黒いシミがところどころ付着し、引っかいたような小さなキズの連打も確認できる。黒いシミは、キャップを外した油性ペンを手に持った状態で、よそ見をしたときに手が動いて筆入れにあたり、できたものである。墨汁は、習字の授業において飛んでしまったものである。小さなキズの連打は、学校のイスが原因である。所有者が2006

年に小学校に入学してから 2012 年までは、学校のイスは木でできていたため、座版のささくれが引っ掛かり、キズになってしまったのではないかと考えられる。フタの裏側の生地やポケットにも、同様の油性ペン付着している。ポケットの赤色の合皮は、経年劣化で少し黒ずんでいるように見える。フタについている金具は、細かいキズが多くみられ、凹みもある。金属部分は、合皮やプラスチックよりもモノのあたりに弱いため、キーホルダーや棚の角など、様々な衝撃が原因となる。金具に貼付された名前シールは、文字がすべて消えて薄黒くなっており、端は欠けている。開閉時にできる境目部分は剥がれ、中に入っている段ボールシートが見えている。6 年間、開閉を繰り返していたために脆くなってしまったと思われる。プラスチック部分のケースは、消しゴムを入れるスペース以外は、ほとんど黒い。特に、鉛筆ホルダーの中に、黒さは集中している。原因は、鉛筆の芯が当たっていたことである。

2014 年以降使用せず、引き出しの中に保管していたため、2014 年以降と思われる劣化は見当たらない。

よく見ると、キズや破れ、シミなど汚れはあるが、表面は濃く暗い赤色で目立ちにくく、品質や機能の劣化はほぼ見当たらないので、全体的に良好な状態といえる。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

外側が、ランドセルと同素材のクラリーノ生地で構成されているため、水や汚れに耐久性があり、衝撃による機能の破損の可能性が低い。形状は安定性があり自立する。しかし注意すべきこととして、熱にさらさないことが挙げられる。クラリーノは熱に弱いため、例えば水滴が付いたり、濡れてしまった場合は、柔らかく乾いた布で拭き取り、ドライヤーなどをあててはいけない。また、革用クリームによるお手入れは、人工皮革にダメージを与え、ひび割れなどの原因になるため、不要である。更にクラリーノは、水や汚れには耐久性を持つが、キズや破れ、折れ曲がりに対しては弱いため、こすれが付かないよう、カバーなどで保護したり、他のものと密着させずに離して保存するといった工夫をすると、良好な状態を保てると考える。

最も安全な保存方法は、光が当たらず、湿度、温度共に常温、且つこすれが生じない場所であると思われる。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

取り扱いの際は、爪によって革にキズがつくことや、汗や指紋によって金具が汚れることを防ぐため、手袋の着用が望ましい。クラリーノは、弾力性と柔軟性が高く、曲がりやすいため、筆入れの開閉時は、金具部分のみを持ち、柔らかな部分に力を入れないことが重要である。また、素材が柔らかいため下面までフタは容易に曲がるが、フタの内側の境目の破れが広がりめくれて、中の段ボールシートが露わになるため、開ける際はフタを曲げすぎず、角度に気をつける必要がある。クラリーノの素材の特徴上、表面は滑らかであ

るため、しっかり手で掴んで扱わなければ、落下してしまう可能性がある。持ち方としては、両手で片端ずつ持つと良い。ただし、柔らかいので、強く握りしめてはいけない。更にクラリーノは熱に弱いので、ストーブや暖房など熱を強く発生するものとは、近距離で取り扱うべきでない。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

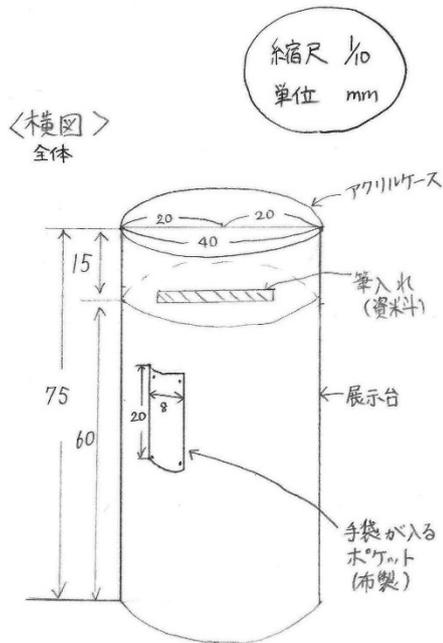
この資料は、立体品であることから壁ではなく、台の上に置いて展示する。資料を保護するために、アクリルケースで資料を覆う。資料は筆入れであり、外観や中身、その両方を見てもらってこそ価値があるため、レプリカ、またはハンズオン用の資料を同形状の展示ケースに入れ、こちらは上が開くように扉を付ける。アクリルケース及び資料を置く台は、一度に多くの人に、さらには全方向から眺めることができるよう、円柱の形を使用する。ハンズオン用は観覧客自らに手袋を装着してもらい、筆入れを開けて中身の鑑賞や開閉時の間隔、材質による手触りの確認を体験してもらおうと考える。手袋は、汗や汚れの付着を防ぐことを目的としている。手に取る際は、万が一の落下の可能性を考慮し、アクリルケースの高さを超えないように、且つ展示台の上でのみの扱いを求める。また、飛沫防止のために、マスク着用をお願いする。

アクリルケース

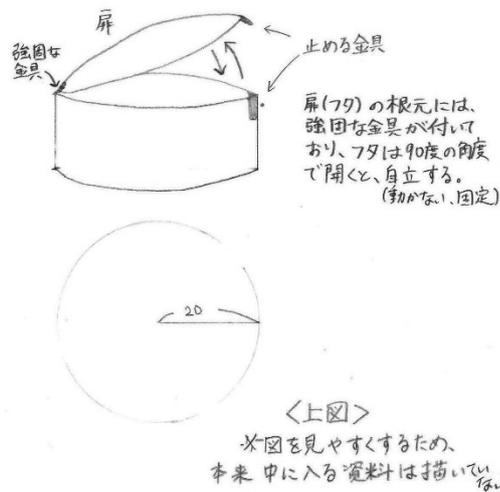
- ・直径400mm,高さ150mmの円柱。
- ・材質はアクリル,透明。
- ・90度まで開くフタが付いている。

展示台

- ・直径400mm,高さ600mmの円柱。
- ・材質は木材。
- ・資料の赤色が映えるようにするため、白色に塗装。
- ・手袋が入るポケット付き。(幅80mm,高さ200mm)

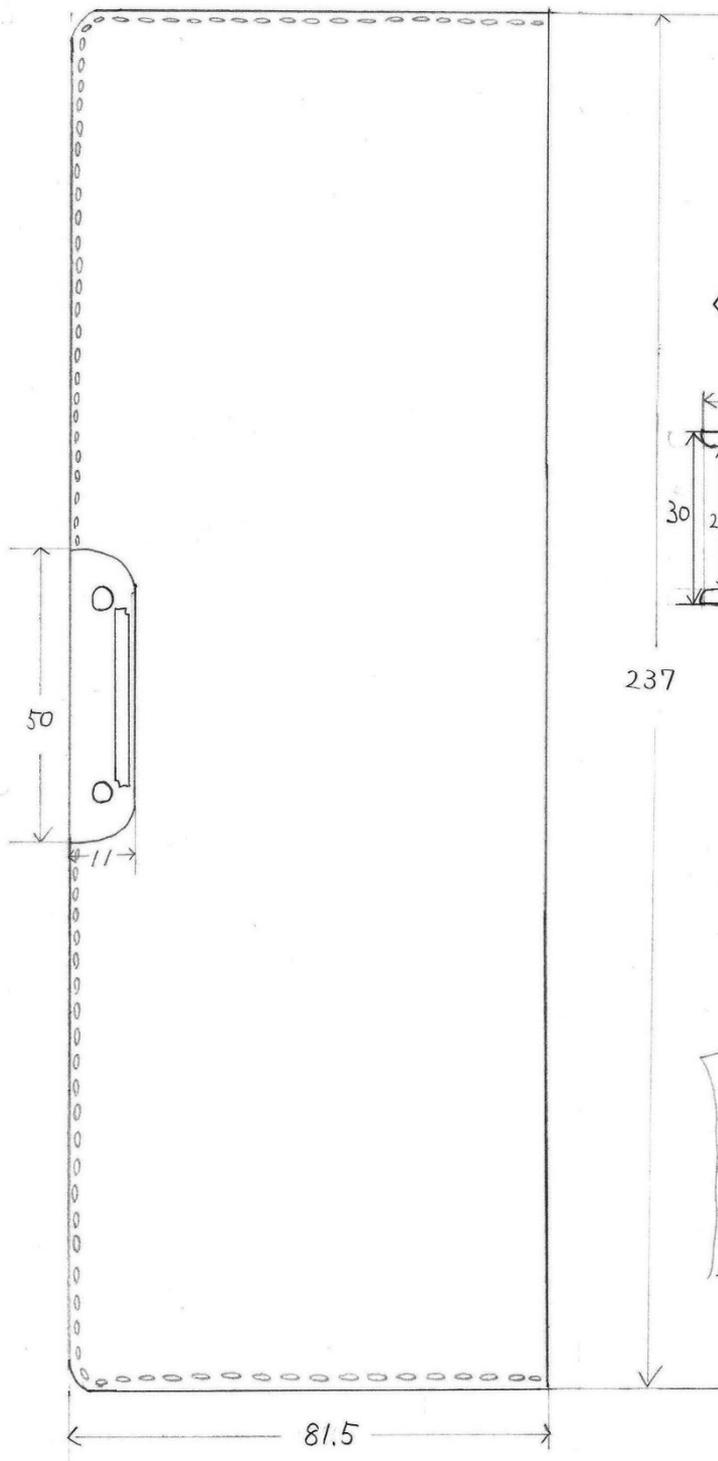


<アクリルケース横図>



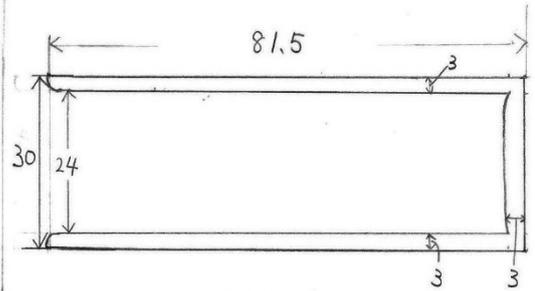
イラストレーション (Illustration)

<上図>



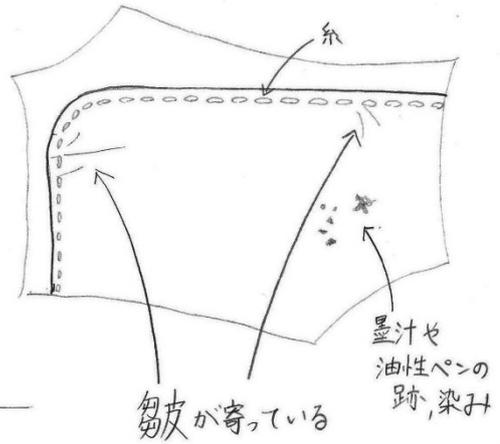
実寸大
単位：mm

<横図>



237

縦：237mm
横：81.5mm
高さ：30mm



レーベル (Label)

資料は鉛筆を入れる筆入れであることから、鉛筆を連想させるため、書体はHGS教科書体にした。文字サイズは、タイトルは22、解説は12で、読みやすい大きさにした。タイトルと解説の文字サイズを10違いにすることで、タイトルをより強調した。まずは、基本項目を箇条書きに表示して、資料の紹介を簡潔に行った。

マグネット筆入れ 赤色

- ・所有者 松山陽奈子 (2001年～)
- ・製造社 ツツワ株式会社
- ・原産国 日本
- ・使用期間 6年 (2008年4月～2014年3月)

所有者の母が、小学校入学祝いとして所有者にプレゼントした。片面のみ開閉可能な1ドア構造の箱型である。シンプル、軽量、そして丈夫な※クラリーノ生地 of 筆入れは、まだ筆箱に慣れていない小学校低学年の子どもたちでも、使用しやすい設計である。さらにフタは1ドアタイプのマグネット式なので、開閉が容易になっている。最も特徴的なのは、メインの収納スペースに5本分の鉛筆ホルダーがあり、抜き差ししやすい角度になっていることである。芯先の部分には、鉛筆の削り具合が一目で確認できる窓がついている。所有者が、小学校生活6年間毎日愛用した、思入れが詰まった筆入れである。

※クラリーノ生地は、ランドセルにも使用されている、水や汚れに耐久性を持った丈夫な人工皮革のこと。

博物館資料ドキュメント 『腕時計』

人文学部日本文化学科1年 飯塚 美月

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料は、腕時計である。この時計は「AUREOLE(オレオール)」と呼ばれるブランドのアナログクォーツ時計で、株式会社和工が作ったものである。品番はSW-467L-2で、レディースである。後述の通り、元のベルトは明るい茶色であったが、現在はワインレッドのベルトに付け替えられている。現在のベルトの素材は「ワニ革(カイマン・シャイニング)」である(株式会社バンビのインターネットサイトによる)。この時計の使用バッテリーは酸化銀電池である。

本体側面とリューズは金色で、材質はステンレスである。本体内部には、白地に黒で数字とメモリ、「AUREOLE」のロゴが書いてある。メモリのちょうど数字と重なる部分のみ金色の点になっている。時針と分針は黒、秒針のみ金色であり、それらが透明なカバーで覆われている。このカバーの材質はサファイアガラスである。ベルトの先についている金具は金色で、本体側面と同じ色になっている。ベルトの裏は薄茶色の革(素材不明)に覆われていて「12 BAMBI」と書かれており、本体の裏にも「AUREOLE」「ALL. SS. WATER RESISTANT」「3D SW-467LC」と書かれている。本体の裏は銀色である。また、資料から見て左側面には、時刻と分数を合わせるための、リューズと呼ばれる突起が付いている。これを外側に引くことで時計を止め、回して時間を合わせた後、本体に向かって押すと、カチッという音がして時計が動き始める。なお、この時リューズを回して動くのは時針と分針のみで、秒針は調節が不可能である。

本体部分は縦が3.0 cm、横が2.7 cm(リューズ含む)、厚さが0.6 cmで、ベルトは幅が本体に近い所で1.2 cm、先の方で1.0 cm、長さは本体を挟んで上が7.5 cm(金具部分含む)、下が10.8 cm、厚さは下の本体に近い所と上が0.2 cm、下の先の方が0.1 cmである。資料全体としては、一番長い所で20.9 cmとなっている。ベルトの下から2.4 cmの所から0.4 cm間隔で、直径0.1 cm程度の穴が7個開いている。

「AUREOLE」というのは1895(明治28)年にスイスで誕生した時計のブランド名で、芸術家フィリップ・ウォルフによって生み出されたものである(株式会社和工のホームページより)。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

この資料は2014(平成26)年3月24日に、所有者である飯塚美月が中学の入学祝として父方の叔母に購入してもらったものである。叔母と2人きりで買いに行き、札幌市手稲区にあるエリザベス宝石トリアル手稲店にて、所有者が自分で選んだ。入学祝を買っても

らうにあたって母から上限金額を設定されていたが、その金額内では気に入ったデザインのものが見つけられなかった。長く使えるものであり、かつ毎日使うものであることを考え、「好きなものを買ってあげるから、お母さんには上限ぴったりだったよと言っておけば良い」と叔母が言ってくれたためこの時計を選んだ。

ベルトは破損を理由に2度ほど取り換えられており、1度目は2017(平成29)年、所有者が高校1年生になった時で、2度目は2020(令和2)年、所有者が大学1年生になった時である。購入時のベルトの色は明るい茶色だったが、1度目のベルト交換の時に父が選んでくれたワインレッドが気に入り、2度目に所有者自身がベルトの交換に行った時にも同じワインレッドのベルトに交換してもらった。

所有者はこれ以外に時計を持っていないので、外出時には必ずこの時計を着けて行く。

2016(平成28)年、所有者が中学3年生の時、体育の授業で腕時計を指定ジャージのポケットに入れたまま忘れてしまい、ジャージを動かした際に落としてしまったが気付かず、危うくそのままそのまま失くすところだったことがある。次の授業開始直前まで友人を巻き込んで探していたところ、たまたま通りかかった国語の教科担当の先生が見つけてくれたことで事なきを得た。

コンディション・レポート (Condition Report)

時計の本体部分より下のベルトに開いた7つの穴のうち、上から2つ目のみ、布の内側が少し傷ついてボサボサになっている。ベルトは腕に合うように湾曲していて、ベルトの表裏に折り目が付いている。ベルトを新しく付け替えてから1年と経っていないこと、新型コロナウイルスの影響で例年より外出した回数が少ないことから、ベルトには他に傷や糸のほつれ、色褪せなどは見られない。

時計本体には表にも裏にも細かい傷が相当数付いているが、全ていつどこで付いた傷であるかは不明である。本体の金色部分の、ベルトと本体の隙間にあたる所が茶色く汚れている。また、本体表の透明なカバーと裏の銀色の部分には、かなりはっきりと指紋が付いている。これは、所有者がこの時計を使い始めた2014(平成26)年から現在に至るまで、一度も洗ったり汚れを拭き取ったりといった手入れをしていないからだと考えられる。

2021(令和3)年1月21日現在、時刻の遅れは見られない。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

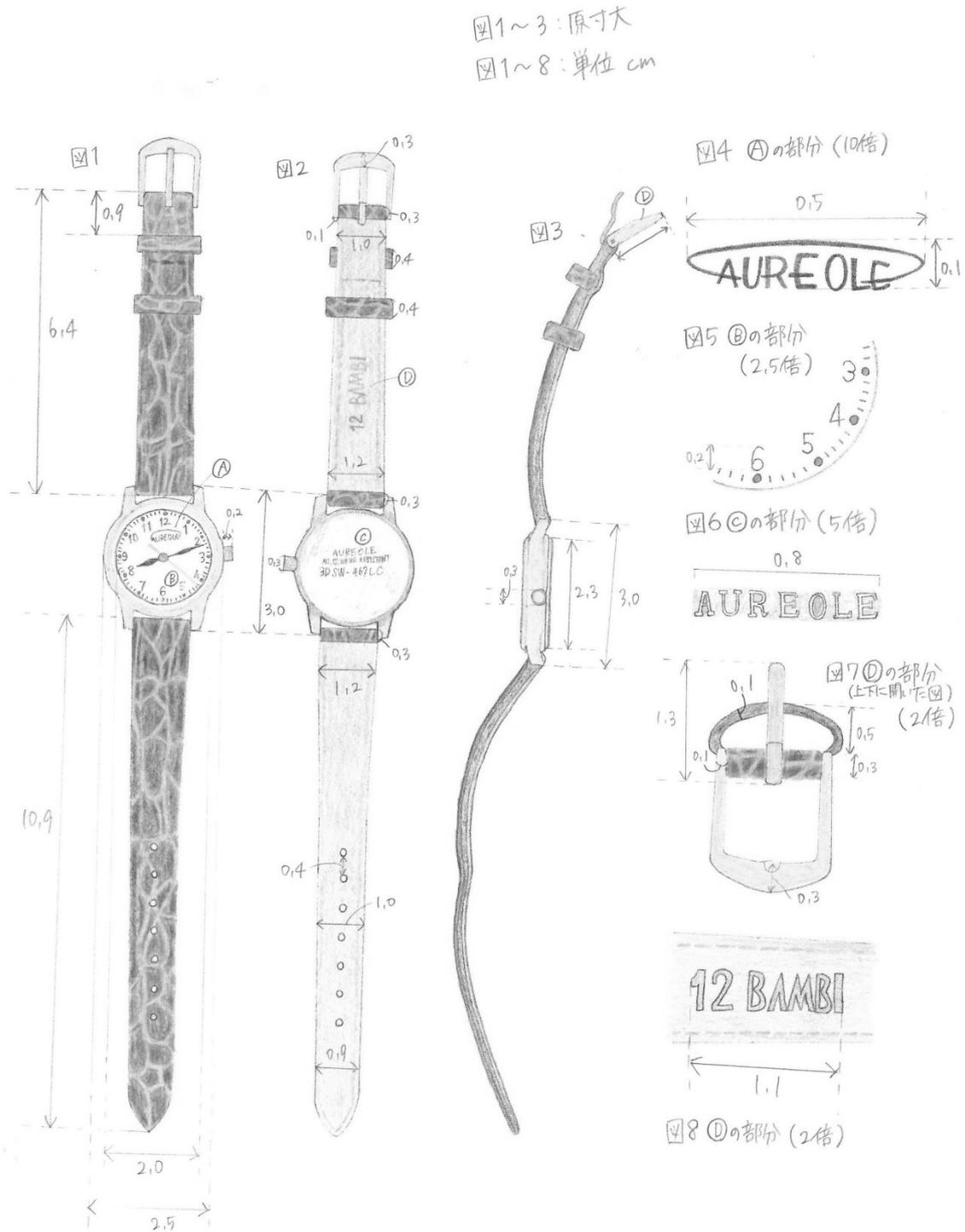
前述の通り、この時計は酸化銀電池で動くタイプのものであるため、陽に当てておく必要はなく、むしろベルトの色褪せなどに繋がる可能性があるため、なるべく陽の当たらない所に保管するべきである。展示の際にも、強い光が当たらないように、窓から遠い位置に展示する、照明もあまり強くしないなどの工夫が必要である。

この時計の材質は、ワニ革、ステンレス、サファイアガラスの3つが判明している。よって、保存する時の湿度は、ガラスの化学的退化、不透明化やベルトの生物的損傷を考慮

し、40~50%程度が適切であると考える。

室温は極端に寒かったり極端に暑かったりしなければ問題ないと考えられる。カバー内にある空気と室温が違いすぎると温度差でカバーが曇ってしまうため、急激な温度変化には注意が必要である。

イラストレーション (Illustration)



ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

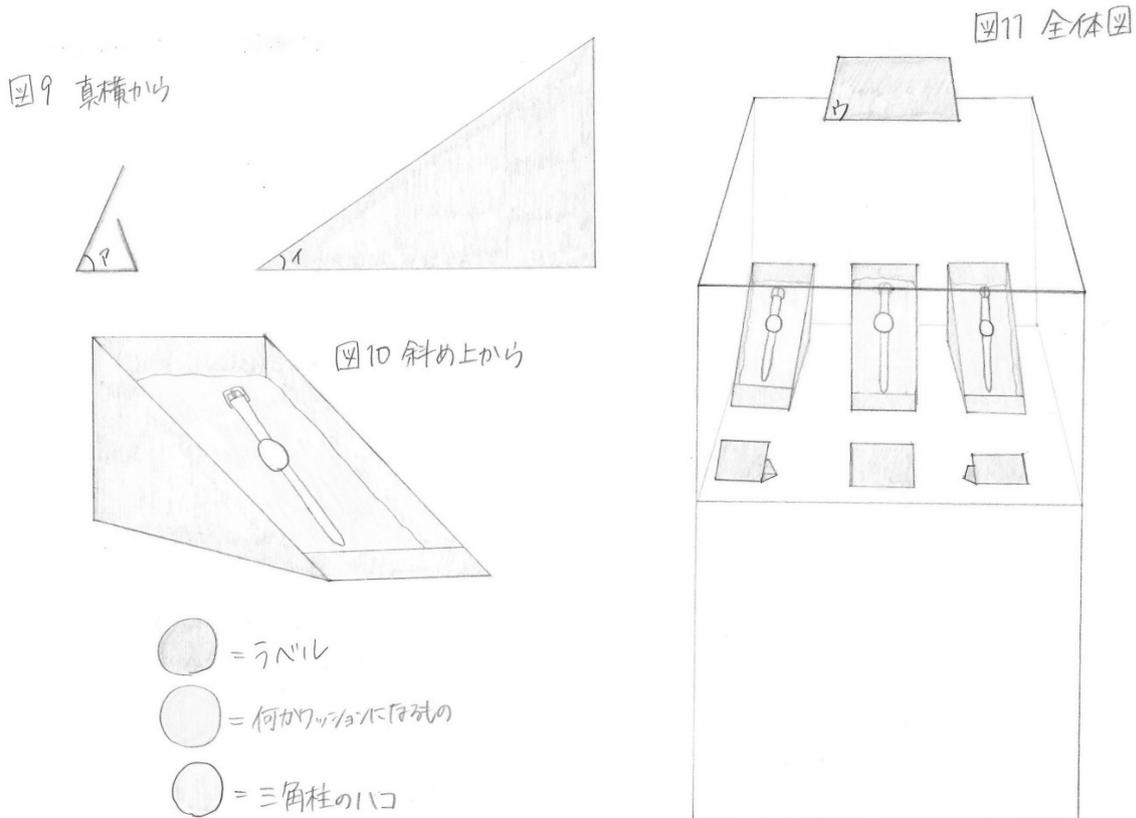
多少の防水加工はされているが、それでも水がかかることは避けるべきである。また、強い衝撃を受けると本体のカバー部分が割れてしまう可能性がある。加えて、鋭利なものと接触すると本体部分に傷が付いたり、最悪の場合ベルト部分が切れたり穴が空いたりして破損してしまう可能性がある。そのため、水をはじめとする液体類や刃物などの近くでは扱わないようにし、強い衝撃には注意するべきである。加えて、アクセサリなども接触すると傷の原因になってしまうため、身につけている場合は外してから扱うべきである。

さらに、時計本体は指紋が付きやすく、ベルトが黒ずんでしまう原因にもなるので、汚れた手で触るのは望ましくない。手袋を着用してから扱うべきである。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

三角柱のハコ状のものにクッションとなるものを詰め、その上に資料となる腕時計を乗せて展示する。メンテナンスや移動の事を考え、資料そのものは固定しない。

図 11 のように、展示ケース内に 3 種類の資料を並べて展示する。図 9 の角度「ア」「イ」は、展示ケースの高さも考慮して、見やすいように工夫する。ケース内に展示する資料同士は共通点があるということを図 11 のラベル「ウ」で説明する。



レーベル (Label)

①、②共に書体は「游明朝」を用い、スタイリッシュな雰囲気になるようにした。資料名は太字で18ポイントにし、本文は通常の10.5ポイントで統一した。色はワインレッドと白、ゴールドの3色を用い、資料である時計と同じ配色になるようにした。

①は背景の色が濃いので、枠も太めに4.5ポイントに設定してゴールドの色の存在感が出るようにした。

②は少し細く3.0ポイントに設定し、すっきりとした印象になるようにした。本文については、①が「腕時計」としての資料であることを想定したもので、②が「AUREOLE(オレオール)ブランドの時計」としての資料であることを想定したものとなっている。

SW-467L-2(AUREOLE)

2014(平成26)年頃に日本で作られた、
AUREOLE(オレオール)ブランドのアナログクウォーツ時計。
AUREOLE(オレオール)は、1895(明治28)年のスイスで、
芸術家フィリップ・ウォルフによって生み出された時計ブランド。
この資料のベルトは破損したために付け替えられているが、
本来は明るい茶色のベルトが付けられていた。

①

SW-467L-2(日本製)

2014(平成26)年頃に日本の株式会社・和工によって作られた、
レディースのアナログクウォーツ時計。
日常生活用防水が施されているため、洗顔や雨程度には耐えられる。
この資料のベルトは破損したために付け替えられているが、
本来は明るい茶色のベルトが付けられていた。
使用バッテリーは酸化銀電池。

②

博物館資料ドキュメント 『ハンカチ（がまくんとかえるくん）』

人文学部日本文化学科 1年 一色 紗矢香

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料はタオル生地の手ハンカチである。ハンカチつまりハンカチーフとは、手や顔を拭いたり、装身具として用いる小型の布である。hand (手) と kerchief (頭にかぶる布) の複合語を指す。(コトバンク ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典より) 所有者は、一色紗矢香である。

ハンカチには「がまくんとかえるくん」シリーズのがまくんとかえるくん、そしてクッキーがデザインされている。このクッキーは『ふたりはともだち』に登場するものである。「がまくんとかえるくん」シリーズは、著者でありイラストレーターでもあるアーノルド・ローベルによって作成されたユーモアでほのぼのとした物語である。登場人物は陽気でしっかり者の足が長い緑色のかえるくんと、おっちょこちょいでのおんぴり屋の茶色いひきがえるくんという対照的な2人が中心である。この2人が冒険に出かけ、物語を語り、悲しみ、孤独、さらには不機嫌なときにお互いを元気づけるという内容になっている。『ふたりはともだち』、『ふたりはいつしよ』、『ふたりはいつも』、『ふたりはきょうも』の4作品がある。ふたりはともだちシリーズは、30年以上にわたりベストセラーの絵本シリーズである。日本語訳は全て三木卓が行っている。

ハンカチは正方形で縦 22.2cm、横 22.2cm であるが、四隅の縦約 2.1cm、横約 2.1cm 部分は緩やかなカーブを描いているため、角が丸くなっている。この角は約 155 度である。ハンカチは縁取りがされており、幅 0.2cm である。ハンカチは4つの正方形になるように区切られており、それぞれ縦 11cm、横 11cm で区切られている。ハンカチのデザインがはっきりと見える側を正面(表)にしてみたとき、右側に縦 2.7cm、横 2.6cm のタグがある。詳しい素材は不明であるが、少し硬めの麻のような素材である。ハンカチは正方形に区切られたうち左上はがまくん、右下にかえるくんがデザインされており、『ふたりはいつしよ』に登場するクッキーを二人で食べるシーンが描かれている。がまくんとかえるくんにはアイボリー色とうぐいす色の2色のタオル糸が使われている。うぐいす色の糸で縁取りをし、そのなかをアイボリー色の糸で埋めることでかえるくんとがまくんを描いている。そのためアイボリー色が目立つ。ハンカチ左下には溢れるほどのクッキーが入ったボウルが描かれている。かえるくんとがまくん同様、アイボリー色とうぐいす色の2色の刺繍糸を使用している。こちらはうぐいす色を背景にアイボリー色で縁取りをしており、うぐいす色が目立つ。またボウルのまわりには縦 0.3cm、横 9.6cm の細い枠組みが、額縁のようにアイボリー色でデザインされている。右上には「Frog and Toad」という文字がうぐいす色を背景にアイボリー色の文字で書かれており、単語ごとに縦に並んでいる。「Frog and Toad」

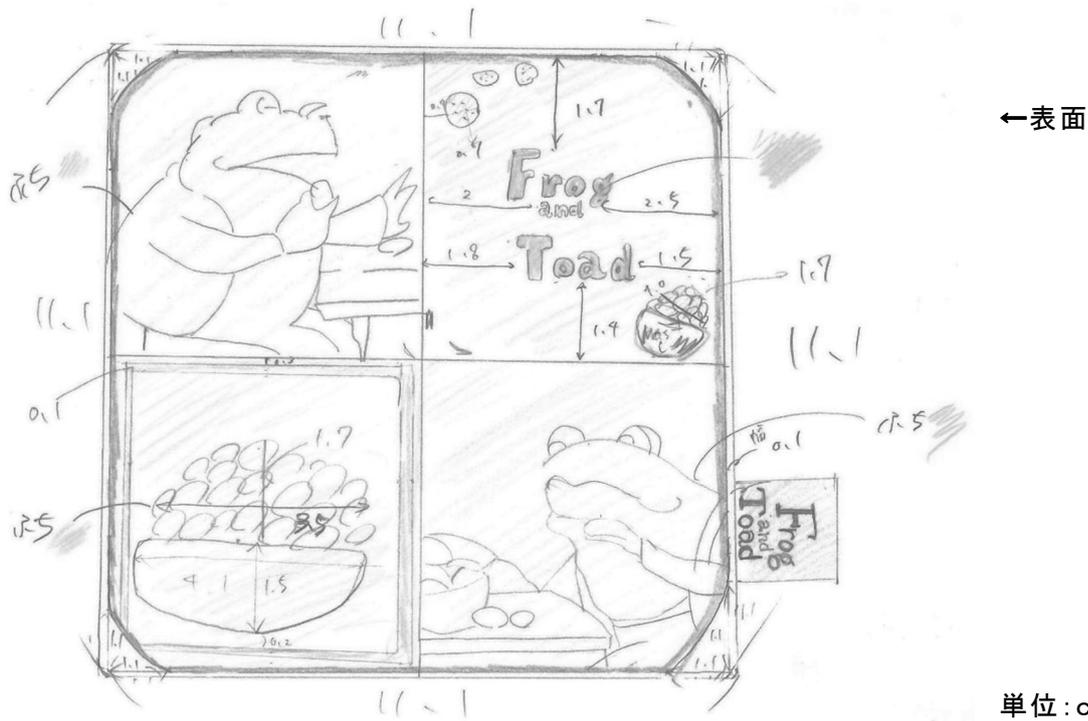
は、かえるくんとがまくんの意味である。その文字の左上には薄茶色とこげ茶色の刺繍糸で刺繍された3枚のクッキーがデザインされている。薄茶色はクッキー生地、こげ茶色がクッキーのふちとチョコチップを刺繍で表現している。また文字の右下には、ハンカチの左下にあるものと同じボウルから溢れたクッキーの刺繍がある。このボウルに入っているクッキーは複数枚重なっている。クッキーについては左上にあるものと同様の刺繍糸で、同じように刺繍されている。ボウルのふちと質感表現は、クッキーのふちとチョコチップ同様こげ茶色の刺繍糸で刺繍されている。ボウル自体は白いワッペンでふわふわとした質感になっており、白い糸で縫い付けられている。恐らくまつり縫いだと思われる。全体として色合いをみると、対角になるようにかえるくんとがまくんのアイボリー色と、また対角になるようにクッキーのうぐいす色が市松模様のようにになっている。ハンカチはパステルブラウン色のタオル生地で縁取られているが、どのような縁取りの仕方かは不明である。デザインを表としたとタグには、「Frog and Toad」という文字がオリーブ色で印刷されている。裏には同じオリーブ色で「Frog and Toad Copyright @ by Arnold Lobel」と、一行空けて「MADE IN CHAINA」と印刷されている。文字は恐らくゴシック体である。このラベルから、このハンカチは中国製であることがわかる。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

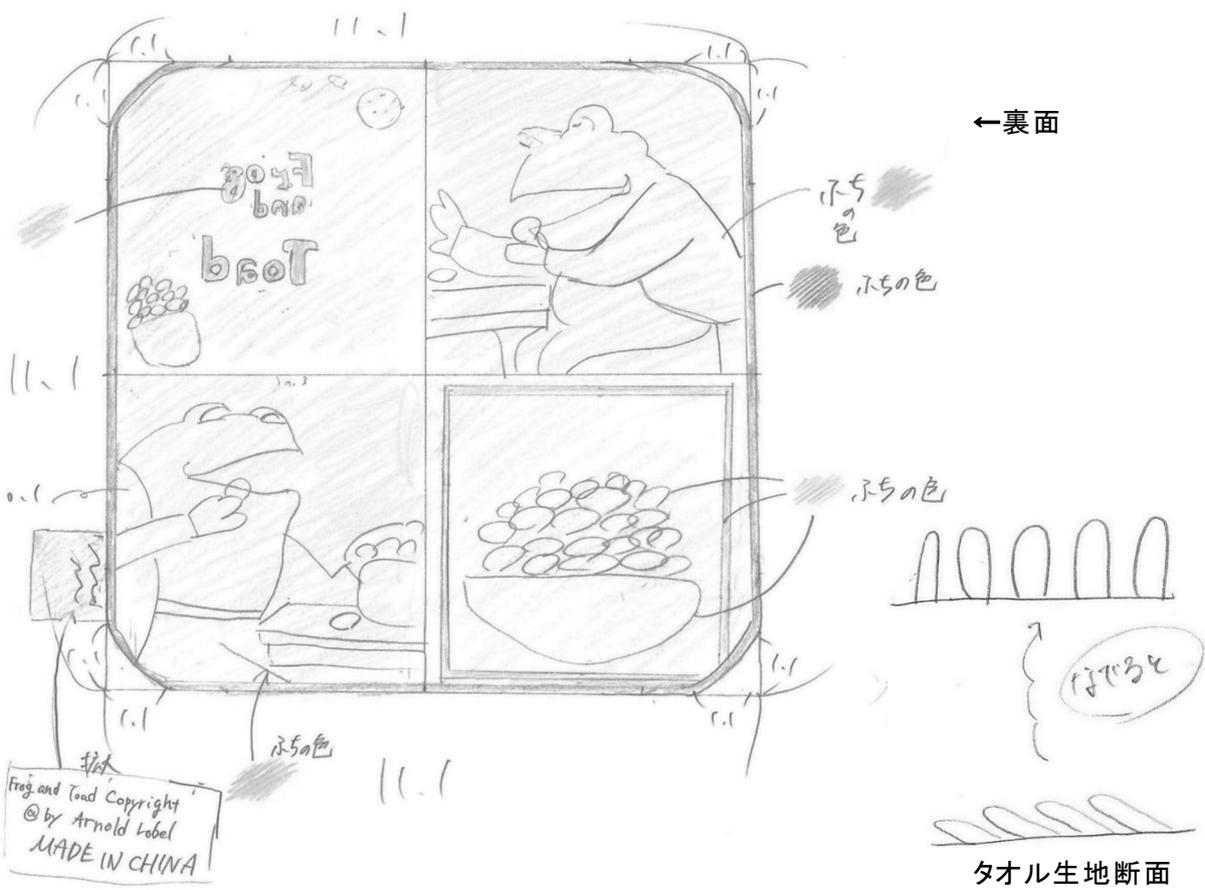
このハンカチは現所有者である一色紗矢香の母親が購入し、現所有者へ渡ったものである。購入場所はコーチャンフォー美しが丘店の雑貨コーナーである。購入当時は入荷したばかりだったのか、入口付近の特設コーナーに並んでいた。当時コーチャンフォー美しが丘店には別用で訪れたのだがこのハンカチが目に入り、現所有者が母親に購入してもらった。元は自分で購入予定だったが、母親の「弟のものと一緒に会計をするから一緒に買ってあげる」といった発言により、母親に購入してもらった。なお、2021年1月23日に同店を訪れた際には、常設雑貨コーナーの一角に他のキャラクターグッズと共に並んでいた。正確な購入日時は不明だが、現所有者が高校2年生であった2018年秋ごろに購入した。現所有者はこのハンカチに描かれている「がまくんとかえるくん」シリーズが大好きであり、シリーズは日本語訳版を全てそろえているほどである。記憶している購入価格は税別580円であり、消費税8%だと626円になる。しかし、「がまくんとかえるくん」シリーズ公式ホームページや、コーチャンフォー及びコーチャンフォー美しが丘店ホームページにも記載されておらず、はっきりとしない。

購入してから何度も使用しており、使用後は帰宅後必ず洗濯し、木製のタンスに入れて保管している。直射日光は当たらないものの、木製ということもあり湿気が気になるため乾燥剤とともに保管している。乾燥剤は適宜に取り換えている。

イラストレーション (Illustration)



単位: cm



タオル生地断面

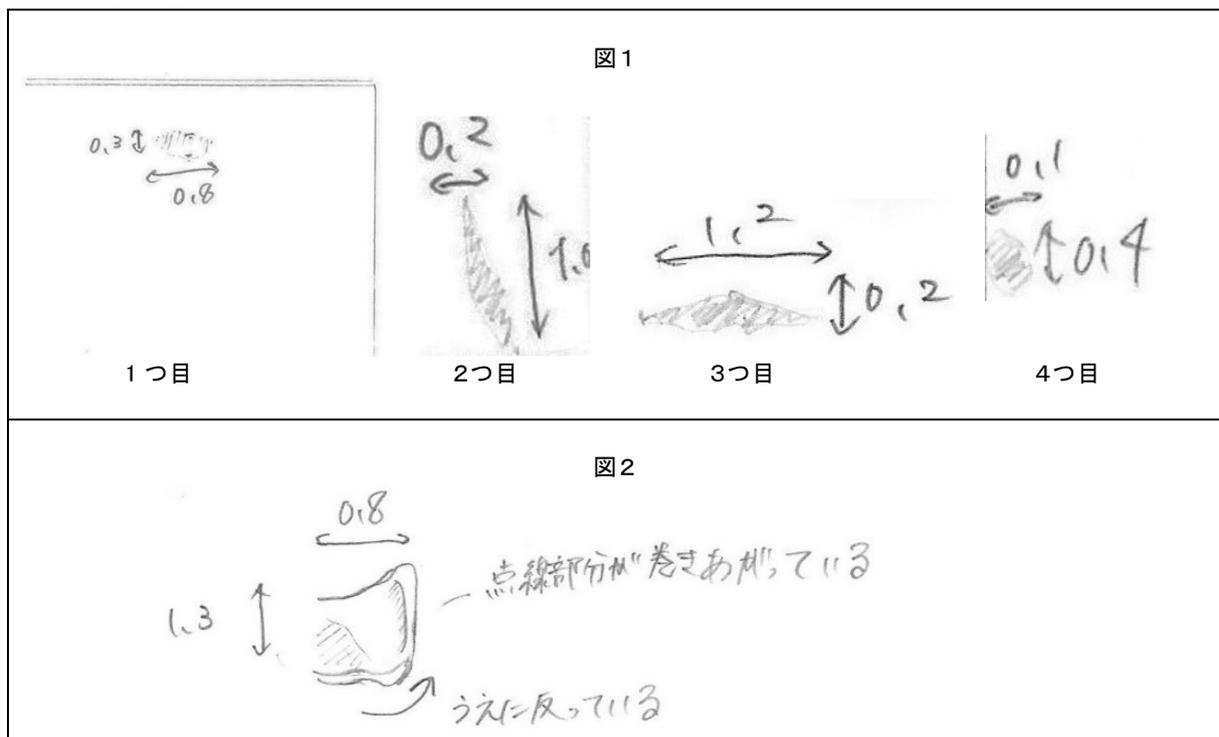
コンディション・レポート (Condition Report)

何年にもわたり使用しそのたびに洗濯しているため、部分的によれやほつれが確認できる。また、洗濯の影響か手触りにごわつきがある。

ハンカチのデザインがはっきりと見える側を表としたとき、4ヶ所の汚れが確認できる。(図1) 1つ目はハンカチ左上、がまくんが描かれている右上に楕円形の黒い汚れがうっすらと確認できる。大きさは縦約0.3cm、横(直径)約0.8cmである。2つ目はハンカチの中央やや左、がまくんが描かれている右下に縦長の黒い汚れがはっきりと確認できる。縦約1cm、横約0.2cmである。3つ目は、ハンカチの中央やや右、「Frog and Toad」とクッキーが描かれている左下にはっきりと横長の黒い汚れが確認できる。縦約0.2cm、横約1.2cmである。4つ目は、3つ目とほぼ同じ箇所でありハンカチの中央やや右、「Frog and Toad」とクッキーが描かれている左下にはっきりと縦長の黒い汚れが確認できる。縦約0.4cm、横約0.1cmである。いずれの汚れも恐らく現所有者が使用しているマスカラ液が付着したか、もしくは油性ペンなどがついた手を洗い、その手を拭いた際に付着したものと思われる。

また2年間使用しているため、よれやほつれも確認できる。ハンカチのふちには数か所のほつれが確認されるが、洗濯と持ち運ぶ際の摩擦によるものと思われる。ハンカチ全体によれも確認できる。洗濯と乾燥する際に洗濯バサミで吊るしていたことが原因であり、洗濯バサミで吊るして乾燥していたことが最も大きい原因だと考えられる。

タグにも癖が認められる。ハンカチのデザインがはっきりと見える側を表としたとき、タグ全体が表側に反るような癖がついている。更にタグの上半分は巻き上がるような癖がある。(図2)



リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

布、とりわけタオル生地であるため、縦横また斜めの刺激には耐久性がある。しかし、タオル生地はループ状の糸が表面に出ているため、先端が鋭いものや突起には引っかかりやすい。引っかかると糸がほつれる可能性や糸が千切れる可能性がある。耐性はあるもののひっぱる行為を繰り返し行ったり、長時間ひばったりすると布地の変形に繋がる。

直射日光による退色には特に気を付けなければならない。日光による退色を防ぐため、保存の際は直射日光に当たらない暗所で保管する必要がある。皮脂が付着したままの状態では、酸化して変色することも考えられる。そのため、皮脂が付着していると思われる場合は取り除く必要がある。また取り扱う際には、皮脂が付着することを防ぐために手袋を着用することが望ましい。

虫とカビの発生にも注意を払う必要がある。ゴミなどが付着したまま保存すると虫が発生する可能性が考えられるため、ゴミなどは取り除く。付着しないようにするため手袋の着用や、清潔な場所での保管が求められる。カビが発生する恐れがあるため、湿度の高い場所は避けて保存することも必要である。タオル生地が乾燥による劣化をしない程度に低湿度の場所で保存すること、除湿剤の使用が望ましい。

温度については、極度に低温もしくは極度に高温でなく、室温であることが良いと思われる。タオル生地や刺繍糸、アップリケなど燃えやすい素材が使用されているため、火がある場所では扱わない。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

タオル生地はループ状の糸が表面に出ているため、先端が鋭いものや突起には引っかかりやすい。引っかかると糸がほつれる可能性や糸が千切れる可能性がある。そのため指輪や時計、ネックレスは外し、爪も短くする。先端が鋭いものや突起があるものは近づけない。ピンセットなど先端が鋭い道具や突起がある道具でゴミを取り除く必要がある場合は、ループ状の糸に細心の注意を払って使用する。また、布製で非常に燃えやすいため火のある場所では絶対に取り扱わない。必ず周囲に火の気のものがないか、引火する状況になっていないかよく確認する。直射日光による退色を防ぐため、直射日光に当たらないようにする。皮脂が付着したままの状態や皮脂が付着すると、酸化して変色する。そのため取り扱う際には、皮脂が付着することを防ぐために手袋を着用することが望ましい。皮脂が付着したと思われる場合には皮脂の除去が求められる。漂白剤などが含まれた水に触れると、脱色または他のものに色移りすることがあるため触れさせない。ゴミは虫の発生原因になるため、発見次第ループ状の糸に気を付けながら除去する。虫を発見した場合は直ちに除去する。ノミやダニの発生も考えられる。排泄物や死骸にカビや虫が新たに発生することがあるため、発見次第直ちに除去する。湿度の高い場所や密閉された場所ではカビが発生するため、通気性が良く適度な湿度である必要がある。この資料に汚れやほつれ、タオル生地のごわつきがあるが、除去や状況の改善などの扱いにも注意する。現状のまま汚れた

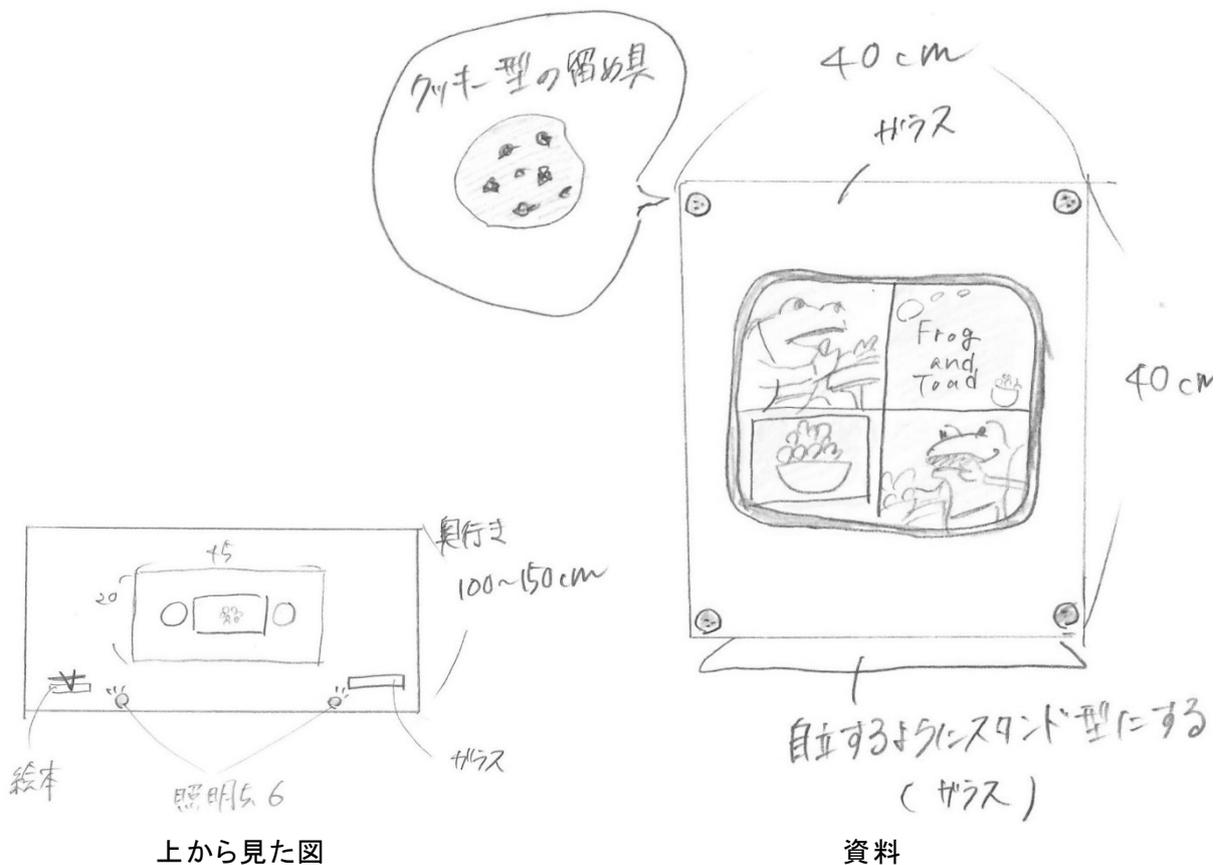
ども資料の一部とするのか、汚れなどが無い状態を資料とし汚れなどは記録に留めるのみにするのかは、検討する必要がある。

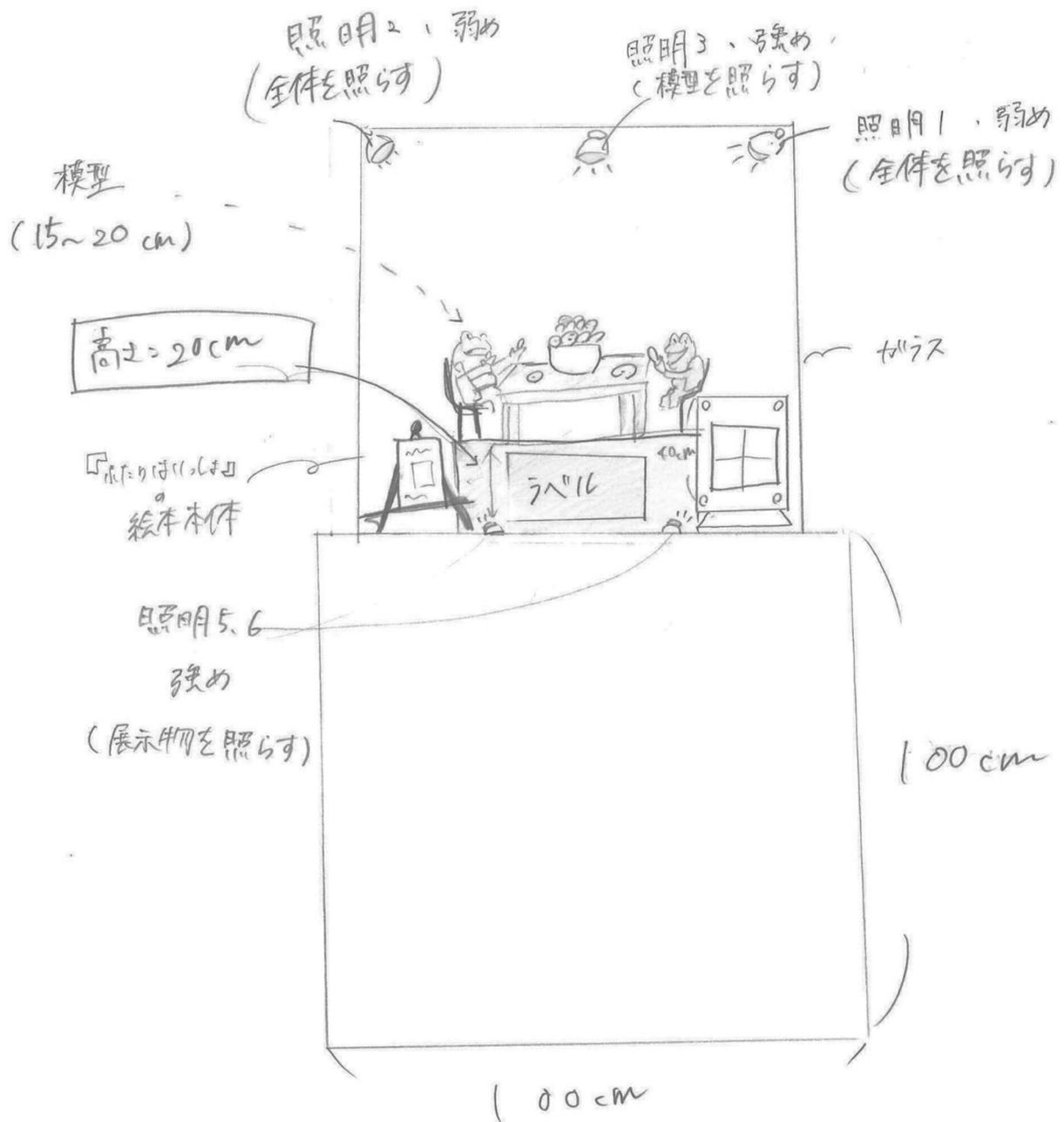
エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

この資料が絵本「がまくんとかえるくん」シリーズの博物館であると仮定し、そのなかでも『ふたりはいつしょ』のセクションで関連グッズとして展示する。この前後には発売順に「がまくんとかえるくん」シリーズの世界観を表現したセクションを配置する。いずれも絵本を展示するが、可能であれば初版などが良い。絵本の世界観に浸ってもらうために可能であれば、かえるくんの人形を使用しワンシーンを再現する。またその世界観を表現したグッズも配置する。

子どもが見やすいように博物館の床から 120cm の位置に展示する。全体は明るくし絵本本体、グッズ、人形を強く照らす。絵本のポップで可愛らしい世界観が伝わるようにする。

この資料は自立しなく、台に乗せても自立しない。そのため、吊り下げるかガラスパネルに挟んで展示することが考えられる。吊り下げるとよれに繋がるため、ガラスパネルに挟んで展示する。ガラスパネルを自立させるため正方形の底面をガラスで作成し、ガラスパネルはクッキーに見立てたねじで四隅を留める。この付近には絵本と、クッキーを食べるがまくんとかえるくんを配置する。他にもグッズがあれば並べる。これらに触ることができないように、ガラスケースで囲う。





全体図

レーベル (Label)

絵本「がまくんとかえるくん」シリーズの『ふたりはいっしょ』についての資料であるため、可愛らしく明るいイメージを与えるレーベルを作成した。可愛らしい印象で、かつ子ども読めるようにひらがなで作成した。フォントは「メイリオ」を使用した。背景はかえるくんの色である緑色、文字色はがまくんの茶色、枠は文字色よりも濃い緑を使用した。博物館利用者は展示に近づいて見ることが予想されるため、文字の大きさは12ポイントにした。内容はなにをモチーフにしたグッズであるのか、どのようなデザインかを中心に作成した。

文字枠#7D7A77

背景 #C5E0B4

文字 #70AD47

『ふたりはいつしょ』 がまくんとかえるくんのハンカチ

アーノルド・ノーベルによるえほんシリーズ「がまくんとかえるくん」の『ふたりはいつしょ』のタオルきじハンカチです。ハンカチにえがかれているばめんは、『ふたりはいつしょ』にとうじょうします。ようきでしっかりものの、あしがながいみどりいろの「かえるくん」と、おつちよちよいでのんびりやのちゃいろい「がまくん」が、2りでクッキーをたべるシーンがデザインされています。ハンカチのひだりうえにいるのが「がまくん」、ハンカチのみぎしたにいるのが「かえるくん」です。2りがたべているこのクッキーは、ハンカチのみぎうえとひだりしたにししゅうされています。「Frog and Toad」は「かえるくんとがまくん」というやくになります。

参考文献

コトバンク 「ハンカチーフ」

<https://kotobank.jp/word/%E3%83%8F%E3%83%B3%E3%82%AB%E3%83%81%E3%83%BC%E3%83%95-117884>

2021年1月24日 閲覧

株式会社コスモマーチャндаイジング「Frog and Toad がまくんとかえるくん」

<http://www.cosmomerchan.co.jp/property/%e3%81%8c%e3%81%be%e3%81%8f%e3%82%93%e3%81%a8%e3%81%8b%e3%81%88%e3%82%8b%e3%81%8f%e3%82%93/>

2021年1月24日 閲覧

博物館資料ドキュメント 『ぬいぐるみ (Livly Island のピグミー)』

人文学部日本文化学科 1 年 栗原 一華

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料は、ぬいぐるみである。ぬいぐるみは、型紙に合わせ裁断した布を縫い合わせ、装飾をなどが加えられた人形のことを言う。材料は布、糸、プラスチックである。

GMO GP 株式会社 が運営を行っていたインターネット上のブラウザゲーム、Livly Island (リヴリーアイランド) の「リヴリー」という架空生物のキャラクター「ピグミー」のイベント限定ミドルサイズぬいぐるみである。資料である白い色のピグミーは、株式会社タイトー製のアミューズメントスペースでのみ入手可能なシリアルナンバー入りの 300 個のみ存在する北海道限定モデルのうちのひとつである。

全長：約 17.7cm、幅：約 27cm、厚さ：約 8.0cm、頭・縦：約 11.2cm、頭・横：27cm、胴体・縦：約 6.5cm、胴体・横：約 5.3cm、胴体・厚さ：約 4cm (尾込み：6.2cm)、耳の長さ：7.4~7.8cm、足の長さ：約 5cm (一番長い箇所)、尾の直径：約 2cm となっている。楕円形の綿が詰まった大きな耳が、耳以上に大きい楕円型の頭部についている。胴体は、頭部の半分以下の大きさである。ぬいぐるみ本体の布は白色とクリーム色のみである。刺繍によってつくられたワッペンが目のパーツとして使用されている。目にはえんじ色・白身が少し強い黄色・朱色・灰色、白色の糸が使用されている。尾のあたりにタグがあるが、制作会社である株式会社タイトーのロゴマークと Favorite Livly 以外の文字は、劣化により、確認するのは困難である。

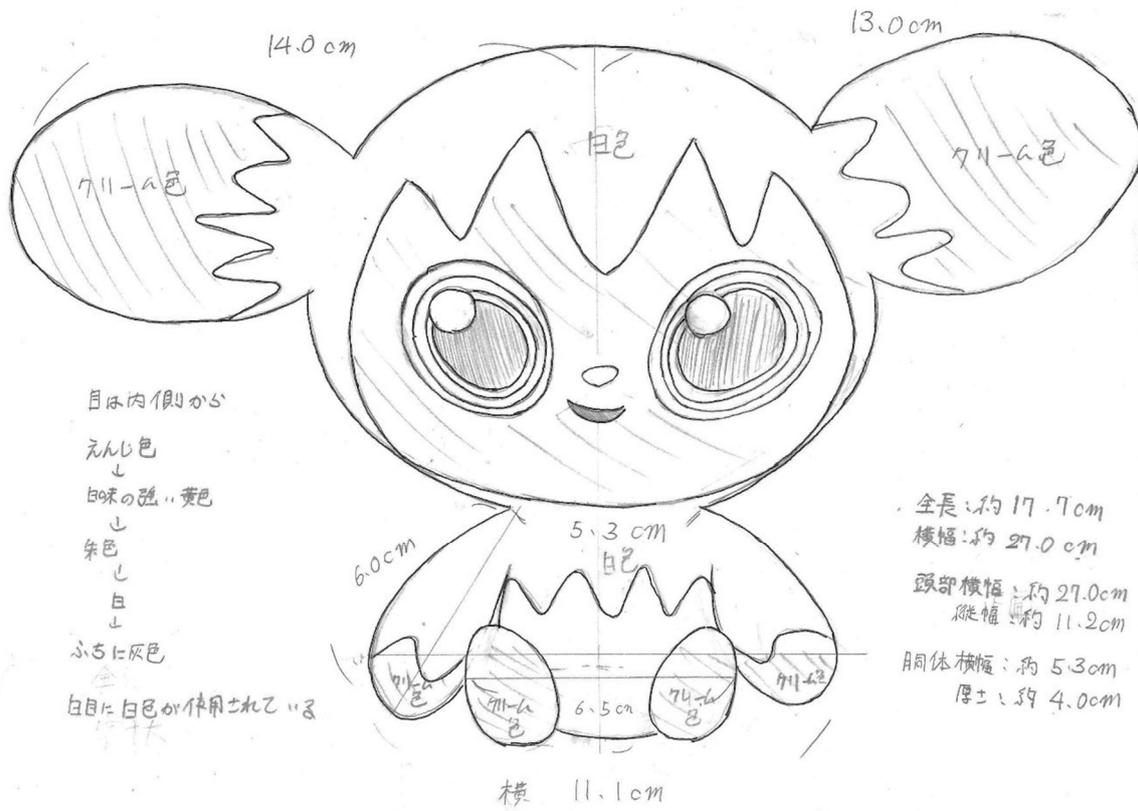
オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

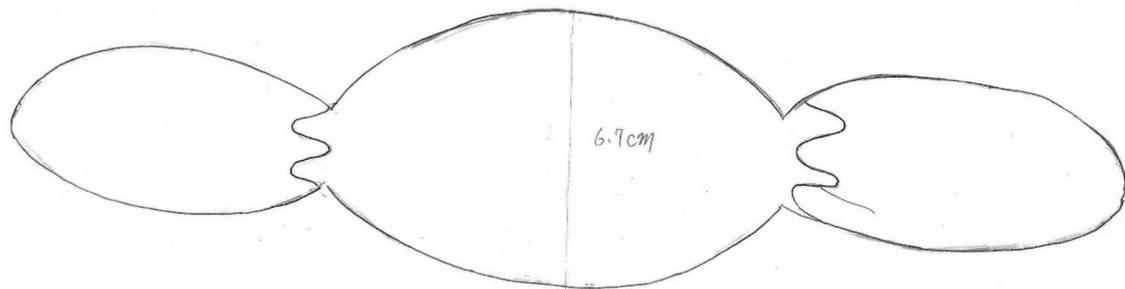
所有者は、2006 年の夏に母親と札幌の狸小路にあるアミューズメントスペースを訪れ UFO キャッチャーで手に入れた。現在は、入手することは不可能である。

所有者は、リヴリーの中でも特にこのピグミーが大好きであり、どうしてもこのピグミーのぬいぐるみが欲しかったため、当時幼稚園児の所有者は母親とともに、稼働初日の開店時間にアミューズメントスペースを訪れたのである。当初、所有者の母 5 回、所有者 5 回の計 10 回のみ挑戦予定だったが、所有者がどうしても欲しいとアミューズメントスペースで号泣し、結局母親が折れ、取れるまで行ったというエピソードがある。

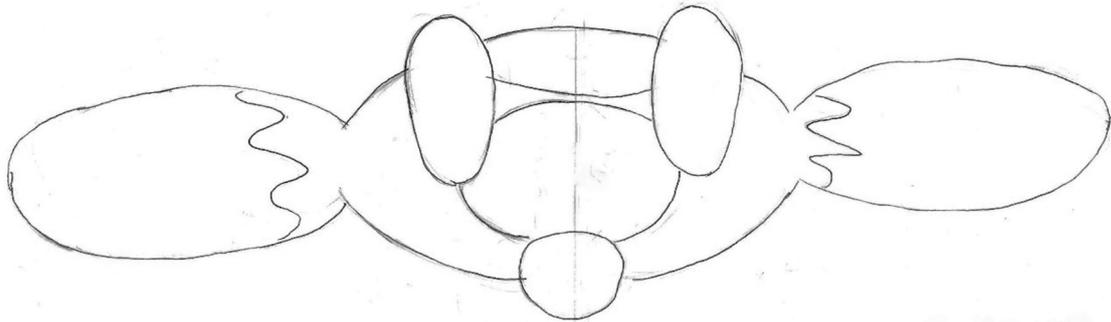
ちなみに、ピグミーとは、Livly Island (リヴリーアイランド) という GMO GP 株式会社 が運営を行っていたインターネット上のブラウザゲームのキャラクターである。ゲーム内容は、リヴリーという仮想のキャラクターを育て様々なことを行う育成シミュレーションであった。2002 年 2 月に運営サービスが始まり、2019 年 12 月 26 日に運営サービスが終了した。

イラストレーション (Illustration)





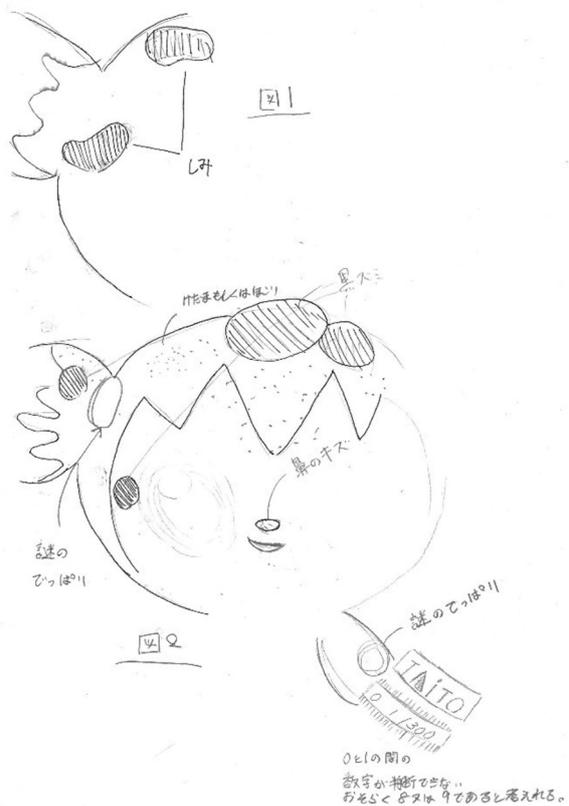
上



下

コンディション・レポート (Condition Report)

ぬいぐるみに使用されている布が全体的にボロボロになっている。定期的に洗濯を行っていたからだと思われる。表面には、毛玉や細かな埃が付着している。ところどころシミが目立つ。(図 1) 食事の際にも持ち込んでいたため、ソースなどがついてしまったからだと考えられる。鼻であるプラスチックのパーツに細かな傷がついている。(図 2) おそらく、家の中で遊んでいたときにどこかでぶつけてしまったのだろう。目のアップリケはほつれもない、きれいな状態である。耳と手に謎の出っ張りがある。原因は不明である。綿はしぼんでなく、状態が良い。タグはボロボロになっており、書いてある文字や数字は、判断が困難である。口のアップリケは少し傾いている。(図 2) 布の劣化により、縫い目が見えやすくなっている箇所がある。



リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

布製のぬいぐるみであるため、衝撃に対する耐久性は多少高くなっている。だが、度重なる洗濯により、新品のぬいぐるみと比べると布は明らかに劣化している。先のとがったものなどが、多少触れるだけでも布が破れ、中身の綿が出てきてしまう恐れがある。鼻のパーツはプラスチック製であるため、傷がつかないように特に気を付けるべきである。

保存の際、特に気を付けるべきことは光と酸化による変色である。布が変色してしまうことを防ぐため、直接光が当たらない暗い場所での保管が望ましい。酸性のものや手の脂質が付着した場合も変色の恐れがあるため注意が必要である。また、汗や、手垢から発生した菌が臭いの原因となってしまうため、取り扱う際は、布製の白手袋をはめるようにする。

光以外にも、カビの発生や虫による「食害」にも注意が必要である。カビが発生しないよう、湿度と汚れに気を付ける。埃の付着が食害の原因となるため、保存をする際には、埃とごみがしっかり取り除かれているかを確認する必要がある。また、保存中に埃やごみが付着しないよう工夫するべきである。

湿度はカビの発生の原因となるが、大繁殖する温度は70%~80%あたりとされているため、高湿度には気をつけなければならない。また、鼻のパーツがプラスチック製であるため、高温になると変形が見られる可能性があるため注意が必要である。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

布製のぬいぐるみであるため、衝撃に対する耐久性は多少高くなっている。だが布が破れたり、糸がほつれたりしてしまうのを防ぐため、先端が尖っているものや引っかかる恐れがあるものには注意が必要である。ぬいぐるみに使用されている布の劣化が激しいため、細心の注意をしなければならない。この資料を取り扱う際は、指輪、ブレスレットなどのアクセサリー類や腕時計をし、布製の手袋を着用する。引火してしまう恐れがあるため、火のそばでは決して扱ってはならない。また、鼻のパーツにプラスチックが使用されているため、高温の場所での作業を行ったり、高温のものを近づけたりしてはいけない。プラスチックパーツの変形などの恐れがある。

退色の恐れがあるため、直接日光に当てたり、長時間光に当てたりすることは避ける。できる限り暗所での作業が望ましい。酸性のものや手の脂質が付着した場合も変色の恐れがあるため注意が必要である。また汗や、手垢から発生した菌が、ぬいぐるみの臭いの原因となってしまう。

カビが発生しないよう、水分や湿度、汚れに気を付けなければならない。もし濡れてしまった場合は、水分が残らないよう適切な対処を行う必要がある。

虫による食害を防ぐため、汚れと湿度に注意する。埃や小さなごみが付着してしまった場合は、直ちに除去する必要がある。それらを放っておいてしまうと、カビや虫の発生の原因となってしまう。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

一見、頭が大きいので倒れそうだが、実は支えなしでの自立が可能である。そのためがちがちに固定する必要はなく、図1のような首のサイズに合わせた透明な道具を作成し、それを固定するだけで大規模な振動でなければ問題なく展示が可能である。触れることができないようにショーケースの中で展示し、Livly Islandの世界観が感じられる、ゲーム内で購入することで入手可能なリヴリーたちのアイランド(家)の中から冬仕様のもものを選択し、立体的にしたセットを使用する。図2だが、これだととても大きな展示用のセットになってしまう。そのため、このセットを四分の一ほどのサイズで制作するか、または背景にアイランドのイラストを使用し、資料のサイズに適したショーケースを使用した展示法も考えられる。

この資料を展示する博物館に、「イベント限定ミドルサイズぬいぐるみ」の多地域限定のものがあるのであれば同じセット内で展示をする。又は、ほかのシリーズのピグミーのぬいぐるみやグッズがあるのであれば、この資料の付近に展示する。

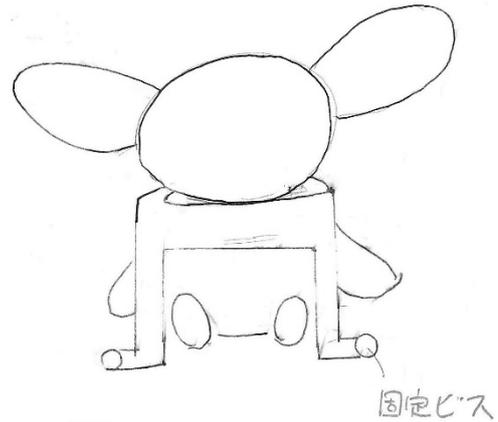


図1



図2 もみの木島 [リヴリーアイランド コンプリートブック 参照]

レーベル (Label)

展示物を一言である程度理解できるような、タイトルになるよう意識した。

北海道限定のカラーリングである雪の白を基調としたラベルにしたかったが、それではシンプルすぎるため雪が降る冬を連想させるような寒色の色でまとめた。ぬいぐるみが資料であるため、柔らかな丸さがありつつ見やすいUD デジタル 教科書体 NP-Bを使用した。内容は、数量が限られた貴重なぬいぐるみであることに焦点を当てた。

北海道限定カラーのピグミー

Livly Island (リヴリーアイランド) のキャラクターであるピグミーの「イベント限定ミドルサイズぬいぐるみ」である。この白いカラーリングのピグミーは、300体のみ製造された北海道限定カラーである。2006年にアミューズメントスペースのUFOキャッチャーでのみで入手可能であった。一体一体にシリアルナンバーが割り当てられている貴重なぬいぐるみである。

博物館資料ドキュメント 『Wii ゴールデンハンドル』

人文学部日本文化学科 1 年 佐々木 円香

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料は「Wii ゴールデンハンドル」であり、現所有者は佐々木円香である。

この資料は中国製で、型名は「RVL-024」であり、外形寸法は最長横 18.0 c m、縦 18.0 c m、厚さ 4.6 c mで、質量は約 170 g である。材質はプラスチック部品および金属部品である。正面の長方形型の凹部に、任天堂株式会社によって 2006 年から販売されていた「Wii リモコン」の収納部、側面左側に「ポインター窓」、背面右側に「B ボタン」があり、上部、下部左側、下部右側に持ち手のための穴が空いている、ほぼ円形の自動車のハンドルの形をしたものである。なお、このレポートでは、左・右などの向きをすべて「観察者から見た」左・右とする。

この資料の特徴は、名称にもあるとおり金色の見た目をしていることである。この資料は任天堂株式会社によって 2008 年から販売されていた「Wii ハンドル」のように市販で購入できるものではなく、任天堂株式会社が 2003 年から 2015 年の間に web 上で運営していた会員制のポイントサービスである「クラブニンテンドー」の 2008 年度プラチナ会員特典の選択肢の一つとして配布していたものであるため、非売品である。なお、「クラブニンテンドー」の会員には一般会員、ゴールド会員、プラチナ会員の 3 ランクがあり、最高ランクであるプラチナ会員になるためには、購入した任天堂株式会社のゲームソフト及びゲーム機に同封されているシリアル番号を「クラブニンテンドー」サイト内で入力するなどして、年度内に合計 400 ポイントを集める必要があった。

この資料の正面下部には、「Nintendo®」のロゴの凹みがあり、正面凹部には左側に「Wii リモコン」の B ボタン部分用のより深い凹みがあり、その右側には、五段構成で上から「RVL-024」の型名、「MADE IN CHINA」、「CE」マーク^(注1)、「D-63760」、「GroBostheim」の文字列の凹みがみられる。また、その右側は表面の金色よりも少し濃い金色をしていて、その上部には、「Wii リモコンを使用する時は Wii リモコンジャケットを装着してください。」と白い文字でプリントされ、下部左側に「Wii リモコンジャケット」、右側に「Wii リモコン」の図、そして右下の「RVL-HAD」の小さい字が白い文字でプリントされている。更にその右側には、「Wii リモコン」のストラップを通すための直径約 2.5 c m の円形の穴が空いている。正面凹部の四隅付近には、「Wii リモコン」がこの資料に直接当たらないようにする弾力性のあるストッパーがある。背面真ん中には直径約 5.0 c m の円の輪郭内に「Wii」のロゴが配置されている。この円の輪郭とロゴの部分は鏡になっている。また、背面には上部左側、上部右側、下部左側、下部真ん中、下部右側にそれぞれ一箇所ずつネジ穴がみられる。

この資料は、「Wii リモコン」を凹部に装着した状態で、任天堂株式会社によって 2008 年

から販売されていた Wii 専用ゲームソフト「マリオカート Wii」をプレイすることで、単に「Wii リモコン」を横に持ってプレイするよりも、実際にハンドルを握って運転している感覚が出る。

(注1)

「CE」マークとは、ヨーロッパ連合によって定められた安全基準条件を満たす製品につけられるマークである。このマークがついた製品のみ、ヨーロッパ連合加盟国、欧州自由貿易連合加盟国、トルコなどへ輸出することができる。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

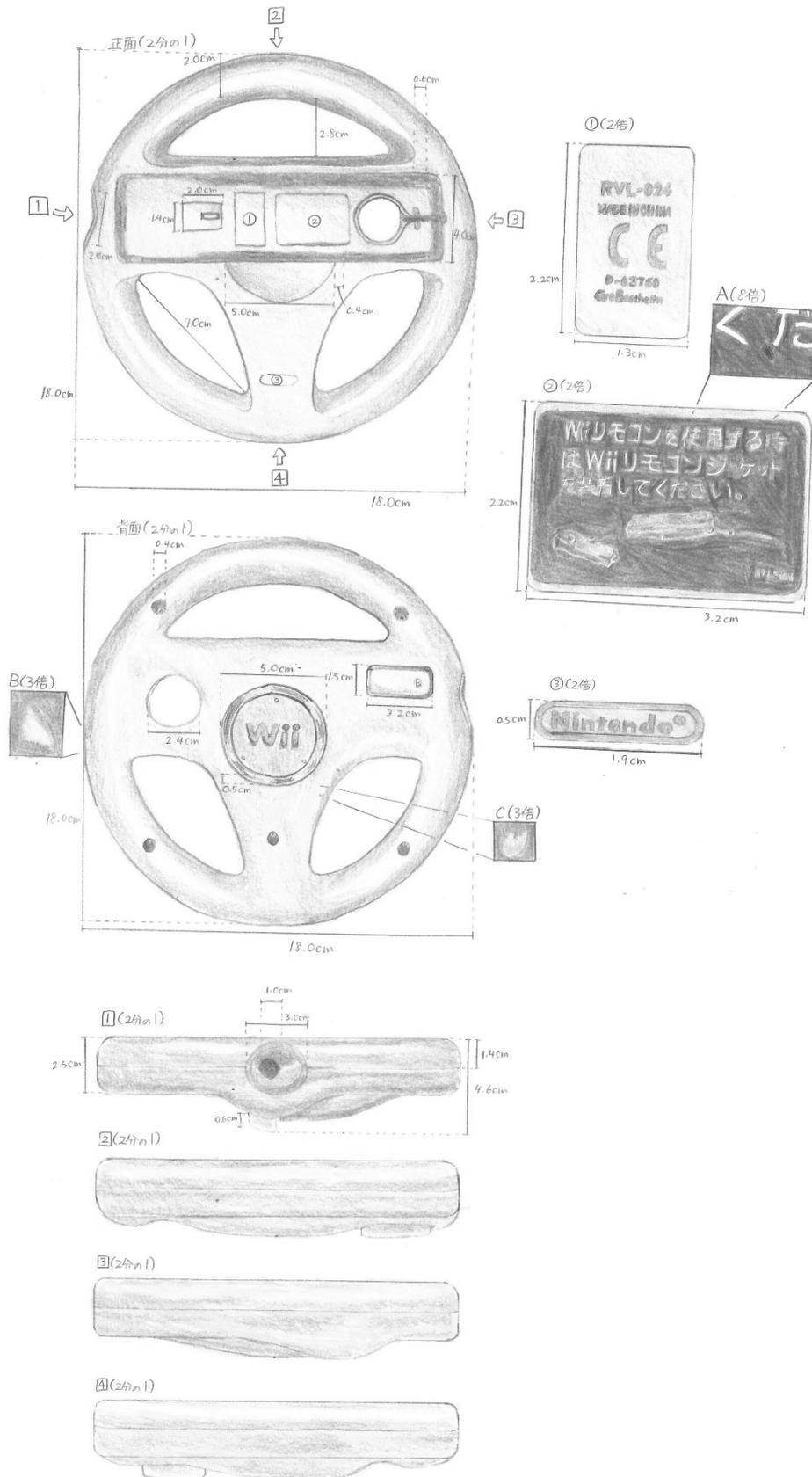
この資料は現所有者が7歳であった2009年の春頃(正確な日付は不明)に、2008年度プラチナ会員の特典として、クラブニンテンドーから配布されたものである。現所有者を含む家族4人は任天堂が販売したゲームが大好きであり、家族の人数分ゲーム機を購入したり、多くのゲームソフトを購入したりしていた。毎年度「クラブニンテンドー^(注2)」のプラチナ会員を維持するため、年度内に400ポイントがたまった段階で、シリアル番号の入力を次年度に回していた。それにより2008年度もプラチナ会員になり、その特典の選択肢の一つにこの資料があり、この資料を特典として頂くことにした。

この資料は、「マリオカート Wii」をプレイする際に、現所有者が「Wii リモコン」に装着して2009年から2021年の現在にかけて使用しているものである。12年近く使用しているうえ、他の「Wii リモコン」や「Wii ハンドル」などと共に箱に無造作に入れて保管しているため、一部で塗装が剥がれたり汚れが付着したりしている箇所がある(詳しくはコンディション・レポートで後述する)。

(注2)

「クラブニンテンドー」では、任天堂株式会社が販売するゲーム機やゲームソフトなどに同封されるシリアル番号を登録すると、購入したものに依じてポイントが加算され、そのポイントによって会員のランクが決められていた。ゲームソフトの場合、「2999円以下」「3000～4999円」「5000円～」(税別)の3区分で加算されるポイントが決められ、ゲーム機などの場合は個別で加算されるポイントが決められていた。例えば「マリオカート Wii」の場合だと5524円(税別)のため、「5000円～」区分の30ポイントが加算された。また、予約や早期購入、プレイ後のアンケートによるボーナスポイントの加算制度もあった。なお、会員のランクについては前述の通りである。更に、集めたポイントを使って任天堂株式会社のオリジナルグッズと交換することもできた。

イラストレーション (Illustration)



コンディション・レポート (Condition Report)

オブジェクト・ディスクリプション・レポート-2で前述したように、この資料は12年近くにわたって使用してきたものであり、他のゲーム機とまとめて箱に入れて保管してきたものであるため、塗装が剥がれたり、汚れが付着したりしている箇所がある。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート-1で前述した、正面凹部の「Wii リモコンを使用する時は Wii リモコンジャケットを装着してください。」の文字がプリントされた部分の中央に、緑色の汚れが付着している（イラストレーション・A参照）。この汚れが何によるものか、いつ頃付着したものかは不明である。

また、背面左端中央部に、塗装剥離がみられる（イラストレーション・B参照）。塗装剥離の正確な原因は不明であるが、他のゲーム機とまとめて保管していた際に摩擦などで塗装が剥離したものと思われる。他にも、この剥離がみられる場所が、この資料を使って「マリオカート Wii」で遊ぶ際に右手の人差し指付け根が接する部分であることから、手の油分や汗によるものとも考えられる。

更に、背面真ん中の円の右下にも塗装剥離がみられる（イラストレーション・C参照）。これも正確な原因は不明であるが、Bとは異なり剥離部分が若干凹んでいるため、Bよりも強い摩擦が生じて塗装が剥離したものと思われる。なお、この部分は「マリオカート Wii」で遊ぶ際に手が触れない場所であるため、手の油分や汗によるものとは考えにくい。

この資料は使用する時のみ箱から出しており、それ以外は箱に入れて光の当たらない場所に保管していたため、上記の汚れや塗装剥離が光によるものとは考えにくい。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

この資料は全体的に硬質で、多少の衝撃には耐性がある。しかし、摩擦などの外部衝撃による塗装剥離の可能性がある以上、なるべく摩擦や衝撃を与えないように取り扱う必要がある。そのため、取り扱う際にはネックレスやブレスレット、指輪などのアクセサリ、腕時計などを外し、爪も短く整えておくのが望ましい。また、塗装剥離が手の油分や汗によるものである可能性も捨てきれないため、可能であれば手袋を着用した状態で取り扱うのが良いと思われる。素手でこの資料に触れた際には、取り扱い後に水気のないタオルなどで拭き取ることが望ましい。リクワイアド・エンバイロメントで前述したが、この資料はプラスチック部品と金属部品で構成されているため高温と水分に弱い。そのため高温のものを近づけない、水気のあるものに触れた場合はしっかり水分を除去してから取り扱う、湿潤な環境で取り扱わないのが良いと思われる。劣化の進行を防ぐため、紫外線を浴びる環境で長時間取り扱うことはなるべく避ける。言うまでもないが、多少の衝撃に耐性があるからとはいえ破損に繋がる可能性があるため、誤って床などに落としたりすることのないように持ち方には十分に注意する。元々付着していたゴミやホコリに関しては、除去するかしないかをよく検討する必要があるが、取り扱いの過程の中で新たに付着したものに関しては、可能な限り除去するのが望ましい。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

オブジェクト・ディスクリプション・レポート-1で前述したように、この資料はプラスチック部品と金属部品から構成されている。

この資料の大部分を占めるのはプラスチック部品である。プラスチックは高温下で変形、変性することがあるため、高温下での保管は避けるのが良いと思われる。また、紫外線や水分によって劣化が進むことがあるため、光が当たらない暗所での保管や水分のない場所での保管が良いと思われる。そのため取り扱いの際には布製の手袋を着用するのが良いと思われる。

また、この資料は一部ではあるが金属部品が使用されている。プラスチックと同様に高温下で変形、変性することがあるため、高温下での保管は避けるのが良いと思われる。水分も錆を引き起こすことがあるため、水分のない場所での保管が良いと思われる。

湿度に関しては、湿度70%以上の環境下で長期間保管するとカビが発生する可能性が高くなるため、湿潤な環境では保管しないのが良いと思われる。

以上のことから、この資料は室温程度の暗所で湿度が高すぎない場所に風通し良く保管するのが良いと思われる。

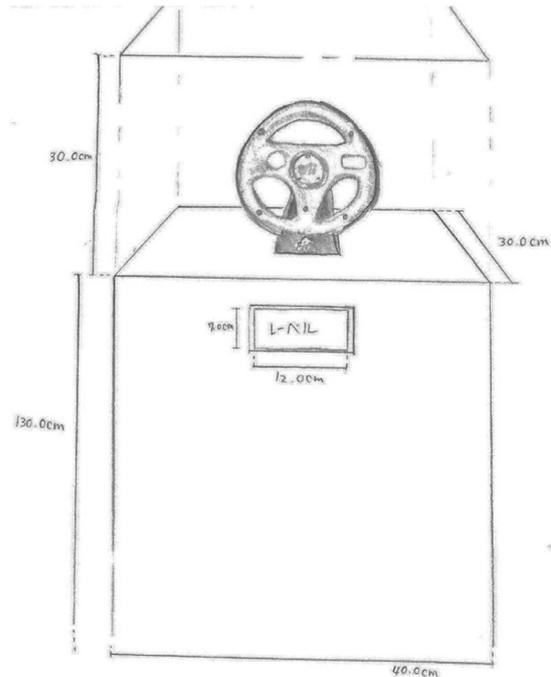
ここまでの資料保管の際の環境設定である。ここからは資料保管の際の保管方法について述べていく。

この資料は凹凸が激しく複雑な構造をしているため、ホコリが入りやすい。したがって、オブジェクト・ディスクリプション・レポート-1で前述した正面の長方形型の凹部、背面のネジ穴5箇所アシッドフリーの詰め物をするのが良いと思われる。また、一部の塗装剥離が摩擦によるものである可能性があるため、これ以上の摩擦を最少にするため、摩擦抵抗の少ないものの上に置いて保管するのが良いと思われる。更に、害虫の侵入などを防ぐため、近くには脱酸素剤を置いておく。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

この資料は任天堂株式会社から配布された際に専用スタンドが同封されていたため、展示するにはこの専用スタンドに置いた状態にする。展示のコンセプトは、「クラブニンテンドー」の特典であることがわかるようにすることである。この展示を観に来る客は、「クラブニンテンドー」のことを知っている元会員などを想定している。壁に隣接していない130cmほどの高さの水平な展示台の上にこの資料を乗せ、この資料を360度どこからでも見ることができるようにする。専用スタンドは紙製のため、耐久性が心配な場合は専用スタンドの空洞部分に重量のあるものを入れたり、この資料にピアノ線をつけて展示台に固定したりすると良いと思われる。この資料の周りには、この資料に関係のあるもの、例えば「マリオカートWii」のゲームソフトジャケット、「Wiiリモコン」、また、この資料の特徴がわかるように市販の「Wiiハンドル」を置くと、「クラブニンテンドー」の特典の特別感を伝えることができるほか、2008～09年頃の「マリオカートWii」の思い出を観に来る

来館者に蘇らせることができるようになるのではないかと思う。また、近くにモニターを設置し、「マリオカート Wii」のプレイ映像を流すことも効果的であるように思われる。ホコリや水分などの付着を避けるため、ガラス張りにするほか、害虫の侵入を防ぐために脱酸素剤を置いておくのが良い。この資料は紫外線に弱いいため、展示用のライトは紫外線が出ないものを使用し、直射日光が当たらない場所に展示することが望ましい。



レーベル (Label)

「クラブニンテンドー」の特典に関連する資料ということで、明るく楽しい雰囲気を出せるように「HGP 創英角ポップ体」を使用した。また、資料名の「Wii ゴールデンハンドル」の文字は、「ゴールデン」が伝わるように金色（219、180、3）を使用し、「ゴールデン」の質感を出せるようにワードアートのアクセントカラー4；面取り（ソフト）を使用した。なお、ここでの色の表し方は（R、G、B）とする。それ以外の文字は灰色（165、165、165）を使用した。背景の色は薄い黄色（255、250、240）を使用し、縁は「プラチナ会員特典」であることを伝えるためにプラチナ色（236、235、244）を使用し、これも質感を出せるように 3-D 書式の面取り：上（ソフト ラウンド）を使用した。更に、右下には図形を組み合わせることでこの資料の背面の輪郭を作成し、一目で「Wii ゴールデンハンドル」のレーベルであることがわかるようにした。

Wii ゴールデンハンドル

**クラブニンテンドーの 2008 年度プラチナ会員特典のひとつ。
マリオカート Wii をプレイする際に Wii リモコンを装着して遊ぶと
プレイヤー名の後ろに Wii ゴールデンハンドルのマークがつく。
市販の Wii ハンドルとは異なり、全面金色仕様になっている。**

2009 年・中国製
制作元：任天堂株式会社
現所有者：佐々木 円香 氏



オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料はぬいぐるみキーホルダーである。パーツごとに刺繍や縫い合わせなどが施され、中に詰め物がなされたボールチェーン付きのぬいぐるみである。ぬいぐるみの材質は綿・ポリエステル・ポリウレタンが使われた布や糸に加えて染料（成分は不明）がある。そして付属品であるボールチェーンの材質は鉄であり、金メッキ加工（布と糸と同様、成分は不明である）が施され、そこに紙が付いている。

この資料の正式名称は「ちびぬい Sindy（村上）」であり、日本の芸能事務所「ジャニーズ事務所」の所属のアイドルグループ「関ジャニ∞」のメンバー「村上信五」をイラスト化（デザイナーは明かされていない）し、ぬいぐるみにしたものである。そのため、「村上信五」の特徴的であるたれ目と八重歯、背中のはくろ、メンバーカラーの紫がこの資料にも顕著に反映されている。

全長約 15.0 cm、幅は最大約 10.0 cm、重さは 41.0 g。パーツごとに見ていくと、頭から顔にかけての長さは約 8.5 cm、幅は約 9.0 cm、厚さは最大約 7.0 cm。全身が基本的に短い起毛がある布で作られており、中には柔らかい何かが詰められている。髪色は赤茶色。前髪は立体的になるような用法で縫われており、顔面から 0.7~1.0 cmほどの厚みがある。この資料の足が向いている方を正面とし、上手側はカーブを描きながら約 8.0 cm、下手側は同様にカーブを描きながら約 5.0 cmあり、七三分けのような髪型になっている。皮膚の色は薄橙色。耳の長さとは幅は上手側が約 2.0 cm、幅 0.8 cm、下手側は約 1.5 cm、幅は約 1.0 cm。黒い眉毛は約 1.7 cmでそれぞれ内側の約 0.5 cmが目と密着していて、外側になるにつれて下方向にカーブを描きながら逆ハの字になっている。目の部分は直径約 1.8 cmで、白目のなかに薄橙色（皮膚の部分より橙が強い）をした 1 cm程の虹彩があり、その中心に約 0.2 cmの黒い瞳孔がある。眼球の上には最大約 0.5 cmの薄橙色の二重まぶたが内側から外側につれて下がるように位置している。口は約 1.1 cm開いており、薄橙色（虹彩とは異なり、口内の方が若干ピンク色が強い）の口内が見え、左右にそれぞれ 0.5 cm程の八重歯がある。これらの眉毛・目・口はそれぞれ刺繍糸で表現されている。頬は口内と恐らく同じ色で、目の約 0.3 cm下辺りに化粧品のチークパウダーのようなもので色付けされている。腕（胴と縫い合わせられている位置）から手の長さは約 3.0 cmで、そのうち手の長さが約 2.0 cmを占めているが、厚みは手も腕も 1.0 cm程である。脚は長さが約 1.5 cm、厚みは足にかけて少しずつ厚くなり、0.5~1.4 cm程度。足の部分は靴のようなものを白い布で表現されており、足の長さは約 3.5 cm、幅は約 2.5 cmである。服は着脱可能で、白と紫の 0.7 cm幅のボーダーに紫の縦最大約 1.0 cm、横最大約 1.5 cmの∞マークがついたTシャツ（襟ぐり約 4.5 cm、裾約 7.5 cm、袖の長さ約 1.0 cm、袖幅約 1.7 cm）と紫色のズボン（ウエス

ト幅約 5.0 cm、股上約 3.0 cm、股下約 0.6 cm) を身に着けている。服を脱がすと全裸状態にすることができる。胴の長さとは約 4.0 cm、幅が約 6.0 cm。左右に首下約 1.0 cm、腕横約 0.7 cmの部分に直径 0.4 cmの乳首のようなものが茶色の糸で刺繍されている。背中部分にも、首下約 0.1 cm、腕横約 2.5 cmの場所に同様のサイズと色の刺繍がされているが、これはほくろである。お尻の部分は縦（後方から前方にかけて）約 3.5 cm、横約 5.5 cm。前方の脚と脚の間にフェルト製の縦約 0.5 cm、横約 1.2 cmの男性の生殖器を模したものが付いている。

付属品として、上手側の腕下約 0.5 cmの場所にタグ（縦約 1.0 cm、横約 2.0 cm）が付いており、「©2020 Johnny & Associates」と黒文字で記載されている。さらに頭頂部の縫い目には幅約 0.4 cmの白い紐のようなものが付いており、直径約 0.2 cmの球体が 36 個付いているボールチェーン（金メッキ加工あり）が取り外し可能になっている。ボールチェーンはぬいぐるみと商品についての使用上の注意が記載されているハート型の縦約 8.0 cm、横最大 8.9 cmの紙をくぐらせている。このハート型の紙には、一方に「対象年齢 8 歳以上 **△**ご使用上の注意 **△**」・小さな部品を使用しております。誤飲・窒息の可能性がございますので 8 歳未満のお子様には絶対に与えないでください。・本製品に無理な力を加えたり（引っ張ったり）振り回すと破損する恐れがあります。・高温多湿、直射日光、火気を避け、お子様の手の届かないところで使用・保管してください。・水濡れ、汗、摩擦等により色落ち、色うつりする場合があります。・洗濯はしないでください。汚れがついた時は中性洗剤を着けた柔らかい布で拭きとってください。・安全の為、破損・変形した場合は使用しないでください。・本来の使用目的以外には絶対に使用しないでください。お客様へ この度はお買い上げいただきまして、誠にありがとうございます。お買い上げ商品に不都合品などありました場合は、お手数ではございますが、ご購入日より 2 週間以内に下記までお問い合わせいただきますようお願い申し上げます。 ジャニーズグッズサポートセンター（フリーダイヤルのマーク）0120-382-310 【受付期間】月～金（祝祭日を除く）10:00～18:00 ※電話番号はよく確かめてからお間違えのないようご注意ください。 ©Johnny & Associates 材質 綿・ポリエステル・ポリウレタン・鉄（検針済）MADE IN CHINA（プラマーク）外装：PP」と記載されており、このぬいぐるみキーホルダーは中国製であることが分かった。また、一方には「KANJANI∞ 47Tour UPDATE 2019-2020」の字とともに「ちびぬい」のイラストが「関ジャニ∞」全員分プリントされている。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

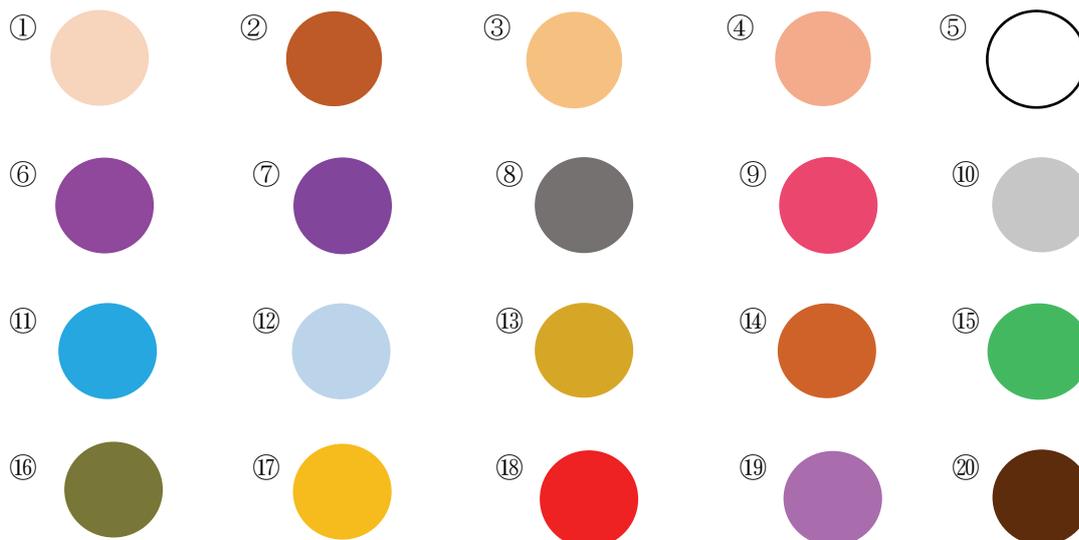
「ちびぬい」は「関ジャニ∞」のメンバーの人数（製作・発売時 5 人）分展開されており、[『関ジャニ∞47 都道府県ツアー UPDATE』47 都道府県全国制覇祈願]としてジャニーズ事務所公式通販サイト「ジャニーズショップ オンラインストア」で 1 体 1800 円(税込)、5 体セット（キャンピングカー風 BOX 付）9000 円（税込）で 2020 年 4 月 6 日正午から同年 4 月 13 日の 23 時までの期間限定・受注生産販売された。所有者の四戸里美は 5 体セット

を購入したため、この資料は5体セットのうちの1体である。この資料の正式名称「ちびぬい Sindy（村上）」の「Sindy」は「関ジャニ∞」のメンバー「大倉忠義」が名付け親であり、「村上信五」という名前から「信」を使って派生したものだと考えられる。資料は[『関ジャニ∞47 都道府県ツアー UPDATE』47 都道府県全国制覇祈願]として売り出された商品の1つだが、コロナウイルスのパンデミックにより、27 都道府県の公演を残してツアーは中止となった。服の着せ替えが可能のため、「ちびぬい」の寸法に合わせて服を手作りする人もいるようだ（所有者は行っていない）。

所有者は2020年4月9日13時55分に注文し、同日15時39分に商品代金9000円と送料660円、振込手数料147円をオンライン収納代行「Pay-easy」に振り込み、佐川急便によって所有者の自宅まで届けられた。当初の発送予定は同年6月以降とお知らせされていたが、コロナウイルスの影響もあり延期された。その後同年7月13日に発送され、所有者の自宅に届いたのは同年7月16日頃であった。届いた当初はキャンピングカー風BOX(22.5cm×17.0cm×10.0cm)にポリプロピレン素材の包装をつけたまま5体を入れていたが、同年7月下旬頃に「ダイソー 厚別東店」で28.0cm×19.0cm×14.5cmの「透明収納ケース」を324円(税込)で購入したことによりBOXごとケースに収納され、所有者の部屋のクローゼットの中心後方の本棚代わりにしてある37.5cm×26.0cm×25.0cmの段ボールの上に置かれている。資料を包装から取り出したのは本稿を書くにあたって3回目であり、いずれも所有者の部屋で開封されていて、屋外への持ち出しはされていない。

イラストレーション (Illustration)

【カラーチャート】

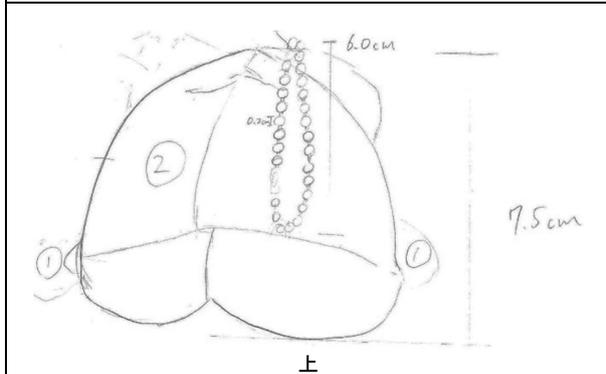




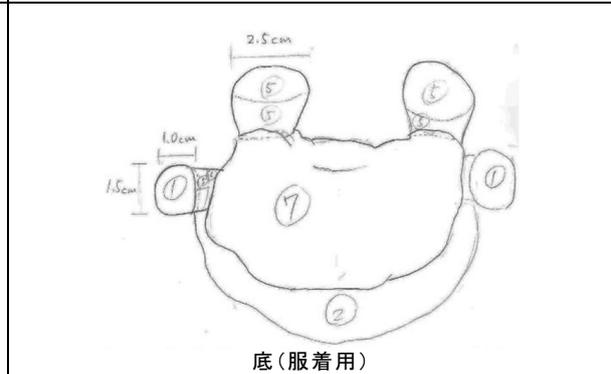
正面



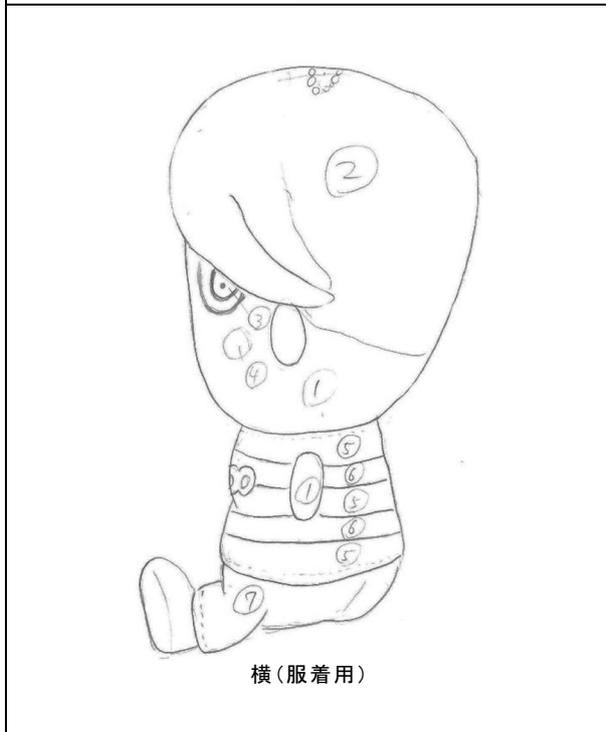
後ろ



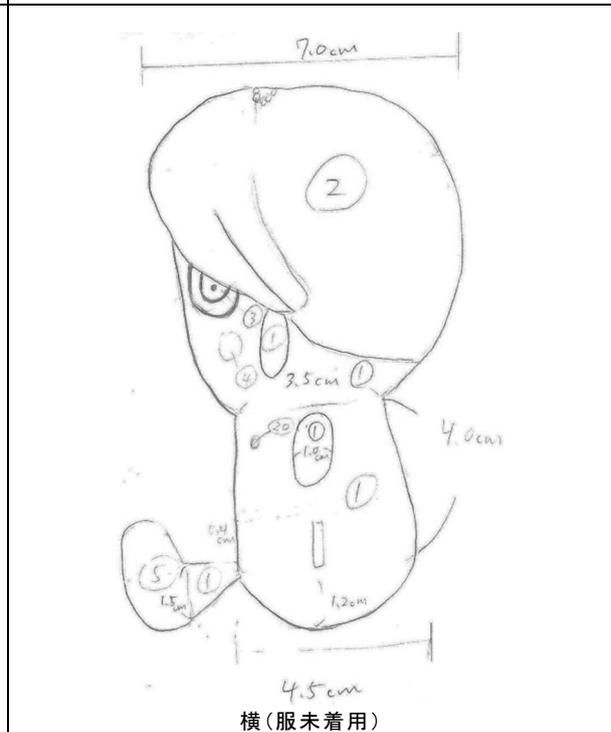
上



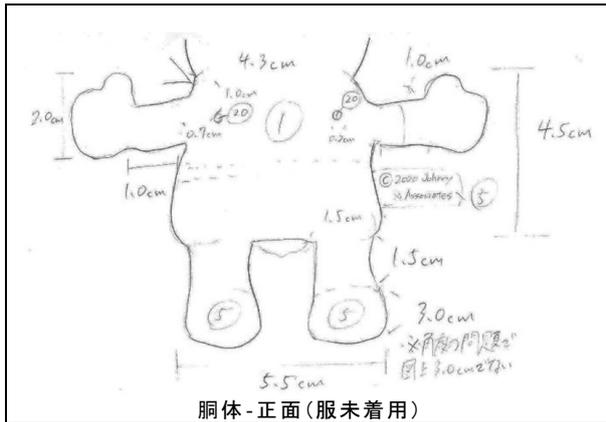
底(服着用)



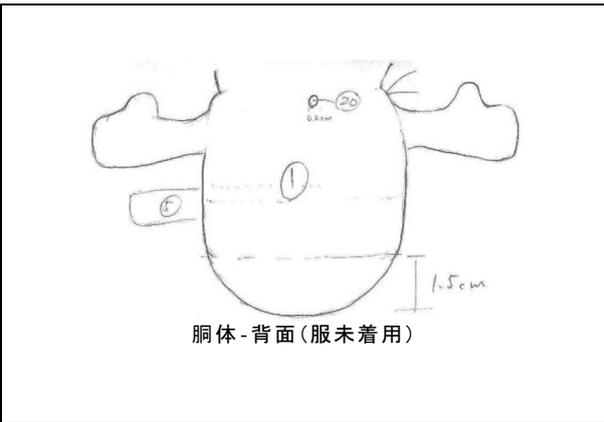
横(服着用)



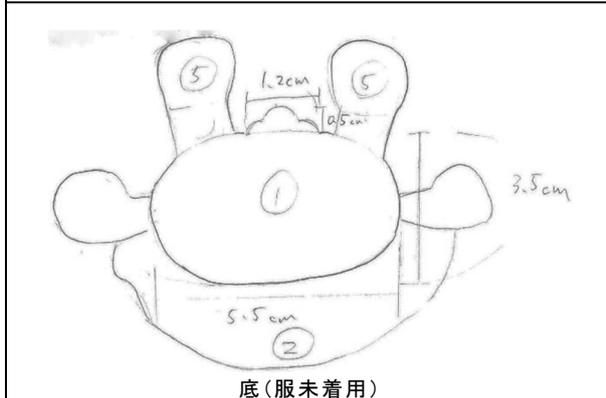
横(服未着用)



胴体-正面(服未着用)

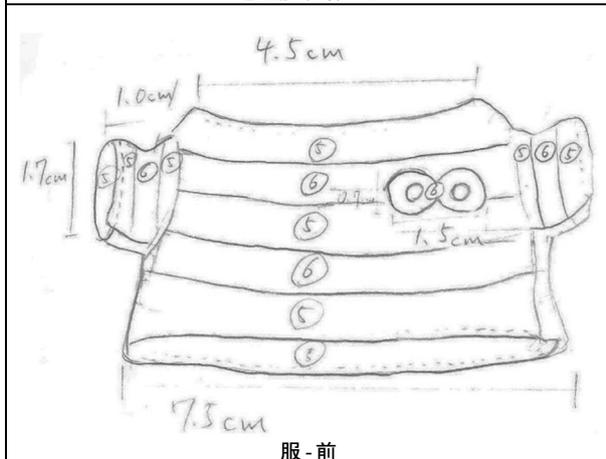


胴体-背面(服未着用)

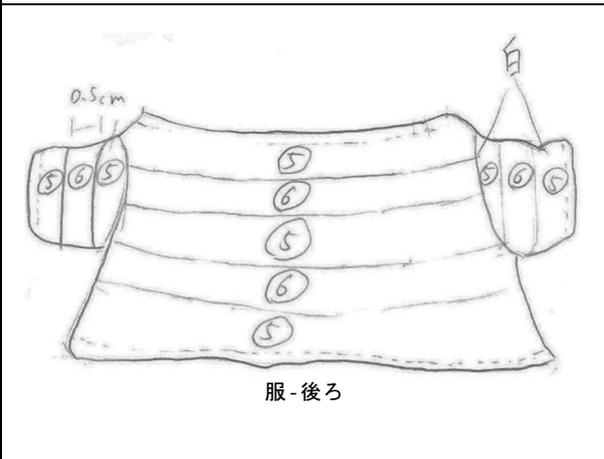


底(服未着用)

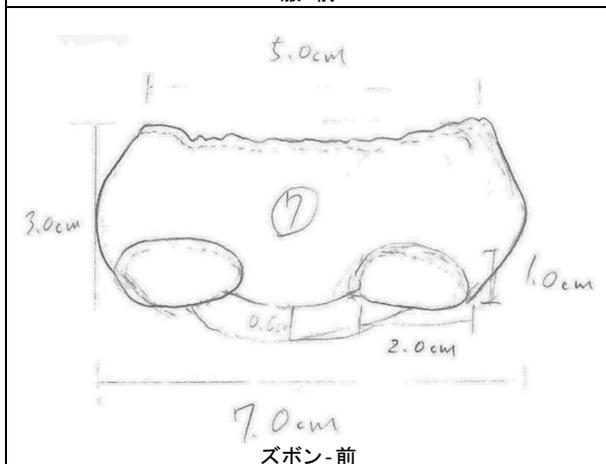
図中の番号は
カラーチャートの番号と
対応しています。



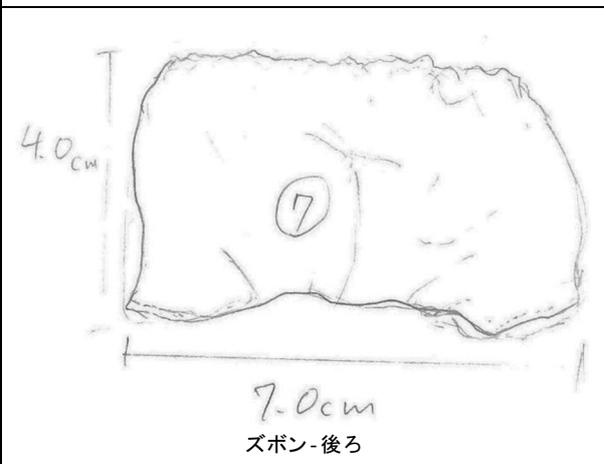
服-前



服-後ろ



ズボン-前



ズボン-後ろ

コンディション・レポート (Condition Report)

半年近く包装されたままであったためか、頭部が若干上手側に下がっており、ボールチェーンについている紙もほんの僅かではあるが資料に沿うように丸みを帯びている。下手側の首元にはそれぞれ 1.0 cm 程の糸が 2 本解れて飛び出している。これは所有者の手元に渡った時点で既にこの状態になっていたため、原因は不明であるが、しっかり緩衝材等が入っており、引っかかるようなものはなく、糸が解れることは考えにくいいため、生産時（出荷前）から解れたままになっていたと推測する。首元から約 2.5 cm 下の胴囲（ウエスト）にズボンのゴム痕がついてしまっている。これはズボンのウエスト部分に使われているゴムの威力が強かったことが原因である。そしてそのズボンを裏返すと布端から無数の糸が飛び出しているが、開封前からあったものであり、製造ラインでは布橋の加工が行われなかったと考えられる。所有者は素手で資料を扱っているため、外見からは分からないが、皮脂や汚れがついていることが予想でき、ダニなどが生息している可能性もある。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

布製のぬいぐるみキーホルダーであるので耐久性はあるが、鋭利なものや引っ掛かりやすいものに触れると穴が開いて中の詰め物が出てきてしまったり、糸が解れてしまったりする可能性がある。また、頬の部分がチークパウダーのようなもので着色されているため、摩擦を加えると色が落ちてしまうので摩擦を加えないようにする。布・糸の部分は直射日光を避け、光の当たらない場所で保管することで色褪せを防ぐことができるが、湿度の高い場所で保管するとカビやダニが発生しやすくなるので、湿度の高い場所も避ける。燃えやすいので火の近くに置いてはいけない。

ボールチェーンは、鉄製であるため錆びてしまうことが考えられるので、こちらも湿度の高い場所は避ける。また、極度に高温や低温の場所であると変形することがあるので、高温の場所や火の気のある場所も避ける。

ボールチェーンについている紙が多湿であると変形してしまう可能性があるため湿度の高い場所は避け、燃えやすいので火の近くも避ける。

以上のことから、極度の高温・低温、多湿、火の気のある場所は避けて保存する必要がある。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

ぬいぐるみ本体には耐久性があるので多少の衝撃には耐えられるが、鋭利なものや引っ掛かりやすいものが触れることにより穴や糸の解れが出来てしまうこともあるので、爪は短く整え、装飾品（腕時計やアクセサリなど）を外す。さらに摩擦による色落ちを防ぐため、過度に摩擦を加えない。燃え移る可能性もあるため、火気の近くでは作業をしない。また、極度の高温や低温の場所で作業をすると変形してしまう恐れがあるので、そういっ

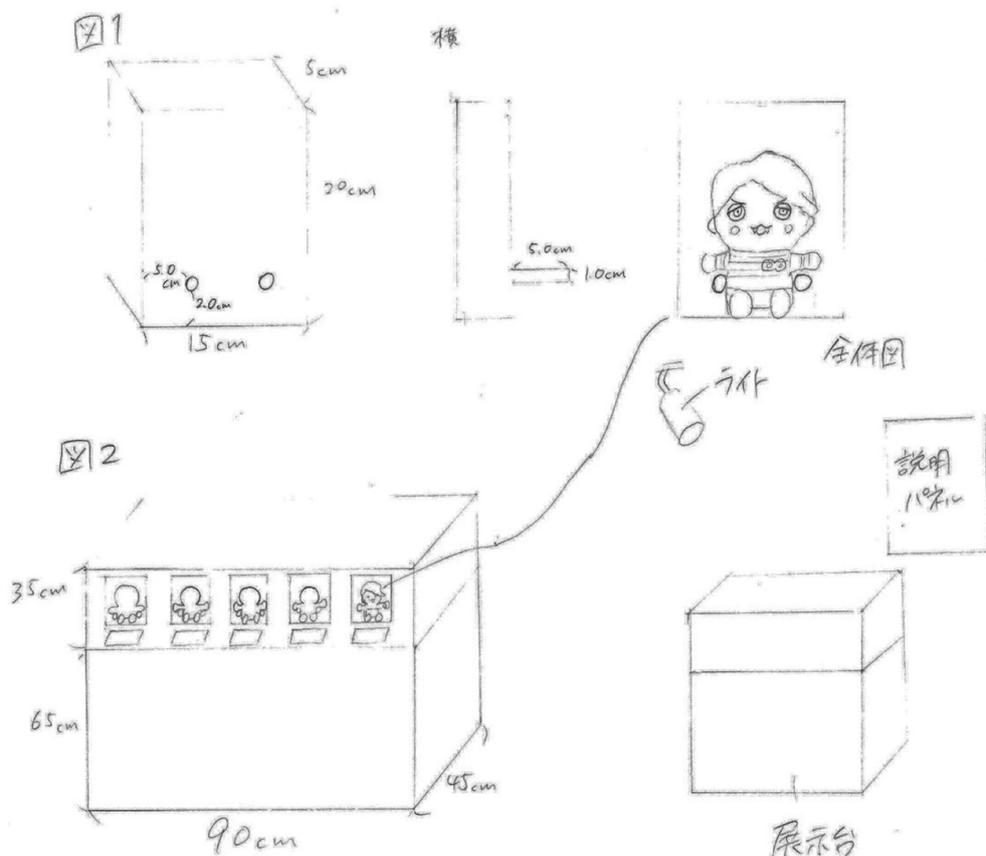
た場所での作業を避ける。

皮脂や汚れがついている手で触るとダニやカビの発生、汚れが付着してしまうので清潔な手袋などをはめるのが望ましい。万一ダニやカビが発生した場合は殺菌・消毒などの対処し、汚れが付着した場合は中性洗剤をつけた布で優しく拭き取る。ボールチェーンについている紙だけを持つような持ち方をすると紙が破けてしまう可能性もあるので、持ち運ぶ際はぬいぐるみ本体を持つ。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

「関ジャニ∞」のメンバーがモチーフであることを伝えることが重要であると考えるので、メンバー全員分の「ちびぬい」と一緒に展示する必要がある。

この資料は（他の「ちびぬい」も同様）自力で座ることが出来ない（立つことは構造上支えがあっても不可）ので、図 1（資料が倒れないように左右から透明なプラスチック棒でさらに支える）に腰かけているような感じで展示する。ボールチェーンを使用し、吊るすなどの展示方法も考えられるが、ボールチェーンにかかる負担が大きいため、避ける。縦 45 cm 横 90 cm 高さ 100 cm ほどの展示ケースに 5 体を並べて展示する。並び順は「関ジャニ∞」のコンサートのトークコーナーなどの際の規定の並び順とする（図 2）。照明は紫外線の出ないものを使用し、壁に設置する。この展示ケース付近に、ラベルに収まらなかった資料に関する説明やキャンピングカー風 BOX の写真を掲載するとより効果的な展示になる。



レーベル (Label)

ぬいぐるみキーホルダーということで、柔らかさと可愛らしさを持たせるために背景色は「村上信五」のメンバーカラーの紫を基調としたパステルカラーを使用し、フォントは「UD デジタル教科書体 NP-R」を使用した。フォントサイズは資料名が 16、説明文が 12 である。展示ケースに他のメンバーの「ちびぬい」、付近にさらに詳しい説明文を掲載することを考慮して、発売時期や価格などの詳しい説明は省くこととした。

ちびぬい Sindy (村上)

「関ジャニ∞」のメンバー「村上信五」がモチーフとなっており、メンバーカラーの紫色の服を着ている。

本人の特徴である八重歯やたれ目が一際目立っている。

「Sindy」は「村上信五」の「信」から派生して名付けられたと考えられている。

博物館資料ドキュメント 『ブーツ (coche et coche)』

工学部社会環境工学科 1 年 阿部 千更

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料は「厚底ブーツ」である。商品名は、A J ラグソールレースアップショートブーツ (ブランド: coche et coche) である。厚底のソール部分はプラスチック類を素材とし、厚さは最大 30.0mm、最小 20.0mm である。ヒールは高さ 80.0mm、周囲 220.0mm である。靴ひもを通すホールは 6 ホールのタイプで、間隔 (ホール中心間の間隔) は 17.0mm であり、ハトメは直径 10.0mm、幅 2.0mm で色はシルバーのアルミ製である。靴紐はコットン素材の幅 7.0mm 平紐で、一番上で蝶々結びされている。アッパー (甲革) は合皮素材で、ハトメ以外の色が黒の LL サイズの全長 166.0mm、一般に足のサイズと呼ばれる方向の長さ 255.0mm のブーツである。中敷はアッパー同様の素材の合皮素材でかかと部分に銀で「coche et coche」と印字されている。印字のフォントは不明である。靴底には大きく「LL」の文字とその下に LL よりも小さく「MADE IN CHINA」と異なる書体で記されている。書体の種類が異なることは明らかであるがフォント名については不明である。

ハトメとは靴紐を通す穴についている金属やプラスチックなどの環のことである。アッパー (甲革) はソール (靴底) を除いた甲を覆う靴の素材のことである。靴の内側 (靴を履いて上から見た場合、右足の靴における左、左足の靴における右; 以下、この面のことを靴の内側と表記) に金属製の黒いファスナーがついている。

靴底はつま先からヒールにかけて足の形に沿うように曲線を描いており、足の指の付け根に当たる部分からヒールにかけて上昇している。つま先は上向きに少し反っている。両足ともヒールがすり減っており、ヒール部分には土汚れが付着している。またアッパーの内側のつま先よりには互いの靴が擦れたことによって擦れた跡が確認でき、つま先内側は表面の革が削れて灰色になっている。ファスナーのスライダー胴体 (取っ手部分の金具が特に擦れる部分) は塗装が剥げて灰色が少し見えている。糸のほつれなどはない。靴全体として光沢は少なくマットな質感で手触りは少しザラザラしている。

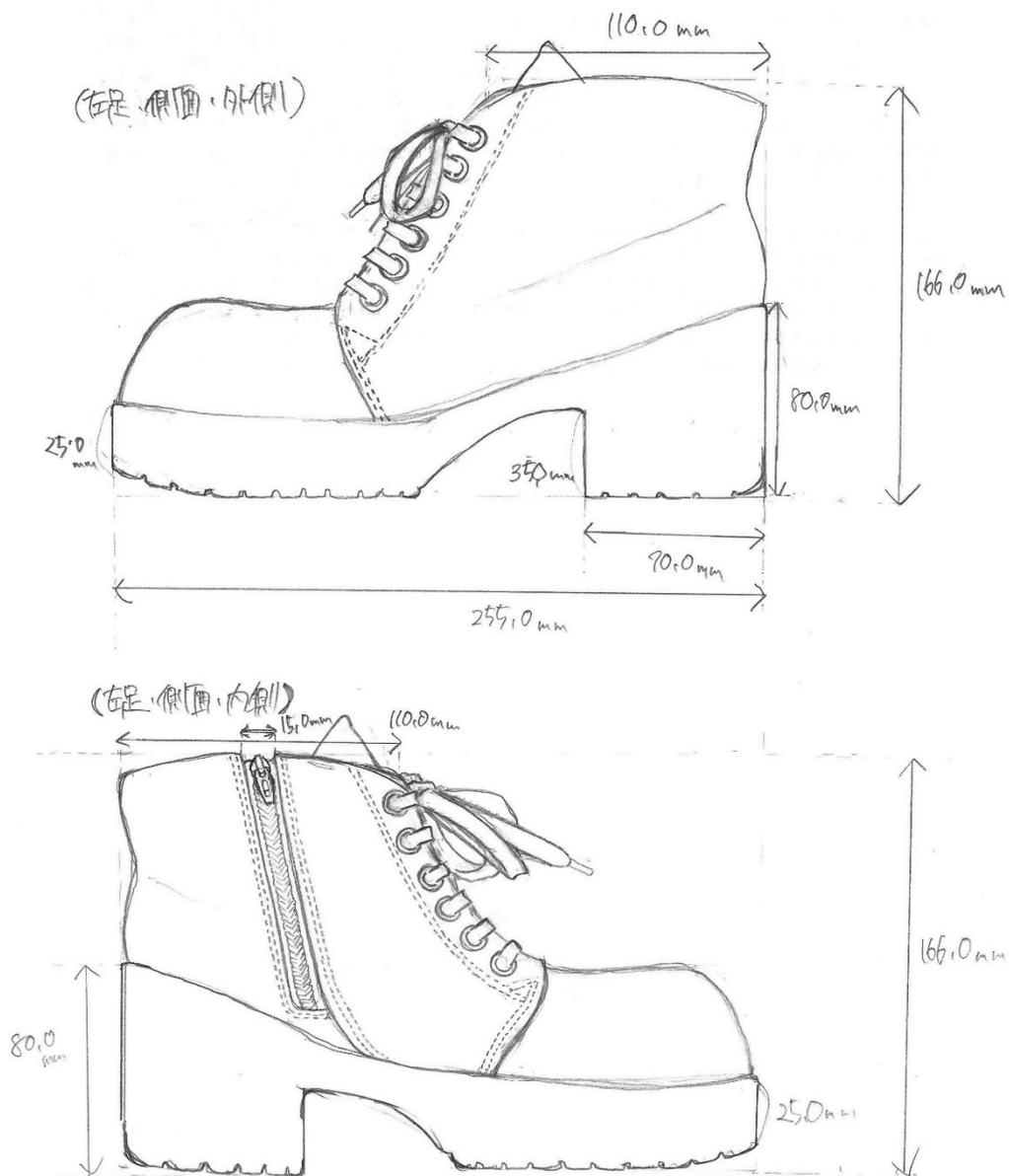
オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

この資料は 2019 年 10 月 (正確な日付は不明) 当時、現所有者である阿部千更が高校三年生のときに北海道札幌市の JR 札幌駅と直結しているショッピングモール、JR タワーにて、両親に購入してもらったものである。所有者は高校生時代、創楽部という名の軽音部に所属していた。卒業生最後の部活動として 2020 年 3 月 25 日に卒業ライブが企画されており、そのライブ出演時のために購入したものである。購入以降、登下校用の靴としても使用されており、所有者の高校卒業後の 2021 年 1 月 18 日現在も所有者に使用されてい

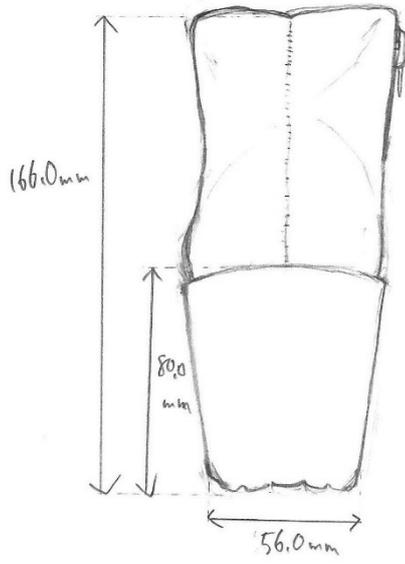
る。しかし、2020年からのコロナ流行により卒業ライブが中止となったため、購入した目的のためにこの資料が使用されることはなかった。

所有者の所感となるが、厚底であるが走りやすい。札幌市営の地下鉄 東豊線と東西線の乗り換えであれば1分ほどで乗り換えることができたエピソードを持つ。靴底がプラスチック類であるため雨天時や積雪時期は靴底が水で濡れ、非常に滑りやすい。購入からあまり時間が経過していない頃（2019年12月～2020年3月末の期間内）、上記のような条件下で登下校中に地下鉄駅構内の階段から2度、国公立大学二次試験受験前々日にはJR駅構内の階段から1度、滑り落ちた。補足的な説明であるが階段から滑り落ちた三回とも所有者が大怪我を負うことはなかった。

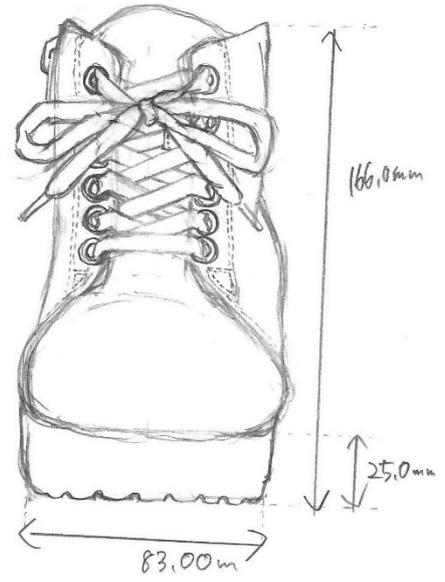
イラストレーション (Illustration)



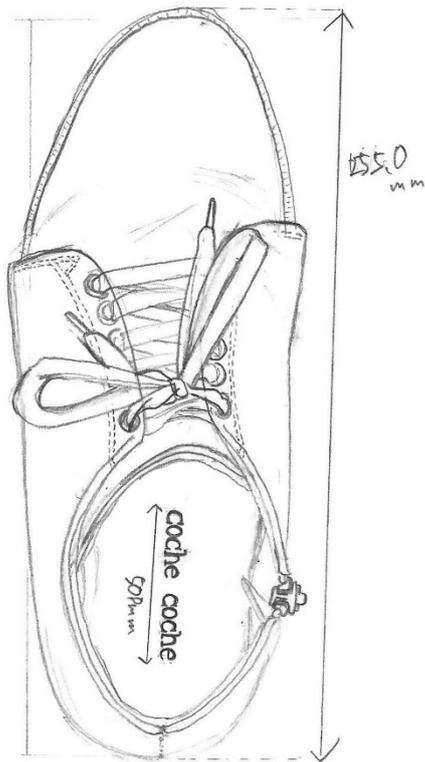
(左足·後面)



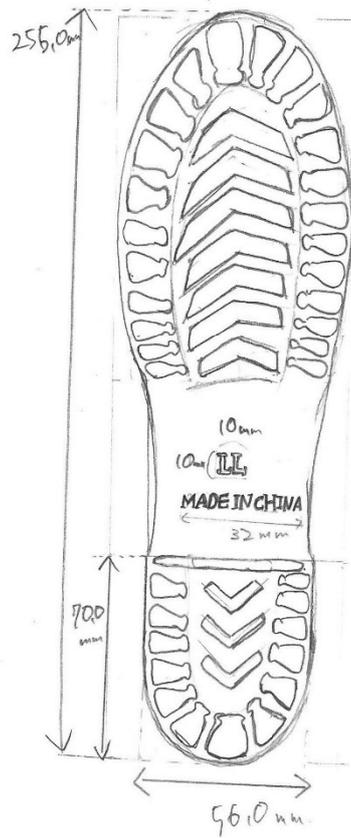
(右足·前面)



(左足·上面)

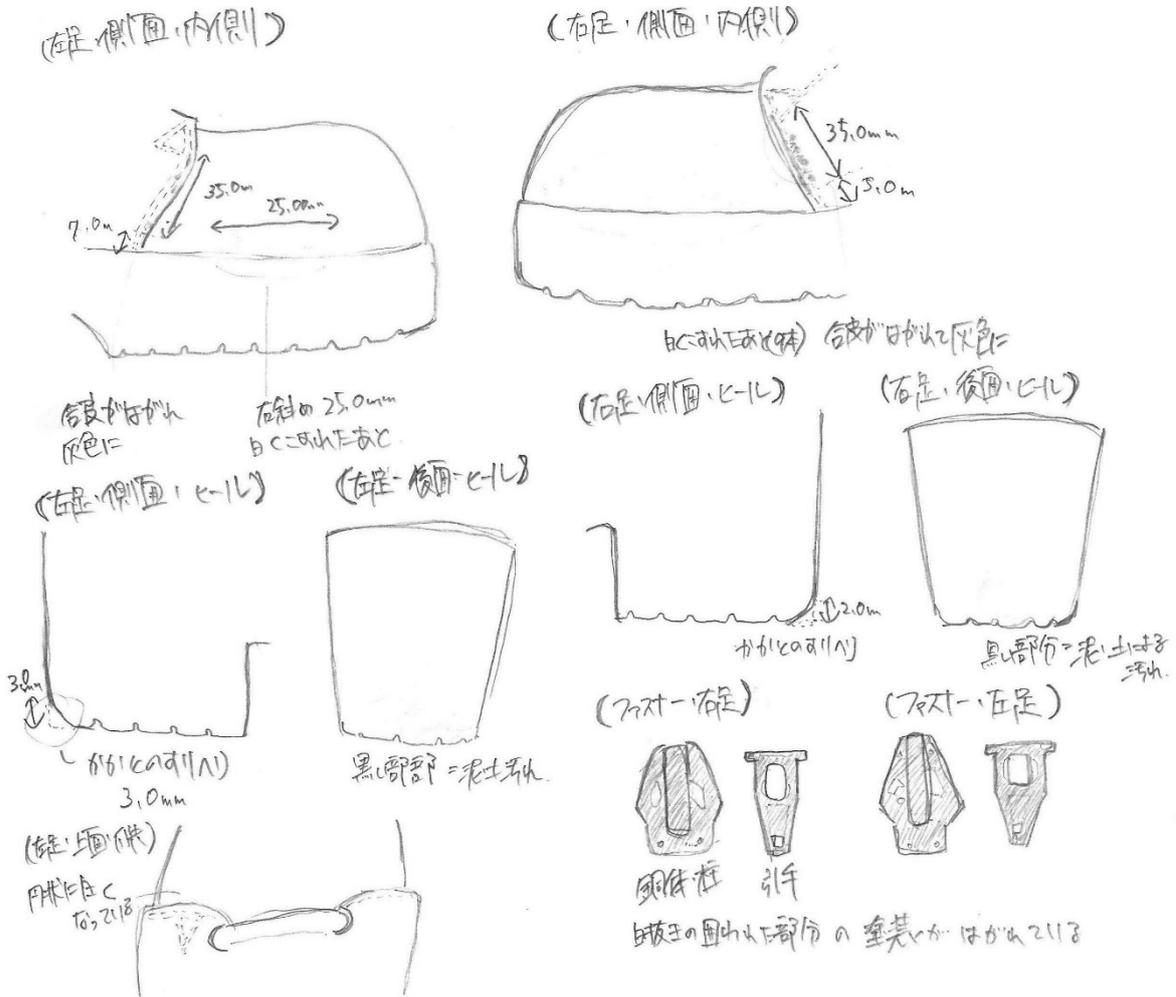


(左足·下面)



*色=全黒
(中敷印字は白)

コンディション・レポート (Condition Report)



このブーツは約1年3ヶ月ほど使用されているので保存状態は良くない。

ファスナーのスライダーは引き手と擦れる部分の黒の塗装が剥げ、銀色が見える。普段使いされているため、タン（靴紐をつける羽の下部分）と足首に位置する後面から側面に靴底の曲線に平行に履きジワが入っている。靴紐先端についている透明の長さ 17.0mm のプラスチック筒は端が白く濁っている。これは紐とプラスチックの間に隙間ができたことによるものだと考えられる。ヒールの後面部分に薄く泥汚れが確認できる。また靴の裏底の一部表面が劣化し、白く剥がれかけている。購入直後に一度防水スプレーがかけられている。雨の中や雪の中を歩いてもシミしなることはないのでスプレーの効果は未だ継続していると考えられる。

所有者が内股気味であるため、土踏まずからつま先にかけて靴の内側に靴同士が擦れた跡が多くついている。

◆右足用

靴同士が擦れたことによって合皮素材が剥がれ 10.0mm、35.0mm の灰色と茶色が混ざったような直線的な傷や薄く削れたような白く濁った 13.0~40.0mm の直線的な傷が 9 本程

度つま先内側にある。ソールから 6.0mm 離れた位置から長さ 35.0mm つま先側の皮の縫い目に沿って合皮素材が剥がれ、灰色の生地が見える。靴の裏底のかかるとに位置するヒールは 2.0mm すり減っている。

◆左足用

つま先内側に靴底に対して右斜めに 25.0mm の合皮素材が剥がれ擦れて白く薄く濁った複数の線の傷がある。つま先外側のタンは直径 5.0mm の正方形にも見える円状に薄く白くなっている。ソールから 7.0mm 離れた位置から長さ 36.0mm つま先側の皮の縫い目に沿って合皮素材が剥がれ、灰色の生地が見える。靴の裏底のかかるとに位置するヒール部分は 3.0mm すり減っている。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

アッパーは主に合皮素材であるため、劣化を防ぐために高温多湿を避け、日の当たらない風通しの良い場所に保存すべきである。特に湿度による劣化が激しいため、除湿剤等とともに保管する必要がある。また擦れた跡をこれ以上増やさないためにも、摩擦の少ない状態で空間にゆとりのある収納ボックスに保存する。

ソールはプラスチック素材であるため、劣化を防ぐため高温多湿を避け、日の当たらない風通しの良い場所に保存すべきである。また光や外からの力、熱によって変形する恐れがあるので暗所で涼しい空間のある場所で保存する。またコバルト、マンガン、銅、鉄などの金属によって劣化する恐れがあるため可能な限り金属と別に保存する必要がある。

ハトメはアルミ製であるため、腐食を避けるためにゴミ・ホコリなどの汚れや水分は取り除き、それ以上付着しないように保存する。また変形・変性や腐食を防ぐためにも高温多湿を避けてアシッドフリーの素材を使用した収納ボックスで保存する。

靴紐に使用されているコットン素材は、変形の恐れがあるため多湿を避け、また可燃性を持つため特に火気には気を付ける。また摩擦によって毛羽立つことがあるため摩擦を起こさないようにする。また退色・変色の恐れがあるため、直射日光を避け、アシッドフリーの素材を使用した摩擦の少ない収納ボックスで保存すべきである。

以上のことから高温多湿や直射日光を避け、通気性の良い状態で空間にゆとりのあるアシッドフリーの素材を使用した収納ボックスで保存すべきである。この時にプラスチック素材であるソールに金属であるハトメが直接触れないようにする必要がある。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

合皮素材やプラスチック素材で、さらに布製で縫い目もあるため、尖ったものやひっかかるものを扱う時は擦れた跡を増やしたり、糸をほつれさせる可能性があるため細心の注意を払う。取り扱う際はアクセサリや時計などの装飾品は取り外し、爪は短く整える。摩擦によって劣化が進行するため、強くこすらないようにする。また水は劣化の恐れが、酸性のものが付着すると酸化して変性する可能性があるためどちらも近づけないよう気を

付ける。ホコリやゴミの付着もアルミの腐食やカビや虫の発生にも繋がるため、それらがつかないように注意する。また高温ものを近づけると変形する恐れがあるため近づけない。手の皮質や汚れが付着すると変色する恐れがあるため清潔な手袋をはめて取り扱う。劣化や変色を防ぐため、直射日光は避ける。

布は燃えやすいため火気に注意する。またコットンは染色しやすいため染色剤を近づけないなどして色が移らないように気をつける。

プラスチック素材は有機溶剤を取り込みやすい種類である可能性もあるため修復することがあっても有機溶剤は使用してはならない。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)



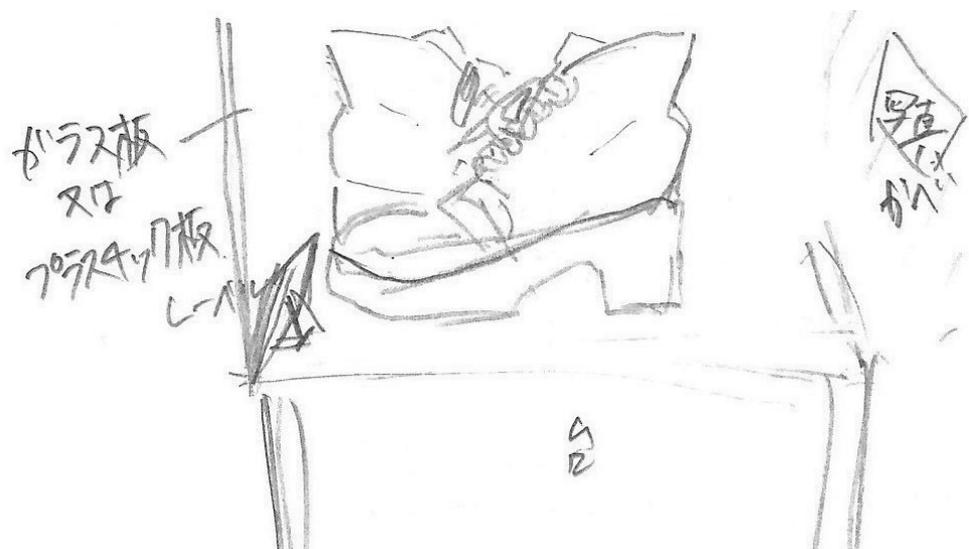
この資料は、所有者である阿部千更の出身校である札幌市立旭丘高等学校の博物館で展示するという設定である。卒業生を紹介するセクションにて、阿部千更という人物のファッション等を紹介する。

厚底であるに「機能性に優れている」とキャプションに記載しているため、厚底の高さが見てすぐに分かるように平坦な台の上に置く。左右で前後に置くことで全面が見えるようにする。

ブーツの展示ケースの隣には、所有者の阿部千更が高校生であった当時（2017年4月—2020年3月）の制服、阿部千更が出演予定であった2020年3月25日の『卒業ライブ』（COVID-19への対応として中止）でブーツと共に着用予定であった衣装を展示する。阿部千更がこれらの制服、および衣装を着用した写真も一緒に展示する。

展示空間のライトは紫外線対策を施したものを使用し、長時間の直接照射を避ける。

資料の色が黒であるため、展示の台座、および壁には暗色を使用しない。



レーベル (Label)

タイトルは”游ゴシック体ボード” 22pt を使用。説明文は” ヒラギノ丸ゴ Pro” 12pt を使用。全体が真っ黒であるため全体として黒に統一。背景黒の白地では圧迫感があり、読みづらいため背景を薄い灰色、文字を黒字にした。また”厚底”で”平紐”であることが特徴であるのでタイトルを角ばっていてなおかつ太字である游ゴシック体ボードにした。説明文は全体的に色味が暗くとっつきづらいため、ヒラギノ丸ゴ Pro をつかうことで読みやすさを追求した。レーベルとしては、パッと見て資料自体に面白みがないため文章で面白みを持ってもらえるよう、ものに関するストーリーを組み込むことで構成した。博物館としては、所有者である阿部千更の人物博物館であるという前提で記述した。

厚底ショートブーツ

coche et coche のラグソールレースアップ厚底ショートブーツ。

現所有者である阿部千更が北海道札幌市にある
ショッピングモール・JR タワーで 2019 年 10 月に購入した。

靴紐が平紐であるため機能性に優れている。

阿部千更が高校時（2017 年 4 月～2020 年 3 月）に
所属していた創楽部（軽音）で

2020 年 3 月 25 日に企画された
卒業ライブの出演ために購入された。

しかし新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の
流行のため卒業ライブは中止となり、

本来の目的は果たされずに現在（2021 年 1 月）に至る。

博物館資料ドキュメント 『ブルゾン (STUSSY)』

工学部生命工学科 1 年 片岡 小雪

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料は、アメリカ合衆国のアパレルブランド・STUSSY(ステューシー)のブルゾンであり、所有者は片岡小雪である。身丈が短い点はフライトジャケットの一種である MA-1 に酷似しているが、表地がナイロン製ではないため MA-1 とは言えないだろう。表地と裏地の材質はポリエステル、首元や袖口・裾のリブはアクリル・ポリエステル・ポリウレタンの合成繊維、ファスナーのエレメント部分は金属でスライダーと下止部分はプラスチックである。

服のサイズはレディースの M で、肩幅は 50.0cm、着丈は 68.5cm、チャックを閉めない状態の身幅は 62.5cm、チャックを閉めない状態の裾幅は 55.0cm、袖丈は 66.5cm、袖口幅は 9.0cm、重さは約 800g である。

表地は黒色の生地が多く使用されているが、資料を着用した際に袖の裏にあたる部分にロゴテープが縫われており、ロゴテープの下半分は紺色の生地が使用されている。また、両袖の裏に縫われているロゴテープはファスナーのスライダーに付いているロゴテープと同じデザインである。

裏地では紺色の生地が全体で使用されており、背襟には黒色の生地と白色の糸で“ストックロゴ”と呼ばれる STUSSY 特有のロゴが刺繍されたブランドタグが縫われている。裏地の、資料を着用した際に左側の胴体部分にあたる部分に白色の生地と黒色の文字で材質や注意事項が書かれた素材タグと、白色の生地と灰色の糸で“シャネルロゴ”や“SS リンク”と呼ばれるブランドロゴと「RN94974 CA28629 LOL」という文字が刺繍されたブランドタグが縫われている。また、素材タグには「MADE IN CHINA 株式会社ジャック Stussy Japan 0548-22-7366 stussy.jp」と書かれていることから、この資料は中国で生産された正規品ということが推測される。

袖口や裾のリブは黒色の生地が使用されており、ポケットに付いている円状に「・STUSSY・STUSSY・」という文字が彫られたボタンも黒色である。ファスナーのスライダーには黒色の生地と白色の「STUSSY」という文字と“SS リンク”が交互に、且つ上下逆に描かれたロゴテープが付いている。また、ファスナーのエレメント部分とスライダーは黒く塗装されている。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

この資料は、所有者が札幌ステラプレイス・センターの 5 階にある STUSSY で購入したブルゾンである。所有者が高校 2 年生時(2019 年)の冬頃に購入したことは記憶しているが、

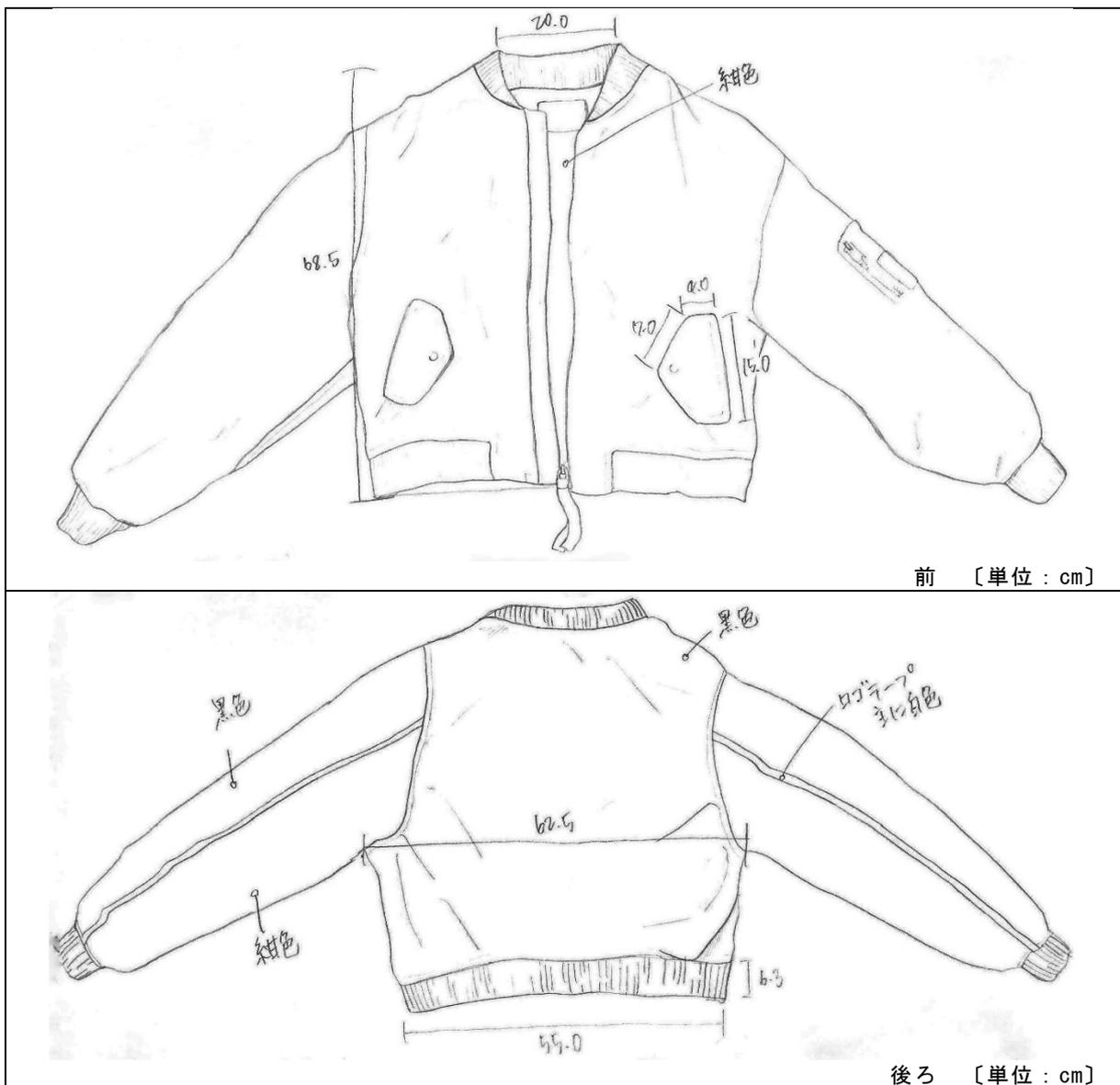
正確な日付は不明である。また、正確な価格も不明であるが、STUSSY の他のアウターの相場や同じ型のブルゾンの中古品の相場から 3~4 万円前後であったことが推測される。

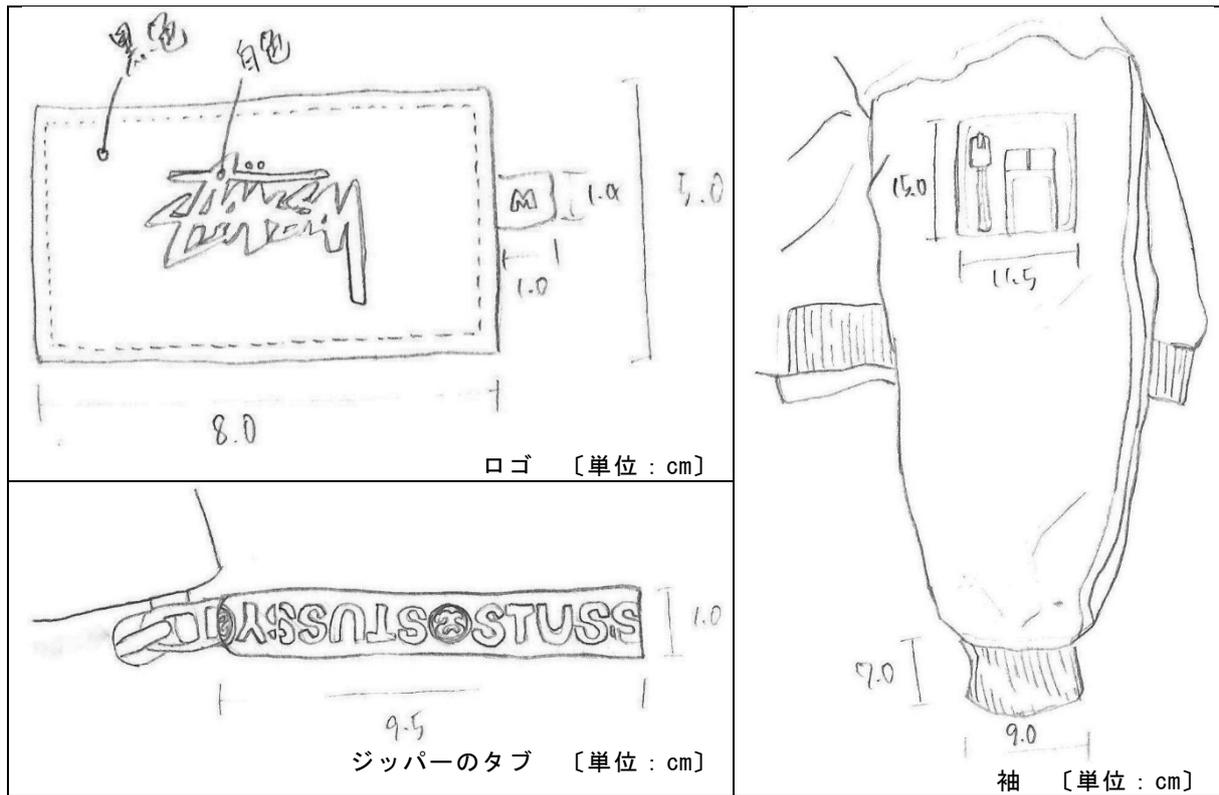
当時の所有者にとっては非常に高価なもので、アウターを買う予定がなかったにも関わらず、年始だったことや当時の所有者が STUSSY のようなストリート系ファッションブランドを好んで着用していたこと、スタッフの方に在庫限りと伝えられたことなどが重なり、衝動的に購入したのではないかと推測される。

購入後は、登下校だけでなく友人や家族と出掛ける際にも着用するなど、大変気に入って多用していることが確認できる。

STUSSY の公式ホームページと札幌ステラプレイスセンターの店舗で調査したところ、同じ型のブルゾンは現在販売していないことが確認できた。

イラストレーション (Illustration)





コンディション・レポート (Condition Report)

所有者である片岡小雪は気に入ってほぼ毎日着用していたが、大切に扱っていたため目立った傷や汚れはない。しかし、首元や袖口、裾のリブが少し毛羽立っており、糸がほつれている部分を数か所確認できる。資料を着用した際に左側となる袖口の糸がより強くほつれているが、生地と糸の色が同じ黒色で目立たない。

リブの毛羽立ちは、着用時に生じた摩擦が原因であると考えられる。袖口の糸のほつれは、手袋を着用した際に袖口が大きく広がり負担が掛かったことで生じたと考えられるが、裾の糸がほつれている原因は不明である。

また、ファスナーのエレメント部分とスライダの塗装が一部剥がれ、金属の色がむき出しになっている。ファスナーは2~3度のみ閉めただけでほぼ使用していないため、購入当時からのものか、洗濯時に生じた摩擦によるものだと考える。シガレットポケットに付いているファスナーのエレメント部分とスライダ部分の塗装も同じように一部剥がれ、金属の色がむき出しになっている。1度もシガレットケースを使用することがなく、上記のファスナーより塗装が剥がれていないため、所有者が公共交通機関などを使用した際に壁にもたれて発生した摩擦が原因ではないかと推測する。

素材タグは購入当時オフホワイトであったが、現在多少の黒ずみや黄ばみが確認できる。黄ばみは黄色の服と一緒に洗濯してしまった後に確認したため、色移りしたことが原因だと考える。一方、黒ずみはレポートを書くにあたって資料を細かく調べた際に気づいたものであり、原因は不明である。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

この資料の大部分はポリエステル製であるため耐久性があり型崩れしにくいですが、かたく尖ったものに触れたり強い力を加えると生地が破れる可能性がある。また、水を吸いにくく乾きやすいなどの特徴がある。しかし、湿気を多く含んだ状態や水につけたままで放置すると脱色する可能性やカビが発生する可能性がある。また、静電気が起きやすいという特徴があるため、摩擦を軽減させることや周りにゴムなどの絶縁体を置かないようにするべきである。

袖口や裾のリブは 76%がアクリルであるため丈夫で長持ちするが、湿気を多く含んだ状態や水に濡れた状態で生地が伸びる可能性やカビが発生する可能性がある。また、静電気が起きやすく毛玉にないやすいという特徴があるため、摩擦を起こさないよう注意したり静電気を発生させにくくするために乾燥した部屋には置かないようにすべきである。熱に弱いという特徴もあるため、扱う際には火気は厳禁である。

また、全体的に光が当たると脱色や変色などの可能性が考えられるため、光の当たらない暗所での保管が適切である。

以上の理由より、この資料はカビが発生しにくい室温 20 度以下、静電気が発生しにくい湿度 65%以上、カビが発生しにくい湿度 80%以下、直射日光が当たらず着火物が置かれていない場所が保存環境として最も適していると考えられる。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

この資料は耐久性に優れているため多少の衝撃には耐えられるが、手の皮脂などが付着すると変色する可能性やカビが発生する可能性があるため、取り扱い際は手袋と長袖を着用するべきであると考えられる。また、ゴム製の手袋だと静電気を逃がすことができずに帯電してしまうため、避けるべきである。運ぶ際には、ホコリや毛くずが付着するのを防ぐために、資料全体を包み込める不織布の洋服カバーを使用するとより一層よいだろう。

かたく尖ったものに触れたり強い力を加えると生地が破れる可能性があるため、持ち運ぶ際は机の角やドアノブ等に引っ掛からない様に細心の注意を払うことも必要である。また、時計やアクセサリは引っ掛かりの原因になる可能性があるため、あらかじめ外しておく。首元や袖口や裾のリブは負荷が掛かると伸びるため、洋服カバーを使用せずに運ぶ際はリブの部分は持たないよう意識するべきである。

糸がほつれている部分は、それ以上ほつれさせないために細心の注意を払って触らないようにすることが重要で、持ち運ぶ前にほつれ部分の確認をすることが必要である。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

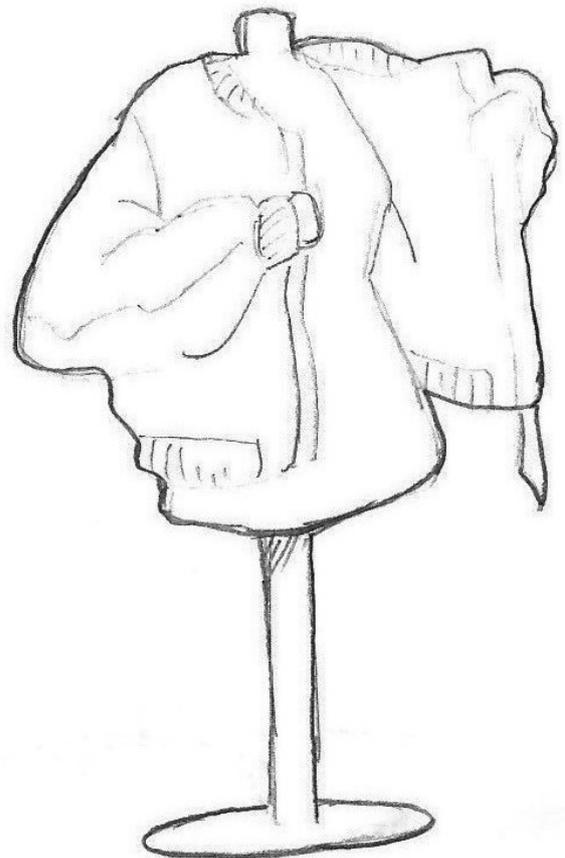


■資料の見せ方

- 袖の裏側についているロゴテープと、ロゴテープの下部分だけ紺色の生地を使っていることを見せるために、マネキンの右腕を内側に曲げる。
- 裏地が紺の生地であることを見せるために、マネキンの左手でブルズンを少し持ち上げ、外側へ広げる。
- 上記の2点を行うため、首から下、腰より上の関節が可動なマネキンに資料を着用させる。

■注意点

- 資料の生地の色の違いを分かりやすくするために、光源を作る。
- ライトの光が展示ケースのガラスに反射して資料を見づらくなならない位置に設置する
- ライトは紫外線カットの機能があるものを使用し、直接的な照射は避けるよう設置する。
- 資料の生地劣化や退色を避けるため、人感センサーで証明の ON/OFF を行う。
- キャプションが書かれたレーベルは、ガラス越しだと読みにくくなるため、展示ケースの外側に取り付ける。



レーベル (Label)

ストリート系ファッションのブランドに関する資料であるため、資料を際立たせるシックなレーベルを意識する。この資料はモノトーンであり、レーベルも同系色でまとめられていると読みにくい可能性もあるが、基本的にストリート系ファッションはカラフルな色使いだったり派手な模様が描かれているため、他の資料も展示することを考えてレーベルはシックにするべきである。

タイトルの文字サイズは主張し過ぎない 18 ポイントで、游ゴシックという書式を用いて、太字にする。文章の文字サイズはポイントで、書式はタイトルと同じ游ゴシックを用いる。

また、紙のレーベルを張り付けるのではなく、軟石に文章を彫り込んで、彫り込んだ部分に白色の塗料を流し込んだものを資料の前に展示する。

STUSSY ブルゾン

ブルゾンはジャンパーをフランス語で言い換えた言葉だが、昨今の日本では“ファッション性の優れた上着”という意味で広く知られている。

この資料は、ブルゾンの中でも人気のある MA-1 と酷似しているが、生地がナイロンではなくポリエステルである。したがって厳密には MA-1 とは言えないが、言葉の意味は日々変化しているため、この資料が MA-1 と判断される日はそう遠くないだろう。

【所有者:片岡小雪】

編集後記

本学の学芸員課程では、日本通運の美術梱包の講習を毎年計画に組み込み、予算を計上して実施してきた。しかし、昨年は中止に追い込まれ、楽しみにしていた学生たちは大いに落胆したことだろう。新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために致し方なかった処置ではあるが、他に方法はなかったか、自問自答の日々である。実際に梱包資材を計測し、裁断しながら、個々の文化財に見合った最適解を求めるなど、手作業を通じて梱包を実体験する機会は、便利さに慣れた現代社会にあってはなかなか得難い貴重な体験となる。そこで、次善の策ではあるが、国内のミュージアム施設がネット上に配信している動画を通じて、梱包に関する専門的な知識や技能に接するような機会を増やすように努力してみた。しかし、身体にとどめられた記憶と違い、頭の中の知識だけの記憶は、いかにもぜい弱な印象を与える。

緊急の対応を要するような非常事態の勃発に対し、大学でも一般企業でも、クライシスマネジメントやエマージェンシーマネジメントと呼ばれる危機管理の在り方が問われることになる。ここでは、「準備」・「対応」・「復旧」・「軽減」という4つのフェーズに分けて対処法を論じることが知られている。いったん災害や事故が生じてからでは、復旧に多大な労力と時間を要することは、東日本大震災でも明るみになった。最悪の場合に備え、資材をあらかじめ用意したり、日ごろから訓練しておく「準備」や、好ましくない事態が発生してもその被害を最小限に抑える「軽減」の重要性が認知されつつある。震災後、実際に災害が起きたらどう対処するかを、住民と自治体があらかじめ協議して決めておく「事前復興」の考えが浸透しつつある。経営論でもリスクの評価と管理において、発生の可能性が低いものの、影響度が大きいものは、保険をかけるなどして物的損失を抑えるなど、リスクを「転換」したり、発生の可能性も大きく影響度も大きいものは、いっそのこと「回避」といった対応も可能である。原発がなければ、原子力による被害が生じないのは当然であるから、事故が起きてから対応するよりもはるかに合理的なリスクマネジメントの手法になりうる。こういうリスク管理の手法に学ぶことは、博物館行政だけでなく、人生のあらゆる側面において適用可能であろう。

文化財や文化遺産の保護・継承においても、脆弱性を克服してレジリエンス（回復力、弾力性）を高めた社会を築こうとする考えが顕著になっている。3・11以降、被災経験の継承のための災害遺構や記念碑などが、防災のための地域社会の仕組みとともに注目され、今後の防災教育に活用されようとしている。被災した文化財をレスキューして応急措置を施す活動において、各分野の専門家や関係組織が包括的なネットワークを構築して対応し、われわれもその一翼を担った（本学学芸員課程学事報告書26・30号参照）。それらの経験や課題を踏まえることは、今後生じる危険性のある災害に対しても有用であろう。